

ただいま峰田で奮闘中。

とろろ～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んで転生。葡萄の樹になるはずが
峰田に・・・実に・・・なりました。

※一応、原作の流れに沿います。ですが、このキャラはそんなじゃない！とかあるかと思えますので苦手な方はバツクをお願いします。

目次

第1話

1

第2話

6

第3話

9

第4話

12

第5話

15

第6話

18

5.5話 緑谷出久

21

7話

24

8話

29

9話 びつちゃん視点

33

10話

35

10.5話 峰田父上視点

39

11話

43

12話

47

13話

53

14話

59

15話

62

16話

67

17話

73

18話

77

19話

84

20話

92

21話

99

21.5話 『試練』終了後 大人たちの会話

105

3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	2 5 話	2 4 話	2 3 話	2 2 . 5 話	2 2 . 5 話	2 2 . 5 話	2 2 話
											緑谷出久。ダイジェスト版 その③	緑谷出久。ダイジェスト版 その②	緑谷出久。ダイジェスト版 その①	
204	197	188	184	177	170	161	151	145	139	134	127	120	115	110

第1話

青年Aは歩きながら本を読む。

「あく今月も楽しかったなあT.Oらぶる。次は週刊のシヤンプ読まんとね。今週の幽奈さんは何処かなーつと……。」

自分はこの青年Aです。見ての通り少々Hな漫画が好きです。ただまあ、青年と言うには年をとって……まあ、気にしないで頂きたい。心も体も清いままなので青年で良いのだよ。むしろ少年と言っても良いかも知れない。

青年は目次を見て幽奈さんが何処に載ってるか探す。

「あつたあつた。僕のヒーローアカデミアの次か。ついでにアカデミアも読むかな。しつかし、あれだな。この漫画のこのキャラって、存在として必要なのかね？」

青年は紫色のぴったりスーツ、下半身には卵形のオムツのような衣装もとい防具を着けているキャラクターに目がいつている。

そう、峰田実である。

彼はスケベである。変態である。情けない奴である。

いまいち自分は好感が持てない。

パラパラとある程度の流し読み……

嘘だろ?!

もう一度最初から読み直す。

「……くっ?!!マジか!!」

峰田実がカツコいいだと?!

コマの中で峰田はこう言っている。

今回ばかりはオツパイお預けだぜ。

「くっそう!何でだよ!お前だけは信じてたのに!」

あれだろ。お前は作品の中で必要性ないやつだろ。いつまでも主人公みたいにかツコ良くなれないやつだろ!それなのに何だよ!カツコいいじゃないか!お前だけは……そう……だよ。お前だけは……下だと思つてたのに。

いつもこの漫画を見ながら思つてた。峰田は

俺よりも下だと。スケベだし、変態だし、情けない奴だし。漫画のキャラクターを下に見ながら心の安定を保っていたのだ。

・・・我ながら情けない。

「はあ。マジか。」

今、気がついた。下に見ながらも優越感を感じなかった。人間とは相手が完全に下だと思つた時、相手に好感が持てるはずなのだ。何故なら優越感を得るための人材なのだから。しかし、自分は峰田に好感は持てなかった。これは・・・

「同族嫌悪つてやつか。」

スケベで変態で情けない奴。

これは自分にも言えることだ。ただオープンスケベかムツツリかの違いだけ。

男はだいたいに変態であるし、漫画のキャラクターでも下に置かないと精神を安定をさせられない情けない奴である。

そんなことを考えながら俯き歩いていると

「危ない!!避けるー!」

声が聞こえた。その後、強い衝撃が突如襲ってきた。そして急な視界の切り替わり。気がつけば空を見ていた。

「な・・・ん・・・?」

声も出ない。首から力がなくなり強制的に横に顔を向ける形となった。視界の先にはビルが立っており、綺麗な鏡のようなガラスが目に入った。自分の現在の姿と共に。

やっと自体が飲み込めた。どうやら引かれたようだ。車に。

引かれた自分は血だらけで服が赤黒く染まっている。

「ははっ、潰れた葡萄みたいだな。」

それが最後の言葉となった。

「こっは?」

気がつけば自分は小さな炎になっているようである。何故炎に

なっているかと思つたのは俺の視界に炎の列がならんでいたのだ。
つまりは此所は・・・死人の世界つてやつだな。たぶん。

目の前の列はどんどん進んで行き、炎が道の途中で右へ、左へと凄
い速さで仕分けされるように別れていく。その分岐点で居たのは
「こんにちは。」

鬼だった。自分の鬼のイメージは上半身裸の虎柄パンツを履いて
るものだったのだが、鬼はビツチリしたスーツを着ていた。出来そう
な男風であった。

「えくと、君は・・・ふむ。なるほど。」

初めて流れが俺で止まった気がする。

「ふむ。転生だな。葡萄の樹行き。」

何故、葡萄？地獄とかじゃなくて？

「？ほう、意識があるのかね。珍しいな。」

あつ、ちゃんと聞こえてるんですね。

「ああ、聞こえているよ。喋る魂は珍しいな。久しく見たよ。」

そうなんですか。あのさっきの質問の答えを知りたいのですが

「ああ、葡萄のことかい？」

それです。差し支えなければ教えてください。

「まあ、良いだろう。葡萄の樹行きとは言葉の通り、葡萄の樹に転生す
るのだよ。葡萄とは実を沢山つけるだろう？それを人や動物が食べる
よな？それは言うなれば身を犠牲にし、相手を助ける行為にあたる。」
はあ。なるほど？

「あまり分かつたらんな？つまりは地獄での責め苦でなく現世で働き
贖罪を成せということだ。」

あ、はい。分かりました。

「えらく素直だな？普通なら泣き叫ぶ奴も居るのだがな。」

いえ、地獄とかじゃ無かったので。それよりかはマシかと。

「ほう。達観しておる。いや、諦めと自分への嫌気か？」

・・・分かりますか。そうです。何となく自分が嫌になつて。そ
んな時に死んだんで。

「そうか。まあ、転生すればある程度は忘れてしまうさ。後は本人の

頑張り次第で次の転生も可能だからな。うむ、頑張れよ。」

「……はい。やってみます。」

自分は鬼の言葉に頷いた。

それを見た鬼は満足そうな顔をして何かのスイッチを取り出し、ボタンを押す。

すると、足なんて無いが足元の感触が急に無くなり、ふわりと落ちていく感覚に襲われた。落ちながら自分は聞こえてしまった。

「あ、間違えた。」

そんな鬼の言葉が。

「はがっ?!」

俺は飛び起き、辺りを見渡す。どこかの教室のような場所だ、

「夢か？」

……夢じゃ無さそうだ。記憶がある。所謂、前世にあたる記憶。そして此所は……

「幼稚園か、保育園か。」

俺の周りには小さな子供が何人も寝ている。

つまりは

「葡萄の樹じゃなくて人間になったってことか。」

そりや確かに間違いだね。鬼さんや。

しかし、何でまた人間と葡萄の樹と間違えたんだ？違い過ぎるだろう。

そんなことを思っていると起きている俺に先生が気がつき話かけてきた。

「あらあら、まだお昼寝の時間よ？」

「あ、えっと、目が覚めちゃって。」

……ヤバイ。なんだこれ。めつちや恥ずかしい！

何プレイだよ。子供プレイだけど。でしかないけど！恥ずかし過ぎる！

そんな恥ずかしいという気持ちがあくセル全開状態の自分に先生は急ブレーキをかける一言を発した。

「じゃあ、峰田くんは私と遊ぼつか。」

「あつ、はい。……はい？」

え？今、峰田くんって言った？言ったよね?!まさかっ
焦る気持ちを押さえきれず自分は
?!?!?

「あの！トイレに！トイレ何処だっけ?!」

「？廊下に出て右だよ。」

「ありがとう！」

走って教室を出た自分はトイレに直行。そして鏡を見て

「葡萄……違いです鬼さん。」

僕のヒーローアカデミア、唯一の変態であるキャラクターのトレードマーク、頭の葡萄を確認してしまった。

「なんでやねん。」

わりと本気の絶望した一言である。

第2話

絶望した。いや、マジで。

こんなことつてあるかね？だって、あれよ？同族嫌悪したばかりの相手よ？二次元の世界の住人だよ？あり得ないでしょ！

そんなことをずっと考えてボーツとしたのだが、いつの間にか自分は峰田実の部屋にいます。

絶望した後のことはあまり覚えていない。誰かにここに連れてこられたのは確かである。

まあ、その誰かとは峰田実の母なのだろうが。

とりあえず冷静に今後のことを考えよう。

確か峰田はあまり主人公に関わっていない。細々と出演しているが、出てるところはコメディ的な意味合いが強い所である。

つまり原作の流れには関わっていないはずである。正直どこで消えても問題ないキャラである。

「あれ？それってヤバくない？」

この世界はヒーロー鮑和社会である。そのため、治安は良いはず。だが『事件が起きたらヒーローが守ってくれる』というだけで事件自体は起こるのだ。

つまりは・・・ヴィランもいっぱい・・・いるわけ。

ということは展開によっては・・・

「アカン。下手したら死亡もあり得る。」

現在、峰田実は子供である。

僕のヒーローアカデミアという作品に子供時代が描かれているのは主人公付近の人間だけである。峰田実の過去編なんて存在しない。

峰田の少年時代に何があったか、何が起こるか、全く分からない。

「・・・どうしようもない。」

・・・しかし、何だかんだで峰田だぞ？難関である雄英ヒーロー科に入った一人だぞ？

普通に暮らせば何とかなるはず。よっぽど運が悪くない限り原作通り雄英高校には入れるはずだよな？

そんな考えに少しだけ、本当に少しだけ希望が見えてきた。さて、原作の時間まで生き残る、もとい普通に生活するためにこれからどうしようか？

未来に希望が見えた時、人の視界は広くなる。余裕が出来るからだ。そんな時、部屋の机の上にノートが置いてるのが見えた。表紙には

『オイラがモテるための10の鉄則。』

とあった。

・・・せつねえ。

希望が芽生えた心に哀愁も芽生えた。

まだ3、4才のはずだよな？何でこんなの書いてるかな。

一応、今後峰田になるために中身を確認してみる。

1つ、余裕が持てる男になれ！

心に余裕が持てない男はモテない！例えば、ダチに彼女が出来たら・・・笑ってダチをヤツちまえ！

・・・はい、アウトー!!

確かに余裕がある男はカッコ良いがコメントが頭おかしい。

えっ？まさかこんなのがあと9個もあんのか?!

驚愕しながらもページを進める。

2つ、メンタル強い男になれ！

メンタルが強ければ勝手に体も強くなる！例えば初恋の女に恋人が出来たら・・・笑って男をヤツちまえ！

・・・まさかの同じパターン!!

どうしようか?!思った以上に駄目な奴だった！

3つ、○○○○が上手い男になれ！

そうすりやよく女なんて勝手によつてくるぜ!げへへへ!!

「ふんぬう!!」

力いっぱいノートを壁に叩きつけた。

峰田という男は3、4才にして、オープン過ぎる馬鹿だった!!

もうやだ。考えるのは明日からにする。今日は不貞寝します。お

休みなさい!!

第3話

おはようございます。昨日から峰田実になりました青年Aです。昨日の不貞寝から約半日。朝です。現在、部屋の掃除中です。

今日は峰田母上に起こして頂き、朝御飯を頂きました。美味しゅう御座いました。

青年時代は、早く親から離れ独り暮らしだったため、ちゃんとした朝御飯を食べるという行為は久しく、とても感動しました。

峰田母上、ありがとうございます。これから頑張れる気がします。

しかし、まあ朝から驚きました。朝の会話の中で「今日は日課のランニングに行かなかったのね。どこが悪いの？」などと言われたときは。

え？こいつ、毎日ランニングなんてしてるん？マジで？

疑問が浮かびながらも咄嗟に「部屋の掃除したかったから体力を残したかったんだ。」と答えました。

まあ、そのせいで朝から部屋の掃除中です。

だがしかし、ナイス判断だったようで峰田実の日記を発見。それにより現在の年齢が4才だと判明。日記から普段何をしていたかも判明。日記の始め数ページは驚くことに個性をどう伸ばそうか思索している文が見つかった。

さらにランニングコースの自作地図。何かのチェックポイントだろうか？ハートマークがいくつ書かれている。

真面目なのかオープン変態なのか分からない。とりあえず読み進めていく。

「……………どうしようもねえ。」

日記を読み進めたら……まあ酷かった。

○月○○日

今日は○○ちゃんのパンツが見えた！いちご柄が輝いて見えたぜ！

○月○○日

今日は先生に抱かれながらお昼寝した。ふへへ、感触がサイコーだ

ぜ！どこのかは書かないけどな！心の思い出だぜ！

○月○×日

今日は園までの歩道橋でエロいお姉さん発見！お姉さんの後ろにダツシユ！下から見上げた！・・・天国かここは！だけどお姉さんにばれた！怒られると思つたら「ダメ・メ・だ・ぞ（ハート）」って感じに言われた。サイコーだった！また会いてーよー！おねーさーん！オイラ背が低いの嫌だけど低いままの方が良いかも！

うん、まあそんな感じの内容。絶対に峰田母上には見せられない。というわけで見せられない部分はブリツとしてポイである。

さて、ギリギリ見られても大丈夫な所はこんなもんかな？

将来の夢。トレーニングメニュー。ラストは

○月○日

夢が出来た！オイラ、ヒーローになりてえ！そんでモテてえ！

○月△日

とりあえず走って体力をつける。先ずはそこからだ。

○月○△日

走ってたらお宝を見つけた！その辺を探したら他にもあった！朝のランニングは欠かせなくなった！ずっとやるぜ！

○月××日

今日はヒミコって可愛い娘にナンパされた！オイラにチュウしたって言うってきた！オイラと同じくらいの年かな？まったくマセてやがるぜ。まあ当然受け入れたぜ。

オイラ初チュウのせいで舞い上がっちゃまったのかな？気がついたら公園のベンチで寝てた。

くっそー！初チュウしたのを覚えてないなんて！悔しいぜ！それにしても今日は何で体が動かし難いんだ？風邪ひいたかもしれない。早めに寝よう。

そう。ラストは初チュウの思い出だぜ。

まったく初々しくて笑えるよ。

アハハハハハハハ!

自分は笑いながらベッドにダイブし、蒲団を被って……

思いつきり叫んだ。

「笑えるかチクショーが!!峰田のくせに!峰田のくせに!!!どういうことだ!リア充か?リア充なのか?!それともT0らぶる体質なのか?!さつきビリつとしてポイした話だつてよ!ぶっちゃけ、ちよつと羨ましかったわ!

自分がガキの頃なんてこんな体験したことないぞ!大人になってからはもつと無いわ!!なんなんだよ!このクソヤローが!!!」

叫んだ!めっちゃ叫んだ!そして何かが自分の中でナニかが弾け飛び……決意した。

「はっ、アハハ。そうかい。そうかよ。分かったよ。自分だつてなあ……自分だつてヒーロー目指してやんよ……でよー、ヒーローになって、お前が羨ましくて羨ましくて泣き叫ぶくらいにモテてやんよ!!!」

この決意は既に峰田になっている自分がいるため、何の意味も持たないことに気がついたのは10年以上経ってからである。

そして峰田の性格に自分が近づいてしまっているということに青年Aは気付いていなかった。

「チクショー!絶対になつてやるー!」

第4話

こんにちは。峰田実になった青年Aです。ヒーローを目指すと言ってから一週間が経ちました。

この一週間、日記の通りのトレーニングをしております。と言ってもランニングだけですけどね。自作地図があつたお陰で走りながら付近に何かあるのか確認できました。

ついでに峰田実の体のスペックも確認できた。結果ですが……：かなり悔しい！トレーニング初日、自作地図を確認しながら地図の半分、約2キロ程走つたが疲れなかつたのだ。

何だこの高スペック！峰田実、流石に雄英に受かつただけはあるかも知れない。

ただ峰田実というのは、やはり変態だつたと言つておこうか。例の自作地図のハートマーク、一応何かあるのか確認してみた。

「……まあ、予想はしてたよ。」

あえては詳しくは言わないが雑誌や本が大漁に見つかった。何の種類だつたかは、お察し頂きたい。まあ、感想としては

異形型の本つてあるんだね。

並ぶように置かれている雑誌。その中の一冊の表紙は爬虫類型の女の人が女豹のポーズをしている。

爬虫類型の人が女豹つて……なんかシニールね。

さて、そろそろ個性を使用したい。まだ使つてないのかつて？いや、ランニング中にね、ついでだから使おうとしましたよ？そしたら自分の目の前を四つん這いで自転車くらいの速度を出して移動している人が通り過ぎまして、その人が警察に呼び止められ怒られてるのを見たんですよ。

どうやら街中で個性を使うのはダメらしいです。

うーん、どうしたものか。とりあえず個性が使いたい放題の施設が無いか、峰田母上に聞いてみよう。

結果、一般人が個性を使える施設は無いらしい。個性が使える施設

はヒーロー科のある高校やヒーロー事務所、個性を科学的に流用するための研究所くらいだそう。あとは家の中だそうです。

まあ、峰田の個性なら家で使っても問題ないか。ゴミが多少増える程度だし。

さて、只今お部屋で寛いでおりますが今から初モギります。・・・モギっとね！

頭の紫を一つモギりました。するとモギったそばから生えてきた。スゲーな。よし、じゃあ次は連続でモギります。・・・モギモギモギモギモ・・・

「痛ってええー！！！！」

突然の激痛。あまりの痛さに転げ回り、ダンスに足の指をぶつけて更に叫んだ。

峰田母上が自分の叫び声を聞いて慌てて部屋に入ってきた。峰田母上も自分の惨状を見て悲鳴を上げた。

その後、峰田母上に治療をしてもらい、更に説教をもらいました。いやはや、峰田母上ありがとう。

治療後、一人部屋に残され考えた。

「・・・あれ？自分、原作峰田より弱くない？」

原作では入学後の救助訓練で敵に襲われる『U S J事件』があった。その際、初めて峰田の個性が発揮されるわけで。しかも泣きながら何十個も投げてたわけで。

あれれーおかしいぞー？モギりが五個しか出来ない、船から脱出出来ないやん？このままだと死亡フラグがたっちゃうぞー？

「マジでどうしよう！！！！」

そんな焦りの叫びを上げるものの、このままでは雄英入学すら危ういことに気がつき、さらなる叫びを上げた。

「マジでどうすりゃいいんだー！！！！」

このあと、峰田母上が部屋に戻ってきて、メチャクチャ説教された。しかし、説教中に良いことを聞いた。

え？個性って使えば伸びることあんの？あ、ごめんなさい。ちゃん

と話聞きます。ごめんなさい。呼び過ぎました。ごめんなさい。

第5話

おはようございます。峰田実になった青年Aです。先日テレビで古い災害の映像が流れました。その中では

「もう大丈夫！何故って？私が来た！」

と言いながら災害に遭った人々を次々と助ける顔がアメリカなコミック画風の男、オールマイトがいた。

あまりにも速い救助活動。繊細かつ大胆に動き、一人助け出すのに10秒と掛からずに助けている。

「すっげえ。」

思わず声を出してしまった。

漫画で読んでた時に、この動画を撮ってる人物は『スゲーよ。もうこんなに助けてる。マジスゲーよ。』とスゲーよを連発。語彙力無しかよ！とツツコミをいれて読んでいたが実際の映像を見ると確かにスゲーよ！を連発してしまいそうだ。

緑谷出久の気持ちがあった。正直これは憧れる。

ん？これが流れてるということは……あれ？もしかして原作主人公の過去話始まった感じですか？そんな感じですよ。ああ、でも古い映像って原作では言ってたし、もうコレを何回も見てる可能性はあるかな。

まあ、あと10年は原作に関わらんし、勝手に話は進むから関係無いかけどな！そもそも今から原作に関わったら爆豪勝己とその仲間に虐められる自信がある！自分、豆腐メンタルだし！個性はこんなんだし！絶対に関わらない！アハハハハハ……ああ、切ねえ。

「……走ってこよ。」

さて、自分、実は説教された翌日から個性を峰田母上に黙って外で使用しております。あの日より約1カ月。血を出さない程度に使用しています。だってしょうがないやん。このままでは雄英入学すら危ういですもん。たった5回モギっただけで血を出し泣き叫ぶ程に痛いんだぜ。もう使えなさすぎる。

というわけで現在川辺でモギリ中。何と血を出さない程度の連続モギリは6個になりました。・・・おい、少ないとかいうな!

1カ月で4回モギリが6回モギリになったんだぞ! スゲーやろがい! 1カ月で2モギリ増えたやん! 1年で計算すれば24モギリ増えるはずなんだぞ! 馬鹿にするなよ!

え? モギったモノは何処に捨ててんだって?

・・・あれれ、川辺に置いておいたら転がって川に落ちてしまったタイヘンダー。でもオイラこどもだから取りにいけない。シヨウガナイヨネ。

という言い訳をして、実際はモギったのを投げる練習もしてるんだ。しょうがないのだよ。当たらないと意味の無い個性ですの。

・・・さて、続き続き。どんどんモギってこう。

モギ、ヒヨイツ、ポチヤン。

モギ、ヒヨイツ、ポチヤン。

モギ、ヒヨイツ、ポチヤン。

モギ、ヒヨイツ、ポチヤン。

モギ、あつ?! 何故か手が滑った! あらぬ方向に! そして運悪く子供が!

「うわっ、ナニこれ?! これ取れない?!」

めっちゃ焦ってる。事案にならないよねコレ? 自分はすぐに子供の元へ行き、謝りながらモギリ取った。

「凄い個性だね!」

凄くはない。当てなきや意味が無いからね。

「僕はまだ個性が出てないんだ。」

いや、そりゃこの歳に出るやつは早いだろ? 出ないやつの方が多くないか?

「・・・僕はヒーローになりたいんだ。でも・・・このまま個性が出なかったらどうしよう・・・」

知らんがな。そもそも昔は無個性でもヒーローしてたって人がいたやろがい。なら別になれるんじゃね?

「じゃあ、僕はヒーローになれるかな?」

流石に出来ることは少ないかも知れんが、ヒーローにはサポートの器具とか当たり前だろ？じゃあ、ちゃんと目指せばなれるだろ！

「そっか。そうだよな！ありがとう！僕、オールマイトみたいなヒーローになるよ！」

いや、流石に無個性がオールマイトは無理だろ?!こいつ微妙に話を聞いてねえぞ！

「話を聞いてくれてありがとう！」

ああ、そっか。自分が聞いてる方だから、この子は聞いてないのか。・・・なんでやねん！

「あ、僕の名前は緑谷出久です！またどこかで！」

あー、はいはいまたねー。緑谷くんとやら。

とりあえず手を振っておいた。

さあ、練習再開。

モギ、ヒョイツ、ポチャン。

モギ、ヒョイツ、ポチャン。

モギ、ヒョイツ、ポチャン。

モギ、ヒョイツ、ポチャン。

モギ・・・・・・・・・・・・・・・・

?・・・緑谷?・・・・・・・・ふあっ?!緑谷いずくー

???!!!

声にならない声を上げました。

第6話

今日はヒーローショーに来ております。

「煌めく眼でロックオン！」

「猫の手、手助けやってくる。」

「どこからともなくやってくる。」

「キュートにキャットにステインガー！」

「二」ワイルド、ワイルド、プッシュキャッツ!!!」

目の前を迫力のあるアクションが飛び交います。

「ウオオオオオオ!!!」

轟く大人の友達が悲鳴に似た歓声が起こしております。そんな歓声を上がる中、自分が混じっているわけで。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。

先日、原作主人公に会っちゃいました。そのまま原作に巻き込まれると思いつき込み、暫くの間は園に行く以外は引き込みました。

そんな引き込みもっていた自分を心配になった峰田母上が父上に相談。父上は『任せろ！確実に喜ぶ所に連れて行ってやる!』と言って、峰田父上と二人で来た先がココでした。

全くダメな父上です。こんな所に連れて来られても、うら若き乙女と言えるキャッツ達のミニスカがひらりひらりと舞う姿しか映らないじゃないですか。

委員長と呼びたくなるような真面目な顔つき引き締まったおみ足、マンダレイ。

ギャル感を出した金髪にヒラヒラミニスカから飛び出す我儘おみ足、ピクシーボブ。

アクション中にポヨンポヨンと揺れる胸から大人の友達が目が見えない離せないナイスバディ、ラグドール。

男なら誰もがなりたい圧巻の筋肉漢バディ、虎。

こんな4人の魅せるヒーローショーに来て元気にならない訳がない。ただ一番元気になってるのが峰田父上なわけで。さっきの「ウオオオオオオ」などは峰田父上も一緒にやっていた。

ダメな父上だ。そんな冷めた気持ちを抱きつつも舞台を見ると体の内から熱が溢れます。すると、アクション中にピクシーボブと目が合いました。合った気がします。その後、ピクシーボブがウインクをしてくれました……

「ウオオオオオオ!!!」

自分も父上と同じく叫びました。

いよいよショーの終盤になってきたはずだが熱くなりすぎたか？いつも間にやら自分が舞台の上にあります。というか、誰かの脇に抱かれてる？いったい何が？

見上げると……まあ、何て極悪顔の方でしょう。最近のヒーローショーはちゃんとした役者を雇ってるんですね。

なるほど。ラストは会場の子供を人質にした犯人を皆でボコって必殺技を出して倒して大団円ですね。わかります。プツシーキャッツの皆さんまで真剣な顔つきになってます。迫力のある演技です。カッコいいです。

ならば、自分も全力で人質役をやらねば！

「オイラまだ死にたくねえよ!!!」

と言いながら泣き叫び、体を振らせじたばたします。

あつ、犯人役さん、そこは触っちゃアカン！その頭をモギったら手に！……あくあ、モギっちゃったよ。ほらく手に着いて離れないっしょ。いや、そんな焦っても無理ですって。燃やしでもしない限り取れませんか？

そんな犯人役の戸惑う様子を見た虎さんがこちらに走ってきたかと思えば、そのままの勢いで犯人を殴り飛ばし、自分を確保するとすぐさまラグドールさんへと投げた。

いや、投げないでよ。ラグドールさん、ナイスキャッチ。

そして犯人役さんは、ピクシーボブさんの土人形で押さえつけられた。

大歓声上がる。

自分もその歓声に貢献できたと思うと嬉しいものだ。

……ラグドールさん、やはり良いモノをもつてらっしやる。柔らかい。背中が最高に柔らかい!!あ、もう終わりですか？残念。

マンダレイさんが頭を撫でて来た。そして怖くなかったかと聞いてきた。いやいや、今どき子供がヒーローショーで怖いとか思わなくて。むしろどうでしたか、自分の演技は？

「凄かったわよ。」と頂きました。自分ナイス演技してたらしい!ヒヤッホウ!お世辞だと分かってても美人に褒められると嬉しいぜ!顔がアツツイです。

軽く挨拶をして峰田父上の元へ走りました。

帰りに峰田父上に聞かれた。怖くなかったかと。あんたもかい。怖くなかったよ。え?ラグドールさんの感触?……柔らかかったです。

言った瞬間、頭を叩かれた。峰田父上の目からは嫉妬の炎が見てとれた。

……理不尽な暴力には屈しない!!やられたらやり返す!!

家までの帰り道、初・親子喧嘩をした。

ちなみに母上に今日の父上の行動を報告すると言ったら、それはそれは見事な土下座を見せたとか見せないとか。

5. 5話 緑谷出久

ぼくの名前は、緑谷出久です。

今日は神奈川県にある大きな病院に来てます。

何で来たかというと、僕以外の子が個性が出始める中、僕は出てないからって、お母さんが言ってた。何かの病気かも知れないからって。

凄く心配です。

いっぱい写真を撮ったり、血を採ったりしました。結果は、夕方に出るらしいです。

暇だったから外に遊びに出ました。でも、何処に行けばいいのかわからない。

そんな中、川を発見。

「……かつちゃん、凄いなあ。爆破の個性なんて……」

少し前に個性が発現した友達である爆豪勝己のことを思い出しなから少し憂鬱になる。

僕にあんな凄い個性は出るのかなあ。

川を暫く見ていると、紫色の玉が川に捨ててある空き缶等のゴミをくっ付けながら流れていった。

「……なんだろう?」

不思議な玉を見ていると肩に何か当たった。いや、くっついた。確認しようと思い、肩についた何かを取ろうとするが……

「うわっ、ナニこれ?!これ取れない?!」

全く取れない。それどころか取ろうとして触った手すら離れない。そんな焦った所に紫色の玉をいくつも頭に乘せた少年が姿を現した。

「いや、すまねえ!手が滑ってよ!本当にごめんな!」

その少年は謝りながら僕の肩についていた何かを取ってくれた。それはさつき川で流れていた紫色の玉だった。

「その不思議な玉って、君の個性なの?」

「ん?ああ、そうだけ。オイラ以外には何にでもくっついて離れないって感じの個性だ。」

えっ？それって

「凄い個性だね！ヴィランいっぱい捕まえられるね！」

「……いや、まあ、凄くはないかな。当たらないや意味ないし。」

「そうかな？何にでもくつつくなら捕まえる以外にも何かに使えそうなんだけどなあ。それにしても」

「羨ましいなあ。僕はまだ個性が出てないんだ。」

「そうなんか？でもまあ、オイラの回りなんか全然だぜ。オイラが早かったんだよ。お前もそのうち出るって。」

と笑いながら答える。

「そっか。今出てくる人が早いのか。……いや、でもお母さんが病院で調べるってことは、もしかすると……」

そんな不安をつい口にしてしまった。

「……僕はヒーローになりたいんだ。でも……このまま個性が出なかったらどうしよう……」

「ヒーローになりたいのか？別に個性いらないじゃん。」

「え？」

「あのかなあ、昔のヒーローは個性持ってない人もいたぞ。ちゃんと調べてみるよ。」

「そ、そうなの？知らなかった。じゃ、じゃあもし無個性になっても「じゃあ、僕はヒーローになれるかな？」」

「なれるだろ。無個性だと流石に出来ることは限られるかも知れん。それはオイラみたいな個性にも言えるけど。まあ、今のヒーローはサ

ポート器具は当たり前だし、今から目指せば成れないことはないだろう。」

「なれるだろ。と即答してくれた紫色の頭の少年に僕は嬉しくなつて」

「そっか。そうだよね！ありがとう！僕、オールマイトみたいなヒーローになるよ！」

目指してるヒーローの名前を言ってしまった。まだ個性も出てない僕が何を言ってるんだと思い、恥ずかしくなって走り出してしまった。

あつ、お礼言わないと

「話を聞いてくれてありがとう！」

あ、あと名前も

「あ、僕の名前は緑谷出久です！またどこかで！」

僕は手を振って病院に向かった。

その後、気がついたら僕は僕の部屋でオールマイトの動画を見ていた。そしてそんな僕をお母さんが心配そうに見ている。

・・・そっか。思いだした。僕は・・・個性が無かったんだ。覚悟はあったけど、やっぱりショックだったんだ。

涙が溢れそうになる。

「お母さん、どんなに困ってる人でも笑顔で助けちゃうんだよ。オールマイトみたいな超カッコイイヒーローさ、僕もなれるかなあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

お母さんが僕を後ろから抱き締めて

「・・・・・・・・！！ごめんねえ出久う！！ごめんねえ・・・・・・・・！！」

謝っている。

違うんだよ。お母さん。僕が言って欲しいのは・・・・・・・・

『なれるだろ。』

僕はハツとして横を見た。声が聞こえた気がした。しかし、誰もいるはずもなく壁があった。

でも、思いだした。今日のこと。絶対忘れちゃいけないこと。紫色の頭の少年との出会いを。教えてくれたことを。言ってくれた言葉を。

「お母さん。」

「なに？」

「僕はヒーローになるよ。」

お母さんは黙って優しく抱きしめてくれた。

ありがとう、お母さん。僕は絶対にヒーローになる！！

7話

どうもこんばんは。峰田実になった青年Aです。皆さん元気ですか？自分は元気です。

現在夜中ですが自分はミッションを遂行中です。何故こんなことになったのやら。時間は今日の昼に遡ります。

峰田母上より要請がありました。

『毎日、部屋を片付けるように。もう小学生になるんだから。』

あ、自分、無事に卒園致しました。

それにしても・・・マジかあ。子供が言われるようなことを言われました。しかし、そんなに汚いかね？

部屋を見回してみると・・・確かに汚い。『実践！効率的な筋トレ！』等の本の散乱（その他、漫画本）、筋トレ用具の散乱、あとは「これだなあ。」

それは紙が数十枚。全ての紙の真ん中に5センチ程の赤い円が描いてある。所謂、的である。それらが部屋の壁や天井にランダムに張られている。床には落ちている的と紫色の玉。

何故こんなものがあるのか。それは・・・

外で個性を使ってたのがバレました。

いや、緑谷君と鉢合わせした川辺を避け、ランニング中に見つけた空き地で練習してたところに峰田母上にばったり会い、足元にある紫色の玉を見られ・・・おしおk、もとい強めの説教を受けました。

え？大丈夫ですよ。震えてなんていませんよ。はい。震えてなんて・・・

その後、どうしてもやるなら家でやりなさいと許可を得ました。峰

田母上、優しいです。

というわけで個性の練習の結果の紙と玉です。

どんな練習かって？やり方は簡単。的の紙の裏に玉をくっつけ、適当に壁や天井に投げます。すると画ビヨウ等を使わずとも壁や天井に的が出来ます。

あとはそれを狙って玉を投げるだけ。

時間が立てば的裏の玉のくっつきは無くなり勝手に取れます。

これで少しでも命中精度が上がるといいでしょう。

ね？簡単でしょ？しかし、難点がありました。……玉という名のゴミが出ます。紙も使えばグシャグシャになります。まあ、ゴミになりますよね。

数日に一回は掃除するのですが、本日から毎日掃除をするように言われました。まあ、当然ですよ。

ああ、川に捨てながら練習、もとい勝手に転がって行って川にポチャンしてくれた日々が懐かしい。

「はあく、しょうがない。自業自得ですなあ。あく。」

そうこう言ってる間に玉が落ち、的がベッドの下に滑るように入ってしまった。

なんて面倒な……

ベッドの下に手を入れ探ります。すると紙の感触がします。しかし

「??なんか感触が違う?！」

さらには重い。雑誌くらい？

何かと思い引き出すと……

「……これはアカン」

表紙には水着面積が少なすぎる女性の姿が……

自分記憶にないです。身に覚えは・・・あつ!!
思い出されるのは昔見た峰田実の日記の一文。

『○月○△日

走ってたらお宝を見つけた!その辺を探したら他にもあった!朝のランニングは欠かせなくなつた!ずっとやるぜ!』

お前!見るだけじゃなく拾って来てたんかい!!

自分は急ぎ他にもないか確認する。

すると数冊の雑誌が出てきた。全てが18歳未満お断りな物でした。しかも表紙の女性は年齢が幅広く今の自分より40以上の歳の差があるものまであり、さらには異形種まであった。

「峰田実・・・逆にすげえよ。」

そこまで女が好きか。尊敬の念すら湧いてくる。

自分はそう思いながらビニールテープを持ってきて、その雑誌を漫画雑誌と漫画雑誌の間に挟み、キュツと縛つた。これなら漫画雑誌を束ねたようにしか見えません。カモフラージュ、バッチリです。

え?何故尊敬したのに縛って捨てる用意をするのかつて?いや、尊敬しようが峰田母上にバレるの怖いやろがい!

さてさて、カモフラージュしたからといってコレは直接ごみ捨て場に捨てないと安心感が得られない。ならば勝負は・・・夜中だな。

というわけで、現在夜中のごみ捨てミッションに動き出したわけですよ。

などと回想してるうちに何とか音を立てずに玄関に到着しました。

さあ、あとは靴を履いて

「待ちなさい。」

・・・な・・・んだ・・・と・・・お前は・・・峰田父上!

「全く、こんな夜更けにどこへ行くつもりだ。」

いや〜あれ〜どこすかね〜

「捨てる気か?あれを・・・」

な、なんだと！こんな暗闇で分かるのか?!コレが何なのか?!

「ふっ、皆まで言うな。俺には全て分かっている。」

そ、そんな・・・親バレするのが一番辛いのに・・・なんで・・・クソツッ！これというのも全て峰田実のせ

「夕飯の時から様子がおかしいと思ったから遂に見つけて目覚めたと思っただけでしようとするとは・・・せつかく仕掛けてやったのに。息子がいの無いやつめ。」

いだ・・・なんて言った今?

「ん?俺が置いてやったんだぞ。目覚めるなら早い方が良いからな!小、中の生活が楽しめるぞ!ハッハッハッ!」

んくくちよつと待って。状況が飲み込めない。えっと、これはもしや峰田実の拾ったものじゃないのか?峰田父上が置いたん?大人の勉強するために?

「お前は最近何故か鍛えてたからな!何か溜まってるのかと思っとな。時期が来たかと思っただが・・・予想とは違ったか。」

溜まつてねえよ!

「まあ、あと5年もすれば見たがるだろ。それまで預かっておくから、それを渡しなさい。」

こ、このクソ親父がー!!

と言つて殴つて返そうと思つたが・・・止めて、普通に渡した。

「うむ。俺もまだ見てなかったからな。今度は、ちゃんと俺が確認してから渡してやろう。」

いえ、結構です。それと今後も勝手に置かないで下さい。これ児童虐待だから。そこそこ、よろしくお願いします。では、これにて。

峰田父上は受けとると即行でビニールテープを解き、雑誌を見始める。

ああ、原作の峰田実が育つたらこんな感じなのかなと思いつながら部屋へと戻った。

え?何で殴らなかつたか?うん、まあね。

「ぎゃあアアアア!!」

峰田父上の後方に峰田母上が見えたので。笑顔でしたが般若なオーラが出てたので。

今日は気持ちよく寝れそうです。

翌日、廊下で峰田父上が某ドラゴン球のヤムチャさんソツクリな倒れ方をしていた。

意識があるようで何か言っている。

「やっぱり、うちの妻は最高だぜ・・・」

・・・?!こいつ、最強かよ?!

そんな言葉に驚愕しながら今日という平和な一日が始まる。

8話

最近・・・伸びません。

背のこと及び個性がです。どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。

現在、小学4年生になりました。もう小学校に入って4年目ですか、早いものですね。

あれから何をしたかというと、特に変わったことはしておりません。普通に小学校に通ってます。毎日のトレーニングは続けております。

あとは小学校に入って直ぐに野球をやりました。リトルリーグなるものに入りました。目指すはヒーローですが自分の個性は投げて当てないと意味がありません。

入って直ぐにピッチャーを選択。スゲー投げた。一日中投げた。これまでのトレーニングが実を結んだのでしよう。めっちゃ狙ったところに入るね。あとは球速を上げるために監督に相談した結果、身体を捻りに捻ってのトルネード投法を試した。球速上がったよ。自分でも中々の出来だった。

ですが投げ方を知りたくて入っただけなので2年目に辞めました。何やら監督が「な、何故辞めるんだ?!これからだろう?!」と言ったが知らん。入った時にいうたやん。投げ方が知りたいだけだ。因みにストリートとカーブとナックルを覚えてみました。

さて、そんなこんななので気がつけば4年も経っていたのです。

そして4年も経って気がついたのです。

自分の背が止まっていることに。

現在、108cm。・・・ちっさい!!

もうめっちゃ、ちっさい。原作通りだけでも!!小学校の全校集会で何回一番前で腰に手を当てたことか。なんかもうさ、元おっさん・・・青年の自分からしたら元が背の高い方だったからね。心の何処かで悔しいわけ!

あと、これ一番大事!個性が伸びない!

連続投げは37個が限界。それ以上は血が出ます。休めばそれ以上モギれるようになるけど、なんとなく玉に元気が無いような気がする。

どうしたものか。

「おい。」

うくむ。

「おいーてめーだ、てめー！」

うん？何やら煩いのですが。

周りを見回すと自分の前に子供が三人。

「てめー最近ちようしにのってんだろ！」

？そもそも君ら誰だっけ？あつ、ちよつと待って思い出すから。

えーつと、確か・・・同じクラスの・・・サラダくん！シーザーくん！鈴木くん！

「誰がシーザーサラダだ!!」「俺だけ合ってる。」

あ、わりとノリが良い。それに合ってた奴がいた。適当だったのに。

「てめーマジでちようしにのってんな！」

「勉強出来るからってちようしにのってんじゃねーぞ！」

うん。調子には乗ってないです。元が青年だからね。小学生のテストで、なかなか間違えません。ド忘れして満点は逃しても必ず全教科95点以上です。だからこそ峰田母上に勉強よりトレーニング優先が許されているわけで。

「しめてやつから裏に来いや！」

「こいこい！」

絞めるから来いとか言われて行く奴はいませんよ？だいたい此処は街中だよ？裏って何処だよ？こんなビルの並ぶ裏道だとしたらヴィランいるよ。絶対いるよ？本気で怖いのいっぱいよ？

すると、無理矢理に手を引っ張られてビルの裏にまで連れて来られた。

「さあ、ここでタップリとしめやろ」

「何だてめーら？」

ほらね居ましたよ。あ、でも中坊かな？制服きてるし。ヴィランじゃなくてヤンキーでした。あちらは三人いるね。やったねヤンキーで！

「てめーらこそ誰だ！俺らは今からコイツをしめんだよ。じやますんな！」

お、おう。お前スゲーな。自分を絞めるために中坊ヤンキーにそんなこと言うとは。

「ああん？俺らは今から楽しむんだよ。てめーらこそ邪魔なんだよ。さっさと行きな！」

楽しむ？

唯一名前の当たった鈴木くんの後ろから顔を出し確認するとランドセルを背負ったピンク色の髪の毛をもつ少女がヤンキーに囲まれる形でそこにいた。

ふむ。コイツらロリコンか。

「てめーら、よってたかって女子をイジメるなんて男のかぎかみにもおけねーぞ！」

おいこら。よってたかって男の自分を絞めようとしてたお前が言うな。あれ？男だからいいのか？

「はん！やっぱガキだな。イジメなんてしないさ。時間が経てばコイツも喜ぶだろうからな。意味が分かるかなあ？お子ちやま共々？」

ヤンキー三人は下卑た笑いをあげた。

うゝむ、どうしよっかなあ？

「意味わかんねーけど、なんか頭に来るから殴る！」

通称サラダくんが走りだし、ヤンキーに殴りかかった。すると、その拳を受け止めたヤンキーは

バリー！！

受け止めた手から目に見える程の電気を発した。

「俺の個性はスタンガンの個性だ！触りさえすれば大抵の奴は無力化できる。」

おお、羨ましい個性ですなあ。

「こ、個性は・・・ヒーローがヴィランに使う以外に・・・使っちゃダ

メなんだぞ。」

おや、サラダくん気絶してないのか。大した電気じゃないな。原作の電気個性の上鳴より弱いかな？

「バ~~~~カ。そんなもん守ってっからガキなんだよ。」

「び、びっちゃんがやられた。に、逃げろ。」

あれま。サラダくんはびっちゃんと言うのか。って、おい！せめて、びっちゃん連れていけよ！

「だーはっはっはーダッセーな！」

ヤンキー三人は爆笑である。びっちゃんは負けたから悔しいのか、仲間に逃げられて悲しいのか倒れながら震えている。

・・・はあくもうさあ、疲れた。自分も帰ろうかなあ。こういう時は、何処からともなくヒーローが来るものだし。こんな、ヒロインによくいるピンク髪の少女なら余計にヒーローは来るだろう。

そう思い、ピンク髪の少女を見ると・・・顔が少し腫れてる。

腫れてる？腫れてるってことは殴ったのか？こんな少女を？

.....

イラッ

「おい。」

「あん？」

「お前ら、土下座。」

ほんの少し、本当に少しだが

キレました。

9話 びつちちゃん視点

なんだよそれ！個性はヒーローがヴィランに使うもんだろ！ズリイだろ！

悔しい。こんな奴にやられるなんて。

身体を動かしたいが痺れて動かせない。

くそっ！調子に乗ってる峰田を少しイタぶってやろうとしただけなのに。

俺が峰田を知ったのは1年生の頃。峰田は俺が入っているリトルリーグチームに入ってきた。

昔と違い、ルールが変わったとかで小1から入れるようになったリトルリーグ。そのせいか小1からプロを目指す奴等が多い。そんな中に入ってきた峰田は早々とレギュラーの、しかもピッチャーを任された。

峰田は打つことも守ることも軽くこなした。そして何より投げることに関して監督に細かく聞いては実践し、改良を加え、小学生であり得ない球速も出し始めた。

まさに峰田は天才だった。

そんな峰田は2年目に突然辞めた。理由は知らされなかった。

その後、監督は一時落ち込んだものの、第二の峰田を育てると言っ
て鬼のような練習を課してきた。それに耐えられず何人も辞めた。
俺もその中の一人だった。

それから1年半、野球を辞めた俺は塾に通っていた。そこで初めて
好きな人が出来た。

ある日の塾帰り、その人が友達と帰るところを見かけた。勇気を出
してその人に話かけようとしたとき

「ねえねえ、あの子また走ってるね。」

「そうだね。」

走ってる？あれは・・・峰田。

「ママに聞いたんだけどさ、あの子ってヒーロー目指してるからって

毎日トレーニングしてんだって。」

「そうだね。」

「え、知ってたの?」

「そうだね。」

「・・・えっと、好きって感じ?」

「そうだね。・・・ち、違うよ?!小さくて可愛いのに努力してるのが男の子らしくてカッコいいなあとか思ってたないよ?!」

「アッハイ。」

・・・俺の初恋が終わった。

その日から何をするにも、峰田のやるのが気に入くない。

いつも冷静な峰田が気に入くない。

毎回テストが高得点なんて気に入くない。

毎日トレーニングしてるのが気に入くない。

そしてそんな気に入くない峰田を今日は仲間と一緒にイタぶるはずだったのに。

今ごろ倒れてたのは峰田のはずだった。

何なんだよ、これは。

いつも一緒にいる二人は逃げた。

こんな倒れてる姿を、峰田に見られるなんて。

最悪だ。

「おい。」

峰田の声が響いた。その声に思わず首を上げる。

「あん?」

「お前ら、土下座。」

そこには、いつも冷静な峰田はおらず

「はん?何で俺らが、んなもんすんだよ。」

「そうか。しないならさせてやんよ。」

強い意思を持って立ち向かう男がいた。

10話

「はん？何で俺らが、んなもんすんだよ。」

「そうか。しないならさせてやんよ。」

さて、ついついイラしまい、カッとなつて

圧勝してしまいました。

「なんだコリヤ！取れねえ?!う、動けねえ！」

峰田実の技、その名もグレイプラツシュ。

正直自分汚いことをしたと思います。中坊共を相手に大人げなかつた。

バトルシーンが無い？いやいやバトルっぽいものなんてありませんよ。

まあ、強いて言うなら「させてやんよ。」というセリフ直後にグレイプラツシュ!!

その中に以前からグレイプラツシュに紛れさせて使ってみたら良いのでは？

と思っていた煙玉を今日は持っていたので使用した。

煙で怯んだすきに中坊共の後ろに回って各自の膝裏に蹴りを入れて膝をつかせたくらいかな。

結果、全身にグレイプラツシュを受けてた中坊共は膝をつき、手をつき、ついた先にあつた玉に触れることで動けなくなりました。終わり。

そして現在、中坊共の格好はリアルorz。残念、綺麗な土下座にならんかつた。

「てめえ、ふざけんなよ！卑怯もんが！」

・・・えゝ・・・まさか三人で自分をボコろうとした奴等にそんなこと言われると思わなかった。

それに卑怯も何も個性で喧嘩するんだから全力を尽くさないと下手したら自分が死ぬし。ネットでヒーローの戦闘動画見てると先手必勝って感じなんだよ。全く卑怯ではない。断言できる。

ちなみに自分、全力を出したので頭がかなり痛い。血も出てる。やり過ぎたわあ。

まあ、いいや。中坊なんて無視無視。少女の無事を確認しよう。

俯いている少女に近付くと少女は突然顔を上げて自分の腕に抱きついてきた。

?!この感触は?!何て大きなおっぱい・・・

「いいですね!あなたの個性!是非サンプルを取らせてください!」

・・・正直かなり困惑しております。少女に突然抱きつかれ、抱きつかれた感触は大人な感触をしていて、峰田実の個性のサンプルが欲しいとか、もう何がナンだか・・・

「私のベイビーの完成には、あなたの個性が必要なのです!是非ともその玉をください!」

ベイビーとな?何やらドコかで聞いたような口振り・・・この目は、銃なんかについてるスコープのような?・・・あつ、これ原作キャラや。好きなキャラだが今はダメだ。

本来出会うであろう雄英高校に入る前に原作キャラに会うとか、原作以外のが起きたらヤバイ。とにかく関わりたくない早くこの場を離れたい。

直ぐ少女から離れようとする

「ああ、逃げないでください。お願いします。それください。」

またも腕を取られ、とある感触が腕に食い込む挟まれる。

おっふ?!ちよつ、勘弁してくださいもつと挟んでください最高です!ああでも原作・・・関わり・・・るのは・・・ダ・・・メ・・・

色々ど……勝てませんでした。

なんと意志の弱いことか。自分は血の流れる頭から玉をもぎつて、玉の特性を話しながら適当な袋に入れて渡した。

「なるほど。自分以外にくつつく。何かにくつついた後も自分が触れれば取ることが出来ると。なるほど。何がスイッチで離れるのか……」

途中から何やらブツブツと言いながら考え始めた。聞こえないが個性の分析をしてるようです。

でも流石だなこの子。全く自分の頭から血が出てるのを気にしない。流石に発明大好き子である。もうちよい労って欲しいものだが。

ピピピピピピピピ

突然、彼女の腕時計から音が鳴り響いた。

「あー母から頼まれていた買い物を忘れてました！失礼します！助けて頂きありがとうございます！」

彼女はお礼を言っただけで走って行ってしまった。

一応助けられたって思ってたのね……あれ？この状況どうしよう。彼女を助けられたし、ケガも大したことなかったが被害者な立ち位置の彼女がいないと、個性を使って拘束しちゃった中坊共の説明をヒーローやら警察にどう説明したらいいんだ？

と悩んでいたら

「遅ればせながら……」

突然、声が聞こえてきた。声のした方を見てみると

「俺が来たー！もう安心だぜ、小僧ども!!」

声の主は紫のコスチュームに特徴的な頭の玉。顔も半分マスクで隠れている……というか峰田だ。漫画『ヒーローアカデミア』で峰田実のヒーローコスチュームを着た自分より背の高い峰田がいた。

……嫌な予感しかしない。

「よう、息k・・・」

あー！あー！聞こえない。自分は何も聞こえない！

「うむ。まあ、普段の俺からは想像出来ないかも知れないが認めとけ。」

くっ！嫌だ認めない！こんなんがヒーローだなんて！

「安心しろ。フリーのサイドキックだから。」

そっかあ、サイドキックならヒーローじゃないから安心だね。とか！ならねえよ！サイドキックもヒーローだからね！！

「全く我が息子ながら頭がよくて嫌になるね。」

あっ！息子って聞こえちゃったよ！最悪だよ！

「まあ、落ち着け。落ち着かないとコレをネットに流出させる。」

そんなこと言いながら峰田父上は携帯の画面を見せてきた。そこには何と、先程腕を取られていた峰田実の姿が。というか今は自分だけども。

その表情は目が血走って見開かれ、鼻の下は伸びて、口からはヨダレが出ている。まさに漫画で峰田実が変態的なことを考えていた時の表情そのままである。

・・・ふっ、そんなもの関係ないね。だがまあ・・・

自分は足を折り畳んで膝をつき正座をし、頭を地面につけて言った。

「何でも聞き入れさせて頂きます。お父様。」

10. 5話 峰田父上視点

「最近ね、実ちゃんが少し元気がないのよ。」

「そうなのか?」

「そうなのよ。だから少し見ていてくれない?」

「え、俺にも仕事が・・・」

「別れようかしら。」

「任せて貰おうかマイハニーよ!」

そんなこんなで現在息子を陰ながら尾行中である。

俺のヒーロー名は『ザ・チェイサー』。

仕事でフリーのサイドキックをしている。

個性は追跡。どのように追跡出来るのかというと、俺の頭の玉は所謂犯用のカラーボールとなっており、中の液体には俺だけが分かる信号が出ている。

液体が極少量でも着いていれば相手が何処にいようと俺には筒抜けになるのだ。ちなみに調子が良いときは話し声まで聞こえる。つまりは通話しっぱなしの携帯を無理矢理相手に着ける感じだな。

効果の期間、それは液体を着けた時の想いの強さに比例するが平均的には約三ヶ月程だ。

そんな液体を息子に今朝方着けておいた。

まあ、個性の話はどうでもいい。今回は居場所云々ではなく様子も見なければならなかったため、遠目で息子を確認しながら尾行する。

確かに息子は元気が無いようだ。ため息をつく回数が多い。

もしや思春期きたか!恋の悩みか?!

おいおい息子よくそれなら早く俺に相談しろよなく。恥ずかしくて言えないのか?しょうがない。俺から聞いて

「てめー最近ちようしにのってんだろ!」

おっと、一体何が起きた?ちよい考え事をしている間に息子が喧嘩を売られているぞ。

え?まさかイジメ?!イジメられてて元気ないとか?なんてことだ!路地裏に連れ込まれたぞ。早く駆けつけなければ!

そう思い、走りだすと、居場所の信号と共に会話が聞こえてくる。今日は調子が良い時らしい。

「てめーら、よってたかって女子をイジメるなんて男のかざかみにもおけねーぞ！」

ん？この声はさっきのイジメっ子の声だが路地裏に他の誰かがいたらしい。

「はんーやっぱガキだな。イジメなんてしないさ。時間が経てばコイツも喜ぶだろうからな。意味が分かるかなあ？お子ちやま共〜？」

下卑た笑い声が聞こえてきた。察するにこれは18歳未満禁止の展開を止めてる声か？

「意味わかんねーけど、なんか頭に来るから殴る！」

バリイ!!

電気が走る音が聴こえた。

「俺の個性はスタンガンの個性だ！触りさえすれば大抵の奴は無力化できる。」

はあ?!マジか?!個性を使ったのか!!クソが！一気に戦闘案件になっちまった！

早くコスチュームに着替えなくてはならなくなった。

現在の法律では戦闘案件の場合、ヒーローはコスチュームを着ていなくてはならない。

緊急の場合はそうではない。ではないのだが後に緊急だったと証明しなくてはならない。

これは普通、事務所に所属していれば事務所内の事務員が証明作業をしてくれる。

だが俺の場合は事務所に所属していないので証明作業をする者がいないし、路地裏に監視カメラがある訳もなく証明しようがない。

そのため俺の場合は戦闘案件に何としてもコスチュームを着なくてはならないのだ。

普段なら中に着こんでいるのだが今日は仕事ではないため持ち運んでいるだけであった。

急いで着替え始める。

「こ、個性は・・・ヒーローがヴィランに使う以外に・・・使っちゃダメなんだぞ。」

そうだ！その通りだ少年。

「バ~~~~カ。そんなもん守ってっからガキなんだよ。」

うおい！中々のクズじゃねえか！

「び、びっちゃんがやられた。に、逃げろ。」

そうだ！早く逃げてヒーローでも警察でも呼びなさい。

「だーはっはっはーダッシーなー！」

ダサくない。逃げるとは当たり前のことだ。

そう思っていると息子の反応が動き出した。

二歩ほど歩く。方向は路地裏から出る方向だ。

よし、良い判断。

そう思っていると俺も着替え終えたので！直ぐに路地裏に走った。

すると、アホな言葉が聞こえてきた。

「おい。」

「あん？」

「お前ら、土下座。」

「はん？何で俺らが、んなもんすんだよ。」

「そうか。しないならさせてやんよ。」

何やってんだ息子ー！！

路地裏に到着し、息子の反応がある方向に走ると煙が溢れてきた。

?!何だこの反応は?!動きが速い?!

息子から発信されている信号があまりに速く動いた。そのことに驚きながらも現場に到着。

煙が晴れると中学生と思われる程の三人の子供が跪いて頭を垂れさせている状態になっており、そんな状態の彼らをゴミでも見るかのような目をしながら息子は立っていた。

背中がゾクリとした。

これは本当に俺の息子、いや、子供なのか？

今思えば色々とおかしいのかも知れない。この年頃にしては息子は遊ばない。普通なら友達を作り、何時でも遊んでいる年頃である。

なのに息子はそんなこと一切ないようなのである。そんなことがあるのだろうか？

色々と思考している内に息子は少女に向かって歩き出した。そして、少女の近くに行くと思子は少女に抱きつかれた。そして一度離れたものの、もう一度抱きつかれた。そしてそのまま動かない。俺は不審に思い息子の顔が見える位置まで来た。

・・・うん。俺の息子だったわ。少しでも疑ってスマン。

カシヤリ

とりあえず携帯を出して写メっておいた。何ともだらしない顔である。だが俺には気持ち分かる。あれは確実に女性が持っている二つの山を堪能している。最高だ！とか思ってるね。確実に俺の息子だわ。

その後、何やら息子は自分の個性である玉を少女に渡し、少女は走って帰って行った。

息子は見送ったものの、ハツとした顔をして困り出した。当然である。被害者を助けたものの被害者が行方不明となってしまうのだ。何とも詰めの甘いこと。このままでは最悪、警察が来た時に中学生共はいきなり襲われたとでも言っただけで息子を凶悪犯に仕立て上げるかも知れないのだ。

しょうがない。そろそろ俺が出てってやるか。そう言えば俺の職業を息子に言った覚えがないな。ふふっ、どんな反応するか楽しみだ。

「遅ればせながら・・・俺が来たー！もう安心だぜ、小僧ども!!」

11話

皆さん、いかがお過ごしでしょうか。自分ですか？自分は・・・
「ほれほれくもつともぎれくどんどんもぎれく」

意識ヤバイ腹減った血が足りん。・・・どうも、こんにちは。峰田
実になった青年Aです。

例の初・個性を使った喧嘩から三日が経過しております。いやくあの後大変でした。

峰田父上が来て数分後、警察が到着。警察に事情を話して直ぐに帰ろうと思ったのですが、自分の個性が不正使用では？と問題になりました。まあ、現場の見た目は確実に自分の個性が中坊共を捕まえてますからね。最初の被害者である少女が居ないし。しかしながらも一人被害者がおりました。びつちゃんです。

彼の証言とHir・・・サイドキックとしての峰田父上の証言。そして近くにあったコンビニなどの監視カメラから少女が中坊共に路地裏に連れていかれた事が確認され、事なきを得ました。まあ、警察からは少女を助けたとはいえ個性の使用に関しては超厳重注意を受けましたがね。

そして被害者びつちゃんは何やら自分に

「野球もう一度頑張るよ。」

と言ってきました。

・・・なんのことが分からんし！

とりあえず笑顔を作り、頑張れと言っておいた。

彼は恥ずかしそうに顔を赤くして走って帰りました。

・・・なんでそんな反応？

「え？お前ホモなの？」

峰田父上の言葉に対して、自分は峰田父上の顔に拳で答えたのは悪いこととは思わない。

痛って〜。あ、お前明日から俺が鍛えてやるよ。」

・・・え？

突然過ぎる宣言に頭が少し追い付かなかった。

と、いうわけで鍛えられています。辛い。

場所はどこのビルの地下です。何やら峰田父上の知り合いであるヒーロー事務所の訓練室を借りています。

「うーん、やっぱりそういうことかなあ。」

何がそういうことでしょうか？もうかなりもぎるの辛いのですが。

「あーいやな、ちよつとこれ食ってくれ。」

なにこれ？

「一部のヒーロー御用達、携帯食料だ。」

そうですか。携帯食料・・・ね。どう見ても〇ロリーメ〇トですけど。

「とりあえず食え。これさえあれば三日程度は何も食わなくて生きていけるって品物だ。」

く、食いたくねえ！確実に太るやん！

「ええから食わんかい！」

モガー！

無理矢理食わされた。けどこれは・・・

「体調良くなったろ。」

悔しいけど劇的に良くなった。

「よし。じゃあ、数個分もぎってみろ。」

今の体調ならイケると思ひ、言われた通り数個分もぎる。するとやはり出血しない。

なるほど。コレって・・・

「おお、自分で答えが出たか？」

ああ、分かったよ。栄養不足か。

「だな。個性つてのは超常的な能力をもたらすものの、大小様々なデメリットがある。お前の場合、モノを自分自身から造ってるから限度があるんだよ。身体も小さい。小さいってことは栄養の貯蔵量も少ないってことだ。」

ある程度もぎって血が出るってことは身体自体がこれ以上造れな

いって危険信号を出してたってことか。

「ま、そうだな。そういうことになるな。」

なんてコツタイ。だとすれば自分のもぎれる玉の数が増えるってことは……

「今のままなら無いだろうな。だがまあ、そろそろ成長期だし、気にしなくても良いだろ。」

やったね。問題解決だ！アハハハハハ！

おわた。すでに108cmです。公式にある峰田実の身長も一緒である。マジおわた。

「よし。じゃあ次だな。」

次？峰田実の個性で数を増やす以外に強化することなんてあるっけ？

「あるある。個性自体の特性の強化だよ。」

??

「お前の場合、超くつつく。自分にはくつつかなくて跳ねるだろ。」
ですね。

「それってグローブとかをしてるときにも跳ねてくれるのか？」

??たぶん出来るだろ。

そう答えた。試したことは無いが原作峰田は出来たからね。

「そうか。じゃあやってみてくれ。」

峰田父上が嵌めていたグローブを外し、渡して来たので、それを嵌めて自分の頭から一つもぎった。が……

嘘やろ？ちよっ……え？

もぎもぎは……玉は……離れなかった。

「さて、たとえヒーローでも人間だ。素手だと相手の個性を受けたときに怪我をする。つまりはグローブは必須だ。」

でしょうね！特にエンデヴァーみたいに火を投げられたら特殊なグローブでもないと火傷しますもんね！え?!どうすんのコレッ!どうしよう?!

「何でそんなに慌てるんだ？」

自分それなりに頑張ってたつもりで、そろそろ原作峰田の力量を越えたんじゃないかなどと少し調子に乗ってたのに、結果、原作峰田より汎用性無いつてことだよな?!自分確実に原作より弱いよね?!

などと言えるわけないのでヒーロー目指してるのにヒーロー必須の装備が出来ないので絶望したと言っておいた。

「ふっ、安心しろ。そんな絶望を越えさせるために俺がいるんだぜ。」

み、峰田父上えええ!!カッコエええ!!

「さあ、俺を信じて俺の指示に従え！」

はい!

「まずはグローブを着けてる手でくもぎれ〜！」

はい!

「もぎったらそのまま投げろ〜!くつついたままなら片方の素手でグローブから取って投げろ〜！」

はい!

「以上だ！」

はい!.....はい?

「結局は個性だからな。使う以外に強化することなんて出来ない!だから頑張れ！」

キラリと歯を輝かせながら言い放つ峰田父上に怒りを覚え、思わずグレイプラッシュ(片手バージョン)を放った自分は悪くないと思う。

12話

月曜日。

起床、登校、勉強、帰宅、出発、ビル、訓練、帰宅、就寝。

火曜日。

起床、登校、勉強、帰宅、出発、ビル、訓練、帰宅、就寝。

水曜日。

起床、登校、勉強、帰宅、出発、ビル、訓練、帰宅、就寝。

木曜日。

起床、登校、勉強、帰宅、出発、ビル、訓練、帰宅、就寝。

金曜日。

起床、登校、勉強、帰宅、出発、ビル、訓練、帰宅、就寝。

土曜日。

起床、出発、ビル、訓練、訓練、訓練、帰宅、就寝。

日曜日。

起床、出発、ビル、訓練、帰宅、就寝。

．．．．．エンドレス．．．．．

エンドレス．．．エンドレス．．．

．．．．．

．．．．．

．．．死ぬわ!!!!

「うお！ビックリした。なんだよ急に。」

隣で筋トレをしていた峰田父上が目を丸くして言った。

なんだよ急に。じゃねえよ！なんだこの状況！

「ん？何か問題か？」

問題しかないわ！休みが無いやろがい！休みをよこさんかい！

「え？休みたかったの。休めばいいじゃん。」

．．．は？

「いや、別に鍛えてやるとは言ったけど強制的な訳ないじゃん。」

．．．えくつと、じゃあ休んでOK？

「OKOK!好きにしるよ。むしろ何でコイツ毎日鍛えてんだって思ってたし。俺なんて土日は基本家にいるじゃん。」

え?そうだったっけ?あれ?そういえば土日に家を出るときに見送られたことがあったような・・・。

「おいおい、その年でモノ忘れか?全く可哀想なヤ」

あれ?でも確か『土日も鍛えてやつから』って言って朝早く叩き起こされて・・・思い出してきた。そうだよ。確か変な香りがして気が遠くなって気がついたら玄関の外にいて『あとで行くから先に行つてろ』って言われて、何か頭がくらくらするけど鍛えなければって思つて訓練場に行つたんだった。

そう言うのと峰田父上が目を逸らしながら額から汗を流し始めた。

おい。おい、こつち向けよ。自分に何をした。

峰田父上は溜め息と共にとんでもないことをぶちまけた。

「ふう。わかつたわかつた。言うよ。ぶっちゃけ、ちよつとしたサポートアイテム使った。そして理由は・・・夫婦でイチャイチャしたかった!それ以外に何もない!!」

・・・は?

「いいかね息子よ。夫婦つてのは色々あるんだよ。特に今回はな、お前に付きつきりだったろ。鍛え始めなんてさあ、ずつとお前といたじゃん。女っ気ないじゃん。辛いじゃん。だからやつた。後悔はない。」

な、なんて正直なヤローだ。怒る気しか起きない!ので、シネー!!
助走を付け、わりと本気で殴りにかかる。しかし、峰田父上は軽くステップを踏み紙一重で避けた。

なんだと?!

「ふっ、甘い。砂糖以上に甘いね。今までなんだかんだで戦闘訓練もしてただろ。だからな、お前の動きは把握してんだよ。」

なん・・・だと・・・くそっ!これならどうだ。

自分は峰田父上を追うようにどんどん突っ込みながらパンチを繰り出していく。しかし、どうやっても峰田父上は紙一重で避け、捉えることが出来ない。

「いいか息子よ。俺の持論だがサイドキックに大事なことは何だと思
う?。」

大事なこと? ヒーローをサポートすることだろ。

「正解だ。つまりサイドキックはヒーローより先にやられちゃあいい
ないんだよ。つまりサイドキックに必須な能力とは」

?・・・そういうことか! 生き残る! つまりは回避能力!

「いやはや優秀優秀。正解。」

だけど今までの戦闘訓練は半分は当たってたじゃねえか!

「まあスピードはあったからな。だが慣れちまえば・・・それだけだ。」

・・・クソつたれー!!

放たれたそのセリフに自分は必殺技を繰り出そうとする。しか
し・・・

グレープ

「バカめ!」

自分が頭に手をやる前に峰田父上は脱兎の如く訓練場の入り口に
走りドアを開け外へ出た。

は、速い!

「お前は気づいてなかったようだから教えてやる! それをやる前のお
前、数瞬だが完全に動きが止まるぞ。」

な、マジか?!

「超ジーマー。そのクセ直しておけよ。初見には効くが慣れたらど
うってことないぞ。壁も壊せない攻撃力無しの個性だからな。もっ
と考えた動きをしろよ。では、さーらばー! フハハハハハ!!」

笑い声がドアから遠ざかっていく。峰田父上に逃げられた。

だが今は何より気持ちモヤモヤする。

別に自分が強いなんて思っただけはいいなかった。だがこの気持ちは何
だろうか? とてつもなくモヤモヤするのだ。

これはもしや悔しいのか? いや、負けて当然なのだ。フリーだなん
て言ってもサイドキック。所謂プロだ。プロに負けて悔しいとかあ
り得ないだろう。

腕が震えている。

悔しいなんてあり得ない。プロに負けたから悔しいなんてバカである。

しかしながら・・・

「・・・クソがあああ!!!」

自分はバカである。そして同時に思った。

「・・・プロってスゲーなあ。・・・ふはっ！アーハッハッハッハッハ!!」

笑いが込み上げてきた。

今の身体になってもう八年。プロになるためにずっと鍛えてきたけど、まだまだ足りない。足りなすぎた。

今までは正直、生き残るために鍛えたところが大きい。だが今は

「あの余裕しやくしやくな峰田父上をぶん殴る！」

という目的が出来た。

よっしゃ！今から訓練・・・は無理だな。

身体が重い。ゆっくり動かすのが精一杯である。

今日は帰って寝るか。

訓練着（ジャージ）から着替えてビルの地下階段をゆっくりと上がる。る。

ダルい身体を動かしながら階段を昇りきると驚くべき光景が目に入った。

その光景とは峰田父上がボコボコにされ、一人の女性の、しかも片手によって吊り上げられていたのである。

「あら？今日はだいぶ疲れたのね。早く帰りましょうか。」

さらに驚くべきことは、その女性。峰田母上である。

今だアイアンクローをされながら吊り上げられている峰田父上は苦しそう・・・ではなく幸せそうにハアハア言っている。

何でこのような状況になったのでしょうか？

「うーん、なんでかしら？この人は何か言わなかった？」

思い当たる節が特に無いのですが？

「そう？・・・休日の話とかしなかった？」

「・・・イチャイチャ？」

「ミシッ!!」

「あらあら、したのね。やだわ恥ずかしい。」

「ミシミシミシ!!」

あの、母上・・・父上の頭蓋骨からしちやいけない音が・・・

「大丈夫よ。ちゃんと手加減してるから」

「手加減なんてするじゃねえ!」

「ミシミシミシミシミシッパキッ!!」

「あふん。」

あ、逝った。

父上自らの言葉でトドメを刺された父上は、母上の肩に担がれ荷物のように扱われる。

自業自得とはいえ、峰田父上をこのように簡単に鎮圧出来る母上。もはや

「あつ、さつきの話は忘れるようにね。」

恐怖である。

しかしながら、まさか母上が恥ずかしさを暴力で隠す暴力系ヒロインとは思わなんだ。

「何か言ったかしら?」

い、いえ何もありません。サー!

「じゃあ帰りましょうか。」

「イエッサー!」

「サーよりママかしら。」

サー!じゃない!イエス、ママ!!

「ママ。・・・うん、まあよろしい。何か食べたいものはある?」

カレーが食べたいです!ママ!

「じゃあ買い物しなくっちゃ。行きましょうか。」

・・・そのまま行くでありますか?」

「何か問題?」

問題しかありませんママ！

「じゃあ問題ないわね。さ、行きましよう。」

イ、イエスマム。

こうして、今日は新たな目標と峰田家の力関係を再確認した。

「……フヒ。俺の妻は最高や……」

ボソツと聞こえた言葉に自分は……

DMがこの世の最強なのか？

と本気で悩んだ。

13話

季節は夏になりました。

「あ、俺ちよつと長いこと居なくなるから。適当に頑張っておけよ。」

「と言い、峰田父上が本当に長期の仕事らしく居なくなつて2週間。自分は現在

今日も楽しく訓練わつしよ〜い!

どうもこんにちは。峰田実になった青年Aです。何故こんなテンション高いかつて?それはですね〜ついにグローブ付けた状態で、もぎつて投げれるようになりました!

いやね、一応ですけど疲れきつた時なんか出来てたんですよ。でも何故か元気な時に投げれませんでした。わけがわからないよ。

そんな時つて、若干ながら現実逃避したいじゃないですか。そんで昔の漫画を思い出しながら寝てたんですよ。そしたら良い漫画を思い出しまして。その漫画では自分から出てるエネルギーを道具にも纏わせて穴掘りをしておりました。やり方は簡単。『道具も自分の一部だと思え』だそうです。

……天啓キターー!!

「と思ひ、さつそくやつてみることに。すると、あらあら〜簡単に離れるではないですか。」

「よつしやキタこれやでー!!」

つまりは今まで出来なかつたのはグローブは道具だと思つていたから。それだけであつた。疲れた時は考えてる力もなかつたから出来たのだらう。理屈は分からない。個性つて不思議です。

しかしながら正解を導けたのです!めっちゃ嬉しい!!

これでやつとこさ出来ます。やりたかつたあの技を!!

もぎつて〜もぎつて〜足に装着!さらにもぎつて手に装着!いくぜ!……壁登り!

玉を壁に吸着させ、壁を這うように登ってみた。

大成功で御座います。ヒヤツハーです。もう何でしょう。ワシヤワシヤと動けます。サイコーです。

これが出るから何だというのか。そういう方は多いでしょう。疑問にお答えしましょう。この技、市街地戦に向いております。

例えばビルとビルの間などの細い道に追い込まれたとしましょう。だが、この技があれば安心です。ビルの壁を素早く登り脱出出来ます。

偵察だってお手の物。目的の部屋まで登っていき、集音マイクで録音バツチリ!

などと用途は色々あるのです。ただ一つ言えることがある。それは

「うおっ?!気持ち悪っ!!」

そう、端から見れば気持ち悪いのである。まあ、動く見た目がね、壁をワシヤワシヤ動く

「ゴキブリ見てえだな。」

うっさいわ!!その声は峰田父上だろ!

「オツス〜お疲れ〜。」

軽い口調で話す峰田父上。自分は壁から離れて向き合ってみると驚くことに峰田父上は腕にギプスをしていた。

何やってん?

「いや、何って仕事だよ。サイドキックやって来たんだよ。」

峰田父上さんや。あなた言ってたでしょうよ。回避はどうした。

「う〜ん、今回は油断したわ〜。あれはズるいって。」

何があつたんだ?

「それがよく。敵のアジト見つけてよ。突入するじゃん。部屋見つかるじゃん。高校生くらいのガキが居てよ。ベッドで寝てたから人質かと思つて助けようとするじゃん。」

長いよ!簡潔に!

「そいつヴィランだった。」

はあ?!

「触られただけでヒーロースーツやら皮膚やら崩れちゃってよ。」
で、そいつは?」

「とりあえずボツコボコにして気絶させた。そしたら、そいつの下から黒い霧が出てズブズブ沈んでったよ。」

ん?つまりは?

「逃げられちゃった。てへぺろ。」

世界で一番可愛くない『てへぺろ』である。

じゃあ、今回は仕事失敗したん?

「いや〜成功かな? 大本のヴィラン、かなり再起不能な感じにはなつたし。」

再起不能って・・・ヒーローはヴィランを無力化するのにそこまですていいのか?

「まあ駄目だな。ただあまりに悪どい奴だったからなあ。今回動いたヒーローとも因縁バリバリだし。しょうがない感が強い。そういう場合もあるさ。」

少々歯切れ悪く語るものの、峰田父上が真剣に語る姿にプロとしてのナニかを感じた。

「まあ、ヴィラン死んでるかもだけど。」

え?」

「いや〜ヒーローがやつとこさ『倒した』と思って大怪我しながら気絶してる間に黒い霧が出てヴィラン消えてったのよ。」

じゃあ死んでる死んでないが分からない。だけど再起不能確實つてこと?

「だなあ。ヴィランの奴、腕も切れちゃってたし。いや、もう本当に大騒動でした。」

そんなにヤバかったんか。でもニュースでやってなかったぞ?」

「ああ、無理無理。公式には出せないヴィランだし。動いたヒーローも怪我したなんてニュースでたらヤバいし。」

大人の事情ってやつですか。自分には言っていないんか？

「本当はダメだけどな。お前なら言わんだろ？」

信用されてらっしゃる。まあ、体は子供、頭脳は青年ですので当然です。自分はサムズアップのポーズで答えた。

「じゃ、そゆことで。あ、そうだ。今日のこの時間なら上の事務所に訓練室を貸してくれてるヒーローがいるから挨拶に行つてこいよ。」

え？ここって本当にヒーロー居たの？

実はこのビル、毎回訓練しに来るが事務所に電気が付いてるところを見たことがないのである。人が居るとは思わないでしょ？

「あいつ忙しいからなあ。普段も別の県にいるし。」

峰田父上が『あいつ』呼ばわり。大したヒーローではないらしい。ですが、自分はどんなヒーローも尊敬してます。敬意を持って接します。

「んじゃ先に帰つてっから。」

手をヒラヒラとさせながら帰る峰田父上。いつもならもう少し軽く口を言つて帰るのだが今日は特になかった。本当に疲れたのだろう。

・・・上まで見送つてやるか。

峰田父上を見送つてビルの階段を昇り、一つの部屋の前まで来た。その扉には『炎』という漢字がデカデカと描かれており、中から人の声がする。どうやら電話でもしているようである。とりあえず待つておく。

しかしながら、この扉。嫌な予感しかしないのは何故でしょうか？

声がしなくなりました。とにかく挨拶だけはしなくては。

扉を数度叩くと中から『入れ』と聞こえました。行きましょう。失礼します。

部屋の中へと歩みを進めると、中にはサイドキックらしき方々が数人。真ん中の奥に高身長、筋肉ムキムキ。何より特徴なのは自分で発

生させた炎を仮面のように顔に付けている男がいた。

そうです。皆さんもよく知っている事件解決数史上最多のヒーロー『エンデヴァー』である。

「お前がチエイサーの言っていた息子か。」

「……本当に峰田父上は何故この人を『あいつ』呼ばわりしたのでしょうか？後でぶっ飛ばします。」

どのように言っていたか分かりませんが峰田父上が父親です。

「ふむ、奴の息子らしくないな。」

まあ、峰田父上は反面教師としては素晴らしいですね。今日は峰田父上に挨拶してこいと言われて来ました。

「そうか。では用は済んだな。」

はい。いつも訓練室を使わせて頂きありがとうございます。

「そうか。ではもう行け。」

そっけない感じがとてもエンデヴァーです。

そう言えば聞きたいことがありました。

「なんだ。」

今って夏ですけど、暑くないんですか？

………静寂が訪れました。

サイドキックの皆さんの顔が何か凄いです。

あれ？やっちゃった？

しかし、エンデヴァーさんは一言。

「奴の息子で間違いないな。」

溜め息混じりに言いました。

……そんなバカな?!

本気でどの辺りが峰田父上に似ているのか分からなかった。

14話

呆然である。だって露出凶がおる。何でヒーローを目指してる高校生に露出凶がいるん？

『おーっつと?!おいおい!なかなかシビイ奴がいるじゃねえか!早くモザイク入れねえと放送出来ねえぞテレビ局!!』

『あいつ、またか。』

プレゼントマイクとイレイザーヘッドの掛け合いが聞こえてくる。

またか。ってことは常習犯ですか。ヒーロー目指して大丈夫なんかな?あ、でも急いで服を着ているところを見ると変態さんではないようだ。個性かな?謎だ。

今日は『雄英体育祭』。現在障害物レースが始まった所である。だが

「皆さん、携帯でテレビを見ないように。私だって見たいですが授業中です。授業に集中しなさい。」

おっと、先生から注意を受けました。

クラス中から携帯をガタガタとしまう音が響いた。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。中学生になりました。まあ、なっってから既に1年経ってるので現在2年生ですけどね。

そう、中学生になっています。ですから金曜日は普通に授業なので、残念ながら『雄英体育祭』をゆっくり見ることが出来ません。残念です。

「ではしっかりと復習するように。」

・・・終わった。と言ってもまだお昼です。でも帰って大丈夫。何故なら来週からテスト週間ですからね。早めに授業終わって嬉しい。

「あ、峰田君。帰り道同じだね。一緒に帰らない?」

おう、了解。

今話しかけてきたのは、クラスどころか、この中学で一番のイケメンである『矢吹スギル』君である。

わりとちゃんと話す友人で・・・あれ？小学生あたりで友人を作った覚えがない。初めての友人かも知れない。

ただこの友人、一つ問題がある。

「ぎ、帰ろうか。」

おう。

その問題点とは彼の個性である。その名も

「キヤー!!」

「あ、危ないっ、わぶっ!」

何が起きているか説明しよう。簡潔に言うなら女の子が階段から落ちてきた。矢吹が気がついて受け止めるも失敗。女子のスカートの中が見・・・ありがとうございます。二人は少し転がって

「いったらいい。」

「もがく。」

「や、ちよ、動かないで。いやっ。」

矢吹が下になり、女の子は矢吹の顔面にお尻を乗つけた状態である。とつても・・・T〇らぶるです。

こんなT〇らぶるの状態になつてしまうこと。これがイケメン矢吹の『不運（アンラツキー）』という個性である。

どの辺りが不運だと言うのか、じっくり話し合いたいものだ。

女子よ、本当に良い表情をありがとう!

二人を起こし、女子は真っ赤な顔をしながら走って帰って行った。

「・・・僕って本当に不運だなあ。」

おいコラ。お前今から説教な。

「なんで?!」

その後の帰り道、めちやくちや説教した。

.....

さて、本日記になる問題が増えた。説教後の話だが矢吹が

「峰田君は漢らしくて良いよね。」

と何故か熱い感じの視線で言ってきたのだが。
一瞬・・・本当に一瞬だが尻が冷えた。
何故や？

15話

先日、初・友人から熱い視線を浴びるも特にその後の変化はなく安心してます。気のせいだったみたいです。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。

さて、世の中色々な小説つてありますよね。その中には『肉体に精神が引つ張られる』なんてものがあります。

簡単に説明するなら

身体？高校生。

精神？おっさん。

そんなおっさんが恋した相手？女子高生。

それは、おっさんが年下好きだったのでは？と疑問もあるだろうが気にしないで頂きたい。

とまあ、これが『肉体に精神が引つ張られる』現象である。そして現在、自分はこの状況に落ちています。峰田になってから初の恋。初・恋をしています。誰に初恋をしたかって？それは

「あ、峰田くん。おはよう。」

おはー。

「お、峰田じゃん。」

オツス。

「峰ツチ、おっはー。」

おっはー。

とまあ、挨拶する女の子は他にも大勢いますが割愛。だがしかし、そんな挨拶をする女の子全員にドキドキしております。

つまり全員です。

「え？」

いや、だから全員に初恋をしました。

「・・・たぶん恋とは違うんじゃないかな？」

な……んだ……と……

「そんな驚愕の真実みたいに驚くことかい。」

今、相談している相手は初の友人であり、学校一のイケメン『矢吹スギル』君である。相談し始めた時は何故か気落ちしていた。だが今は、しっかりと聞いてくれている。友人思いの良い奴だ。

「峰田君。君は恐らく思春期男子特有の病気になるよ。恋のドキドキと性のドキドキが混じってる駄目な病気に。」

……あ、いや、そんなことはないだろ。

「じゃあ、やってみせようか?」

な、何をする気だ?

「僕の個性は知ってるでしょ?」

『不運(アンラッキー)』だろ?

「そうだね。だからこそ、早いこと証明できるよ。ちよつと一緒に歩こう。」

矢吹は椅子から立って廊下に出る。その隣を自分が歩く。

「あ、二人ともバイバイ。」

「うん、またね。」

またなく。……うむ。まだ何も起こらないか。

「まあ、僕の個性は自動発現型だからね。もう少し歩こうか。」

自動発現型か……そういうのって個性って言えるのだろうか?

考え事をしていたその時、事が起こった。

「キヤー!!」

という悲鳴と共に、胸の大きい女子が何故か胸をはだけさせた状態で……ありがとうございます。黒ブラはセクシーでかなり良いです。女子は矢吹に飛んで行った。矢吹は受け止めようとしたが勢いには勝てなかったようで二人はゴロゴロと転がって倒れた。

そして当然のように矢吹の顔は女子の胸に埋まっている。

羨ましいだなんて思っていないからね。埋まりたいか思っ

な………チクショーが!!

「どうだった?」

何が?

「ドキドキしなかった?」

ん、特になかったぞ。

「そうなんだ。でもそれは何だい?」

矢吹は俺の胸辺りを指を差して言う。何のことを言っているのか分からないので自分も視線を動かして胸辺りを見ると、そこにはサムズアップをしている自分の指が……

あ、あれ? 何これ?

「僕は何処かの場面でドキドキしていたんだと思うよ。あとね、これを見てよ。」

矢吹は携帯をポケットから出して動画を再生させた。そこには峰田が……自分が写っている。

お前、なに盗き

「いいから見てて。」

なにやら真剣なので、しようがないと思い、動画の続きを見る。そこには自分のヤバイ行動と表情が写っていた。

……バカな?! こんな覚えはないぞ!

そこに写っていた峰田は女子と挨拶をして、すれ違った後に女子のことをガン見していたのだ。特にスカート辺りに視線が集中している。

な……んなんだよ……これは……

「君のその反応を見る限り、本当に覚えが無いんだね。ただ、この動画を見る限りでは恋のドキドキではなく性のドキドキだと僕は思うよ。」

そ、そんなことって……

「そもそもここは日本だからね。峰田君の話聞いた時に、一夫一妻が当たり前の中で暮らしているのに、複数の女性に恋をする。そ

んなことは少ないのでは？って思ってたんだ。」

そ、そうか。

もう自分は何も言えない。自分が・・・まさかこんなことになっていたとは、思いもよらなかった。

「ごめんね、峰田君。きつと君は無意識に女子のスカートを見ていたのだろうけどさ、ここで自覚しないと女子が気が付いた時に変態認定されてしまうかも知れないんだ。だから・・・」

・・・大丈夫だ、矢吹。ありがとな。教えてくれて。むしろ気が付かせるためにお前の個性を使わせちまって。すまねえ。

「そんなことないよ。僕達は友達じゃないか。」

そうか、ありがとうな。・・・ところでこの動画っていつの間に撮ったんだ？さつきにしているはアングルが少し遠くから撮られてる気が・・・「気のせいだよ。さつき撮ったよ。」

そうか。気のせいか。

「そうだよ。気のせい気のせい。」

だよな。気のせいだよな。ハッハッハッハ。

自分達は友情を確かめるように笑いあつて、初恋？ドキドキ案件は、こうして幕を閉じた。

絶対に気のせいじゃねえよ！自分は矢吹のほぼ隣を歩いてたんだぜ！だったら何で斜め上からの視点になってないんだよ！ほぼ横から、しかも数メートル以上離れてたよ!!

など言いたいが言えなかった。・・・だつて何か怖いし!!

「あ、そうだ。峰田君つて高校は雄英を受験するんだよね？」

お、おう。そうだけど。

「僕も受けるから。受かったらよろしくね。」

あ、はい。

返事を返すも心の中では落ちてくれと願った自分は悪くないと思

う。

16話

「峰田君！僕は・・・僕はヒーローの卵に！雄英に入れたよ！」

モジャモジャの緑色の髪の毛を頑張つてウサギのようなV字を表すようなオールマイトな髪型にした少年が言う。

そうか！良かったな！たださ・・・なんでそんな筋骨隆々なんでオールマイトに近い感じになつてんの？

「そんなの決まつてるさ！君の言葉のお陰でいっぱい鍛えたからね！」

そうか。わかった。おめでどう。自分のせいか。ちよつ、なんでそんなジリジリと近づくんのだ？

「何をいつてるのさ！ありがとうという気持ちを身体で表現し、友情を確かめるためさ！」

・・・ちなみにその表現方法は？

「ハグさ！」

ダツシュで逃げる！！

を選択した。

しかし魔王からは逃げられない。回り込まれてしまった。

「さあ！友情を確かめ合おう！！」

筋肉が！筋肉が迫つて！！い、いやーーーーー！！！！

「おーい。そろそろおk」

「いやーーーーーめてーーーーー！！！！」

「うるせえ！！」

ゴフツ！

は、腹に衝撃が?!はっ！ここは?!緑谷は?!

「緑谷って誰だよ。早く準備しろよ。送つてやっから。」

峰田父上がダルそうに言いながら部屋を出ていった。

ふうふう。マジで夢で良かったー！あんなことになったら原作

崩壊すんだろ！全部ワンパンチで終わってまうわ！ワンパンマンだわ！

などとツツコミをいれながら着替えます。

皆さん、おはようございます。そんな制服に着替えてるのは峰田実になりました青年Aです。

しかしながら本当に嫌な夢を見ました。おそらく原因は先日見た動画によるものかと思います。

「おーい、息子く。これ見てみるよ。」
「なんで？」

峰田父上がタブレットを持ってきて画面を見せる。そこには動画投稿サイトが映っておりタイトルに【開発少女part14】とあった。

動画を再生すると

『この動画は特別な許可を得て撮影されております。』

というテロップが流れ、流れ終わるとどこぞで見たことのある少女が出てきた。

『さあ、本日も皆さんに見てもらいたいベイベーを紹介します！』

少しブカブカとした作業服を着て顔に油汚れを付けているが、どう見ても以前助けた発明大好きっ子ピンク髪の少女である。だいたい一部が育ってらっしゃる。

『それがこちら！ザ・ワイヤーアロウ2号です！1号との違いはこのアンカーとなる部分の先端部！1号は先端部が矢の形をとっており、壁や岩場にひっかける、もしくは刺して使いますが2号はこの玉の形を採用！この玉の特性は超くっつきます！壁を痛めることはございません！では早速ご覧下さい！』

少女は後ろにある30メートルはあるであろう壁を見上げ、装備しているワイヤー&アロウの肩部分のボタンを押す。すると胸の下からアンカーが射出され、見事壁の上にくっついた。

『では、行きますよー！』

さらにもう一度、肩部分のボタンを押すと勢い良く少女が登っていった。

『どうです?! スゴいでしょ!! しかし欠点がありまして! この玉のくっつく時間は使用して30秒ほどしかありません。ですのでそろそろ落ちます。』

と説明する少女。

は? 落ちるって、えっ?!

思っているうちに少女の身体は空中を舞い、そのまま背中から落ちた。完全に事故映像である。自分は開いた口が塞がらない。

しかし少女は何の怪我也無いように直ぐに起き上がってきた。

『ビックリしましたか! 私が無事な正体はコレです!』

言った少女は突然服のチャックを下し、前をはだけさせ、その豊満なm・・・えくと、後ろを向いて背中を見せた。

そこには無数の玉が見受けられる。

『2号の玉はくっつく特性ですが、もう一つ特性がありまして、くっつく効果が無くなると超弾む特性になります。所謂これがショック吸収の役割を果たしてくれるのです! これを服の下に入れておけば殴られても痛くありません!』

・・・あれ? コレって・・・おお! マジか! もぎって投げる、壁に張りつく、以外に使い方が見えたぞ!

『では! 今日のベイビー紹介はこの辺で! できるだけ見てて下さいデカイ企業さん!!』

×の言葉を最後に動画が終わる。

「どうだ?」

何が?

「何が? じゃねえよ。もつと危機感を持ってよ。お前の個性だろコレは。解明されかかってるぞ。」

・・・あ。

マズイ。これは不味い。もしコレがヴィランの手に入って、更に研究でもされたら自分の個性がヴィランに効かないことになりかねな

い。

「再生数もそんなに伸びてないから大丈夫だとは思いますが、今後は気をつけろよ。」

了解です。

何とも良い教訓になった。いくらあの時、理性が負けたとは言え、個性の譲渡は何があってもしないと心に誓った。

それにこれは原作の一部ブレイク化してる。これで恐らく発目明の体育祭ワンシーンは『ザ・ワイヤーアロウ2号』で来るだろう。あんな少しの出会いでこうなるとは思わなかった。

となると、緑谷出久に会ったことは……かなり不味い気がして……あれ？これかなり不味いぞ。原作では確か絶望状態で精神的に良くない状態になってたはず。自分の言葉で、もし立ち直ってたらどうな……

「……おい、おい、息子どうした？顔がかなり悪いぞ。」

肩を叩かれ、思考が急停止した。

「脅し過ぎたな。わりいわりい。そろそろ寝ておけ。今寝ておかないと明日持たないぞ。」

時間を見ると、すでに九時を回っていた。明日は四時起きなのに結構時間が経ってしまった。いた。

言われた通り、そろそろ寝なくては。何故こんなに早く寝て、早く起きるかって？

何故なら明日は『雄英高校生受験日』だからです。

早いねー。本当に早いね。中学三年間ってアツという間でした。

峰田父上、ありがとな。そろそろ寝るわ。

「おう。」

ところでさ

「ん？」

さっきの動画ってどうやって見つけたんだ？

「……………」

だらだらと冷や汗をかく峰田父上。

そもそもさっきの動画は絶対に偶然見つけたはずなのだ。だって、こんなん知ってたら受験日前日に見せるはずも無いからね。

自分は素早く動いて峰田父上からタブレットを奪取した。

「あつ、こら返せー！」

峰田父上が迫ってくるもステップを踏んで回避した。

「なんだと?!」

ふっ、甘いわ父上！今も父上を殴れてはいないが、どんだけ父上の回避を見てきたと思ってる！流石に出来るようになるわ!!

「くっ！これだから下手に優秀な奴は！鍛えてやって良かったよ!!」

褒められながら、攻められながらもタブレットを操作して検索履歴を漁った。結果、出るわ出るわ卑猥な検索履歴。

そりやそうだ。さっきの動画もタイトルは「開発少女 part 1 4」である。見ようによってはヤバイタイトルである。

「もう、なにやってるの！いい加減寝なさい！」

突然の怒号。振り向くとそこには峰田母上がおりました。ドタバタと煩くし過ぎたようです。

そして、峰田母上はこのドタバタの原因がタブレットにあると読んだらしく素早く自分からタブレットを奪い、画面を見た。

ちなみに自分、奪われる際、一切反応が出来ませんでした。

「……………どっちっ…」

自分は素早く峰田父上を指差す。

「……………テヘペロ。」

峰田父上が言った瞬間、峰田母上にアイアンクローをされ、母上の片腕で浮いている状態にされている。

いつもより、怒ってらっしやる。それもそのはず。だって検索履歴が……言っではなんだが年齢的にわかい……

「実ちゃん?」

何でもありません。考えてもいません。

「そう。じゃあ、明日は早いから直ぐに寝るようにね。」

イエスです。

アイアンクローをされたまま峰田父上が連れていかれる。完全に表情は悦になつてるので大丈夫なようだ。

そして廊下に出ると

「もつとーもつとだ!!バッチコイ!!ウギャ〜〜!!」

きつと今頃さらに悦に入っていることだろう。なんか最近峰田父上の叫びが聞こえると清清しい気持ちになれる。

さあ、眠ろうか。

という、一幕があつたのだが、寝始めは良かったのだが、あんな夢を見るなんて、やはり何処かで不安だつたのだろう。

緑谷出久が原作と変わらないことを祈ろう。

「用意出来たか?忘れもんじゃないか?」

うっす!

「じゃあ、乗れ。」

峰田父上と一緒に車に乗ろうとすると

「あ、実ちゃん。」

峰田母上と呼ばれたので振り返ると、母上が自分の手を包むように手を握ってきた。

「頑張つてね。」

は・・・い。頑張ります。

なんか恥ずかしく、そして心が温まった。

きつと不安なのだろう。でも受かると信じてるのだろう。

そんな、思いに必ず答えてみせる。例えば倍率300倍だろうが絶対に受かつて見せる。そう思いを込めて言う。

「行つてきます。」

17話

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。
やって来ました！超名門『雄英高等学校』。

入口にも、しっかりと立て看板に『雄英高等学校 入学試験会場』
と書いてある。間違いなく原作にあった雄英である。

何とも感慨深い。これまで本当に

「おい、早く受付済ませて受験場に行けよ。」

・・・もうちよつと浸らせてくれよ。峰田父上。まあ、いつか。行つてきますのでーす。

「おう、頑張れよ。」

視線を自分に会わせず、一切気合いが入らない声で見送る峰田父上の姿に、いつも通り過ぎて、不覚にも何処かで安心してる自分がいた。たぶん自分でも分からないところで緊張していたのだろう。少しだけ父上の存在に感謝をしよう・・・と思ったのだが

「ふむ、最近の学生は発育良いなあ。おお！あれなんてもう・・・」
という声さえ届いて来なければね。

本当にいつも通り過ぎて何も言えない・・・が自分は携帯を取り出し、峰田父上の写メを撮って『ある所』にメールを送っておいた。

言えないだけで、行動は起こせます。これできつと後でご褒美が貰えるだろう・・・峰田父上がね!!やったね父上!!帰るのが楽しみだね!!

さて、まずは午前中のペーパーテストを頑張りますかね!!

もう無理イイ。超疲れた。

ペーパーテスト、正直舐めてた。流石に偏差値75!って感じですね。マークシートのテストだったから、解らん問題は鉛筆コロコロでしたわ!

「どうだった?」

あ、矢吹。

「流石に雄英って感じだったね。難しかったよ。」

だ。途中から鉛筆コロコロしてた。

「そっか。でも峰田君ならきつと受かってるよ。」

お前のその変な信頼は何処から来てんだよ。

などと談笑しながら次の試験の説明会に向かう。

さて、現在はホール型のデカイ部屋にいます。ここではこれから始まる実技試験の説明が行われる。

そして、その説明をするのは当然この人！

「今日は俺のライブによるこそー!!エヴィバディセイハイ!!」

ボイスヒーロー『プレゼント・マイク』である。ちなみに毎週放送されている彼のラジオは勉強する時に聞いております。最高に面白いですよ。自分なげにファンです。お会い出来て光栄です！

「こいつあシヴィー!!受験生のリスナー!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!アユーレディ!?YEAHHHH!!」

「イエー!!」

「み、峰田君?!落ち着いて。」

はっ!ついノツてしまった。すまん矢吹。

矢吹に謝り、周りを見ると何てことでしょう皆さんに見られてます。お恥ずかしい。

「ハーツハツ!受験番号3710君!俺はノリのイイ奴は好きだぜ!ありがとうな!じゃあ、説明すつぜ!入試要項通り!リスナーには:」

その後のプレゼント・マイクの説明は漫画通りの説明だった。

簡単に実技試験のルールを言うなら

①道具の持ち込みは自由

②1p(ポイント)、2p、3pの仮想ヴィランがいるので、それを倒してポイントを稼げ!

③0p(ポイント)の仮想ヴィランもいるが所謂『ギミック』の扱である。気にせずポイントのある仮想ヴィランを倒すのが良いだろう。

④他人への攻撃禁止。ヒーローがする行為ではないからね。

とのこと。うーん、本当に漫画で読んだ通りで助かります。ちゃんと、同じ中学同士が協力出来ないように別会場になるくらいかな。その説明のおかげで、矢吹がなあ

「み、峰田君と初の共同作業が出来ないっ・・・て」

と、シヨックを受けている。同じ中学同士で協力させないように会場を別にするのは当然でしょうに。全く何でシヨックを受けてるのか、わけがわからないよ。

「最後に我が『校訓』をプレゼントしよう。更に向こうへ!!『Plus Ultra』!!それでは皆、良い受難を!!」
と言ってプレゼント・マイクは締めた。

せつかくカツコ良く締めたのにも関わらず隣の矢吹が未だにブツブツと何か言っている。

「おーい、矢吹ー。行くぞー。」

「峰田君と・・・峰田君と・・・」

「・・・しかたねえなあ。おい、矢吹!

「え?ぶっへえ!!」

「とりあえず叩いておいた。」

「な、なんで?」

「気合い注入だ。目が覚めたか。」

「気合い・・・注・・・入・・・注入だなんてそんな」

「今一瞬、尻が・・・気のせいだよな。うん、気のせいだな。」

「ありがとう峰田君。少しふらつくけど、目が覚めたよ。」

「そうか、良かったよ。ところで矢吹、前から気になってたが、お前って戦いなんて出来るのか?」

正直、初の友人がロボ相手に戦って病院行きなんてことになって欲しくはない。体育などで動きが良いのは知ってはいるが。

「道具さえあれば、そこそこね。今回の試験は持ち込み自由だからね。持ってきたんだ。」

矢吹は背中に背負っていたバッグを降ろして中を見せてくれた・・・

が、よく分からないものがいくつも入っていた。

「これは人間台のロボットなら壊せるレーザー銃。あとそのマガジン。あとは罠用に地雷。あ、でも電子機器類が壊れる地雷でね、もちろん人体には影響の無い特殊使用だよ。こっちのケースには峰田君のお宝写し……じゃない。間違えた。元気を出すための携帯物だよ。」
「そうか。準備万端だな。俺は携帯食料だけって、あれ？今なんて？」
「ん？何が？」

「……まあ、なんてキラキラした目でしょう。純真無垢ですね。こんな表情をする奴が峰田の何かを持つてるはずがないよね。」

「と思い込み、感情を沈めました。これ以上何かを聞いたら地雷を踏む気がしてならないからです。地雷を持つてるだけにね！」

「そんな物を見せてもらいながら歩いてたら、もう実技試験会場に行く前の別れる道の前まで来ていた。」

「そこで自分は矢吹に拳を出す。だが矢吹は拳を出さない。」

「えっと、何？」

「わけが分からないそうです。出した拳が寂しい限りです。」

「普通こうしたら拳を合わせんだよ。『お互い健闘しようぜ。』のためだよ。」

「ああ、なるほど。うん、頑張ろうね。」

「やっと矢吹も拳を出して、拳同士を合わせた。」

「さて、行きますか。」

「あつ、そうだ峰田君！」

「なんぞ？」

「試験が終わって数日は暇になるでしょ？その間に二人つきりで卒業旅行に行かない？」

「何故恥ずかしそうに赤い顔をしながら旅行に誘うのか……旅行か。楽しそうではあるが……自分は、こう答えた後で全力疾走で試験会場に向かった。」

「二人つきりは絶対に断る!!」

18話

集中するために精神統一する者。

不敵に笑顔を浮かべたまま待つ者。

周りを観察して何かを探ってる者。

ワイワイ、ガヤガヤと受験生同士で話す者。

この実技試験の会場となる模擬市街地演習場の入口に来てから既に15分、気が少し抜けるのも分かかります。

どうも、すみません。峰田実になった青年Aです。

気が少し抜けるのも分かかりますと言いましたが自分自身、既にかなり抜けてます。だって現在自分、模擬市街地演習のビルの中にいます。

フライングじゃないかって？違うんです。聞いてください。一応、演習場の入口付近で待機とは行ってましたが演習場に入っちゃダメとは言われてません。それに本当にダメなら入った時点で監視してる雄英側から注意があるはずですよ。

それにですね、緊急事態だったので。何故ならば

と、トイレは何処だ。

膀胱がね、少しヤバイ。

というわけで演習場のビルならばトイレがあるのではないかと、膀胱を刺激しないように慎重に歩きながら探してるのです。一応、戦闘準備は終わらせていたせいですかね。油断しました。

とか思ってるうちに、昔のビルにはありがちの乳白色のような緑ともとれるような微妙な色のドアを発見。昔のビルのトイレのドアって大抵はコレなんだよね。

見つけたことに嬉しくなり、しかし膀胱を刺激しないようにゆっくり移動してドアを開ける。すると

『ハイ、スタートー』

と、プレゼント・マイクのアナウンスが聞こえた。

え？今ですか？

と、呆けながら自分が開けたドアの中を確認する。部屋の中はトイ

レの風景とは程遠く、壁際に豪華な本棚、部屋の中央には虎柄のマット。奥には大きい机、壁には『仁義』と書かれた掛け軸が・・・どう見てもトイレではありません。更には部屋の中で人型のロボットが約10体ほどおり、皆さんドス（小刀）を持っております。

そんなロボット達が目を赤く点滅させながら

「ダレヤワレ！」

「カチコミカ！」

「ドコノクミノモンヤー！」

「コロスコロス！」

「イテモウタレー!!」

と、おっしやっております。

・・・うそん。

自分は、即刻ドアを閉めて、その場から緊急離脱します。その緊急離脱先とは

「ドコダ」

「ハイイナ、アノチビ、モウイナイ」

「イナイワケナイ、チビヲサガセ」

「サガセ」「サガセ」「チビヲサガセ」

どんな部屋からロボット達が出てきます。そんなロボット達を自分は、めっちゃ間近で見っております。一体どこだった？

それはですね、天井でございませぬ。現在、もぎった玉を足に着けて蝙蝠状態です。

何故こんなに効果的に効くのか、と申しますと自分の背の低さによるものかと思えますね。だって自分、背が低いのですよ。そうなるのと、背が低い自分を探すには目線が下に行きます。すると天井には目線が来ないわけで。先程からロボット達にチビヲ、チビヲと言われて傷ついていますよ。・・・もつと背が高くなりましたかった。

さてと、そろそろ怒りを込めてやりますか！

自分は頭に手を添えて、やってやります。

「グレープラッシュュ!!!」

「うーん、僕ってやっぱり不運だなあ。」

「きゃー!!」

「またか。」

「またも女生徒が何処からだろうか、自分へと降ってくる。それを受け止めて」

「大丈夫かい?」

「・・・は、はい」

「じゃあ、僕は行くね。」

「はい。あ、あのお名前を」

「矢吹スギルです。では。」

「・・・スギル様」

「このやりとり、もう何回目だろうか。既に十回を越えている気がする。」

流石にここ一年、鍛えに鍛えた。そしてこの戦場となってる所で、自分の個性を考えれば女生徒が降ってくるのは当たり前。なので、気をつけておけば、かなりの率で受け止めきれ程にはなれた。

そして出てくる仮想ヴィランも

ドゴーン!!

ビルの壁や隙間から出てくる、少し動きの早い雑魚ばかり。

「コロス、コロス」

「たぶん1pなんだよね。はあ。」

仮想ヴィランの動きに合わせて、右へ左へと動き、テザー銃の照準をつけて撃つ。

「ギャー!!」

と、叫びながら煙を上げる仮想ヴィラン。

「これも何回もしてきて、既に作業とかしている。」

「そろそろ飽きて来たなあ。はあ、峰田君に会いたいなあ。二人っきりの旅行は断られたけど、旅行自体は断られなかったよね。姉さん達と・・・皆で一緒に旅行ならオーケーってことだよな。」

鞆を開け、とあるケースを開けると峰田君の笑顔を浮かべた写真が

入っている。何でもない写真に見えるが、実はレアものである。峰田君は普段あまり笑わない。ニヤけることはあっても、心から笑ってるようなことは数える程しかないのだ。コレは、その数える程しかない笑顔の写真である。

「・・・うん。もう少し頑張ろう。峰田君と同じ高校に行くためだもんね。」

少し昔のことを思い出そう、としたところに

「きゃー!!」

「またかく。よつと。」

「またも女生徒が降ってきた。神様は、どうやら思い出を振り返えさせてくれないらしい。」

「無粋だよね。」

「え？」

「いや、何でもないよ。」

えつと、確か峰田君の憧れてるオールマイトは『ヒーローは常に笑顔を絶やさない。』って言ってたっけ？

矢吹は直ぐに笑顔を作って

「大丈夫かい？」

「・・・は、はい」

こうやって今日も矢吹に恋い焦がれる女性被害者は増えていく。

とある試験監視ルーム

「た、大変です！」

「なんだ。」

「か、開始1分で30pを越える受験者が出ました！」

「二・・・はぁー!!?!」

一同は試験が始まったばかりで、あまり画面を注視することがなかったのだ

「な、どうやって・・・」

「こちらを御覧ください。」

モニターに映しだされたのは、頭に紫色の玉をつけた小さな男の子。ビルの中を何か探るように慎重に歩いている。

「コレは？」

「試験開始の合図まで、あと1分のところですよ。」

「何故、試験が始まる前にビルの中へ？」

「理由は分かりませんが慎重に歩いているところを見ると敵情視察かと思われれます。」

「確かにそんな素振りだね。」

「これは、アリなのかい？」

「アリだな。」

無精髭を生やして半眼にしながら画面を見つめる男が言った。

「あ、相澤先生。」

本名、相澤消太。抹消ヒーロー『イレイザーヘッド』その人である。

「そもそもマイクが言っていただろう。実戦にカウントなんて無いんだ。だいたい、現場を想定しているなら、スタートなんて言葉を使う事が既におかしい。」

小さな男の子は、何かに気がついてドアを開け、自分の姿をわざと晒すように動き、仮想ヴィランに見られた後、直ぐにドアを閉め、天井にかけ上った。そして仮想ヴィランの全てが外に出たと確認すると、上から大量の粘着力のある玉を投げつけ一網打尽とした。実に鮮やかな手口である。

「あの子、中々のやり手ですね。」

「しかし、本当に良いのだろうか？」

「・・・巻き戻してマイクを見ろ。」

相澤先生に指示された通り、映像を巻き戻してプレゼント・マイクを見てみると

「・・・めちやくちやニヤけて、彼がビルに入っていく所を見てますね。」
「そういうわけだ。これは責任者であるマイクがアリだと認めてる証拠だ。」

この雄英では先生であるヒーローの裁量が重視されることが多い。つまり、彼が認めていれば全てアリなのだ。

「なら、しょうがないか。」

「そつちも良いけど、私はコツチを見て欲しいわ。」

今度は何だと見てみると、特別審査制『救助活動p（レスキューポイント）』を細々と稼ぎ、更にテザー銃を片手に仮想ヴィランを次々と倒していく男の子が映っている。

「これは一体？何故、こんなにも細々としたレスキューpが？」

「それはコレを見てよ。」

そこに映ったのは、何かに男の子が気がつき、一歩後退り腕を上げるとそこに女の子が降ってきたのだ。

「おお、見事なキャッチ。」

ここで災害救助で活躍しているスペースヒーロー『13号』が補足を入れて

「そうですね。結構派手に飛んできたのに完全に勢いを殺してキャッチしてます。どちらも怪我をしません。それに最後は笑顔で相手を気遣ってます。素晴らしいですね。」

その後の女の子の表情は完全にアレなのだが誰もツツコミは入れなかった。

「俺は銃の腕を評価する。」

「スナイプ先生。」

「銃ってのは基本的に動きながら狙った所に当てるってのは困難を極めるものだ。それをテザー銃で射程が短いとは言え、彼はしっかりと仮想ヴィランの装甲が薄い部分に当てている。これは観察する目と、かなりの腕を持ち得なければ出来ないこと。」

「なるほど。つまりこの歳では中々いないということですか。」

首を縦に振り、肯定するスナイプ。誰もが彼の声に納得した。

「やーやー、今期はとっても良い子達が集まったね。」

突然の声に振り返ると、顔に傷のある大きなネズミが服を着て紅茶を飲みながら歩いて部屋に入ってきた。さて、偉そうに入ってきたのだが、実際に偉い人（ネズミ）である。彼こそ、この学園の

「こ、校長先生。」

校長である。

「いや、本当に素晴らしい子達だね。しかし、心はどうだろうか？大きな壁が現れてこそ、ヒーローとしての資質が表に出るからね。」

ヒーローの資質を表に出る。これを聞いて講師陣は皆、ニヤリと笑う。

「それじゃあ、そろそろいってみようか。これからが本番さ！」

ネズミの校長は紅茶を机において、部屋の仮想ヴィラン操作パネルのボタンを押した。

試験を監視するカメラがブレる。それは大きな何かが動いている証拠。そしてカメラにはその大きな0p仮想ヴィランが地下から現れ、ビルを押し退け、歩き始める所が映し出された。

「さあ、どうする？ヒーローを目指す子供達？」

19話

「なんでやねん。」

何が起こったか説明しよう。

トイレを探していたビルで、ヤの字が似合うロボを駆逐して外に出たら、受験生の皆さんがロボ相手に四苦八苦しながら頑張ってた。とりあえず参戦する。

少し戦ったが、思い出したように尿意炸裂。

すぐに近くのビルに入ってトイレを探し、見つけるも、何とここはビルの四階部分。

トイレを済ませ、手を洗いながら「早く下に行かなきゃなあ。だいぶ時間ロスになってしまった。」と思っていたら突然デカイ地震発生。洗面台にしがみつき、体勢を安定させると何とトイレの奥の壁が崩壊。何が起きたと思ったらロボットのデカイ顔と目が合いました。

以上です。

・・・本当に・・・もう

「なんでやねん。」

逃げたいけど、この距離じゃ逃げれんだろうなあ。泣きそうです。

別会場

「スギル様！早く逃げましょう！」

「そうです！あれが恐らくO pのギミックと言われていたものですよ！」

「たぶん、そうですよ！スギル様、危険ですよ！一旦逃げて、それから他の仮想ヴィランを倒しましょう！」

と、口々に僕に言うのは僕が受けとめた女の子達十数人の中の三人である。特に一緒に行動する意味はないのだが、何故か行動することに・・・本当に何でだろうか？

仮想ヴィランも協力して倒しているのだが、これってポイントの振り分け、どうなるのかな？

とか、内心思っていました。

さて、彼女達の行動は、とても正しい判断だ。敵わないヴィラン。そんなのが出たら逃げて体勢を整えてから再度挑む。人として当たり前のことだろう。それに今は試験中であり、学生の身としては0pのギミック扱いのものより、1〜3pのポイントのある仮想ヴィランを倒しに行くのは当然だろう。

・・・だけど、僕は思い出す。峰田君の熱く語っていたヒーローがヒーローたる考えを。

『プロは、いつだって命懸け』

「「え?」」

「僕の一番の友達がね、言ってたんだ。『ヒーローってのは敵わないと分かっているけど、自分が危ないかもって思っても、それでも人を助ける』って。・・・試験とは関係ないギミック。0p。でも、敵わないから逃げて他の点数のある仮想ヴィランを狙うって、どうだろう?と僕は思うんだ。」

呆然としながら僕を見る三人に続ける。

「どうだろうって、考えて・・・結果、そんなのはヒーローじゃないって僕は思う。」

「「・・・!!!」」

「三人共、今までありがとね。じゃあ、僕は行くから。」

ギミックがビルを押し退けながら歩いて来るのが見える。

さて、時間もないし早く行かなきゃ。

走り出そうとした時、予想外なことを女の子達が言い出した。

「スギル様! 私も行きます!」

思わず振り返り、女の子達を見た。

「えっ?」

「私も行きます!」

「私だって、行きます!それに・・・」

「「私達だってヒーローを目指してるんです!!!」」

少しビククリしながら女の子達の顔を見ると、先程までとは少し顔つきが違うようで、目には何かの決意が感じられた。

「そっか。」

ギミックの方を見ると少しずつ、こちらに来るのが見える。結構な大ききさだ。

何だっけ、この感じ?・・・ああ、思い出した。峰田君と大きなモンスターを狩るゲームをやったときの映像みたいだ。あちらはゲームで、こちらは現実なのだが。峰田君がこのゲームに誘ってくれる時って、確かいつもこう言っていたよね。

「じゃあ三人共、『一狩り行こうぜ!!』」

「はい! (スギル様、カツコいい!)」

「行きます! (ワイルドな感じも良いですね。)」

「頑張ります! (その感じで罵られたいかも。)」

こちらに逃げてくる受験生を避けながら、四人はギミックに走り出した。

とある試験監視ルーム

「くけけ・・・どうなってんだろうな・・・」

ゴツゴツとしたマスクから目を光らせながら画面を見つめる男が言った。

「パ、パワーローダー先生?」

「あの男の持ってた地雷。人体に影響なく機械にだけ効く強力な電磁波を発揮しやがった。・・・どういことだ?ここまで強力なら人体に影響はあるはずだろう?・・・ナニかの個性で作ったものか・・・」
ブツブツと一人で喋っている。

正直怖いので皆触れないように別の話題に移った。

「それにしてもアレですね。まさか受験生同士で協力して倒すと思いませんでしたね。」

「そうですね。中々のコンビネーションでした。ちゃんと攻撃、防御、支援、指揮と分割して行動してましたね。」

「ええ、とても良かったですよ!あの子達は受験前に何処かで出会っ

てたのでしょうか？」

「どうでしょうね。中学は確実に別なのですが、何処かで会っていても不思議ではない程の連携でした。」

「いやいや、本当に素晴らしかったよ。彼らの今後に期待大さー！さて、他の会場はどうなってるかな？」

「皆！こっちを見てくれ！かなり熱いぜ！」

『ツツスマーシユツツ!!』

そこには逃げ遅れた女の子のために、足の骨を折り、腕の骨を折りながらOpのギミックを一撃で倒す男の子が映し出されていた。

「イエツツツツー!!!」

「おお、素晴らしい。」

「この子、良い個性を持つてるのに何故こんなにも目立ってないんだい？」

「ふむ・・・どうやら緊張してか、本来の力が出ていないらしい。しかし、これは本当に素晴らしい個性だ。これならメンタルさえ良くなれば良いヒーローになるな。」

試験官である先生達は一つのモニターに夢中になっていたが、一人だけ違うモニターを見て唸る男がいた。

「ほう。やるじゃないか。」

「どした、イレイザーヘッド？さっきの見ねえの？」

「ふん。俺は興味ないな。それよりこちらだ。」

そこには小さな男の子がギミックの前から走り去っていく映像が映っていた。

「・・・どゆこと？」

「少し巻き戻すから見ておけ。」

「ああ・・・。。。おお？マジか？」

「マジだ。」

そこに出たのは小さな男の子が、あまりにも地味にギミックの動きを完全に停止させた姿だった。

「し、しんどかった!」

やることは簡単だったけど、かなりしんどかった!

『目があったら戦いの合図!』

え? 顔も合わせず素通りで歩いてたはずなのに理不尽すぎる!

そう思ったのは、もう何年前のことだろうか。某有名なゲームのセリフなのだが。

今、目の前の大きなロボットの顔がそんなセリフを自分言っている気がしてならない。

ほら、もう今もね、ゴゴゴゴゴって言ってるもの。もう漫画みたいに彼(ロボット)の後ろで音が見えるみたいに感じるもの。ゴゴゴゴゴって。

と思ってる間にロボットは動きだし、完全にこちらを向いて右腕を引き絞るように引き、構えた。

今から何が起こるかよく分かる行動である。

・・・うわあ、これは酷い。

ロボットは、拳を握り前に繰り出す。正拳突きである。しかも完全にこちらに向けて。

ふざけんなや! グレープラッツうわ!

迫り来る拳にグレープラッシュを浴びせながら左前に避けたのだが、急な落下する感覚に襲われる。

忘れてた。ここは4階。しかも部屋はかなり崩れていたことを。

落ちて行く身体を何とかしようとしても、どうにもならず自分の身体は見事に地べたに激突した・・・が直ぐに跳ね上がった。そしてグルグルと回りながら綺麗に着地を決めた。

・・・あ、危なかったー!!

説明しよう。実技試験開始10分前に遡る。

・・・まあ、単純に【開発少女part14】でやっていた発目明

の真似をして、服の中にモギツた玉をペタペタと貼っておいたのだ。
戦闘準備というか、備えつて本当に大事ですね。

「に、逃げろー!!」

「みんな！早く逃げるんだ！」

「あ、あんなの敵うわけないじゃない！」

と遠くから聞こえて来る。

うん。自分もそう思います。ので逃げ・・・

ギギギガガガが

異音を出しながら、ビルから色々な破片を着けた拳を抜いた彼（ギミック）がですね、何故か見てくるのです。

『魔王からはニゲラレナイ』

とでも言ってます。

・・・正直、ゲームや漫画でこういうのを倒すやり方って、何個かあって二番煎じで嫌なのですが

「相手しても良いけど・・・修繕費は払わんよ。」

こうして、攻撃力0の自分とポイント0のギミックとの戦いが始まった。

とある試験監視ルーム

「ねえ、相澤くん。私にも見せてくれないかしら？さっきの坊やの映像。」

「ミッドナイト。ええ、いいですよ。」

「ありがと。・・・ふふつ、彼、良いわよね。」

巻き戻った映像を見ながら、ミッドナイトは顔を赤くしている。どうやら小さな男の子が半泣きになりながら、ギミックの拳を避けている姿が気に入ったようだ。

・・・なんでこの女は教師をしてるんだ？

と、思っても口にはしないイレイザーヘッド。

「ねえ、ここからどうやって倒すのかしら？」

「見てれば分かりますよ。」

「あら、そつけないわね。」

「……奴の動きをよく見て下さい。」

「動き? …ギミックと一定の距離を保ちながら拳を避けている?」
「それだけじゃありません。奴はそこらに落ちている瓦礫の影に隠れながら動いています。」

「それはそうでしょ。少しでも身を隠しながら移動するわよ。ただこのサイズにそんなことしたって無意味じゃない。ほら、ギミックが瓦礫ごと殴ってるわよ。」

かなり大きな音を出しながら瓦礫ごと押し潰さんとギミックが小さな男の子を狙っている。そして飛び散る瓦礫。無惨にも粉々になっっている。

「……粉々になつたにしては瓦礫の量が少なくないですか?」

「え? …あら本当ね。」

「いったい何が、と言う前にギミックがおかしなことになっていることに気がついた。」

「ギミックの拳が大きくなってるわね。あれは砕けた瓦礫?」

「ええ、奴の個性は頭の玉が粘着材の役割を果たしますからね。ギミックの拳を見ると紫色の玉が無数に見られます。隠れたときに瓦礫に着けているんでしよう。更に、この後が見物ですよ。」

「そうなの?」

映像を見ていると先程まで半泣きになっていた男の子が瓦礫にも隠れず、平然な顔をしてギミックの前に現れた。

それをギミックは殴らんと拳を振り上げ、打ち下ろした。

「なにを……危なっ!」

しかし、打ち下ろした拳は小さな男の子の横に逸れ、そのまま動かない。そしてギミックからは煙が吹き上げた。

「な、なんなの?」

「当然と言えば当然でしょう。今回のギミックは受験生用になっており、図体はデカいが耐久性はないですから。瓦礫のような設計外のモノを着けて殴ってれば重さでイカれるでしょうね。」

ミッドナイトは、なるほど、という顔をしながら少し笑みを浮かべる。

「半泣きになってたのも全ては演技だったのね。少しでも自分が弱つてると思わせるための。楽しみだわ。この子が入学してきたら・・・」

ゆつくりとその場を去るミッドナイト。

ミッドナイトが去る際に「いっぱい虐めて、本当に泣かせてあげたいわ。」と聞こえたが聞こえないことにした。

そして壁には実技試験の結果が出ている。

10位 峰田実

VILLAN (ヴィラン) 38P

RESCUE (レスキュー) 18P

10位 矢吹スギル

VILLAN (ヴィラン) 19P

RESCUE (レスキュー) 37P

「本当に楽しみですよ。」

20話

ある部屋から眩きが聞こえてきた。

．．．受かる．．．受からない．．．受かる．．．受からない．．．
受かる．．．受からない．．．．．．．．．．．．．．．．

それは小さな男の子が花の花弁を一枚、また一枚と取りながら眩いていた。実に古風な花占いである。

そんな花占いをする男の子を部屋のドアの隙間から二人の男女が見ていた。

「あら、今時珍しいわね。花占いをしているわよ。」

「駄目な息子だなあ。メンタル弱すぎ。」

と、このような会話をしておりました。つまりは花占いをしている小さな男の子とは峰田実である。

どうも、お久しぶりです。峰田実になった青年Aです。何をしているかって?．．．占い?かな。自分にも分かりません。ただまあ．．．落ち着く。

．．．なにかをね、何かしらをね．．．してないと落ち着かないのですよ。だってね．．．来ないのでしょ．．．ナニがって?．．．それはね．．．

「受験結果が来ないんだよーーー!!!」

「うわ!急に叫ぶなや!」

あれ?いつの間に自分の部屋に人が入って来ていたのでしょいか。全然気がつかなかった。

あ、峰田父上おはようございます。

「そして叫んでからの変な落ち着きようが逆に怖いわ。サイコさんか

よ。」

失礼な。サイコパスでも何でもないわ。ただ情緒がアレで、ちよつとどころか、かなり不安定な状態なだけだわ。

「もう色々と酷いな。まあ、気にするなよ。落ちた結果が来ないからって。」

ぬわああまだ落ちたと決まってるいいいいい……

「まあ、たぶん落ちたって。来るの遅せえし。もう身悶えすんなよ。動きが気持ち悪いわ。」

……くつそー。他人事だからって。

「他人事ってお前。一応俺も親だからな。ちゃんとお前のことを考えてやってるぜ。」

……え？まさか自分を心ば

「ざまーってな！」

あらやだ。なんていい笑顔なんでしょう。とりあえず

シねやー！！！！

激情に流され、峰田父上の顔に飛び込むように渾身のパンチを繰り出すも、アツサリと避けられ、足を掴まれ、そのままベッドへ放り込まれた。

「いやあ、お前ってさあ、今まで優秀で特に人生的に転ぶことも挫折っぽいこともなかったからな。いい勉強だと思って受け入れろって。」

……うるせーよ。諦められつかよ……

「あん？」

ヒーローに……なりてえんだよ。

「……馬鹿だな。お前。こんなケガとかしちまうかもしれないぞ。」

ため息混じりに峰田父上は言った。

そんな峰田父上は現在『休日のお父さんスタイル』によくある半袖短パンなのだが……数年前の仕事で腕をケガした傷跡が生々しく残っているのが見てとれる。

自分も馬鹿だとは思う。……思うのだが

そんな傷をおっても続けたい仕事なんだろ。ヒーローって。憧れ

ないわけないじゃんか……

「はんつーあくまで俺はサイドキックだつっうの……馬鹿すぎ。……ちよつと待ってろよ。」

峰田父上が部屋から出て行き、すぐに帰ってきた。荷物を両手に抱えて。それを部屋にぶちまけた。

その荷物は大きめの封筒がいくつもあり全てが

「これ全部がヒーロー科のある高校だ。今からでも受験は間に合う。」

そう、全てが高校の入試案内と書いていた。

峰田父上はドスツと座り込み、封筒を開けていく。

「ぼさつとしてんじゃねえよ。ほれ、全部開けてくぞ。俺にだけやらせんな。」

呆然としてしまった。

あの……どういう……

「どういうも何もないだろうが。一手目に失敗した時のために二手、三手目を考えとくのが当たり前だろうが。変に自信があるお前のことだ。失敗するなんて考えなかったろ。」

……

「凶星かよ。ほれ、何でもいいから手を動かせ。」

正確には凶星ではないのだが、今考えれば油断をしていたところはあったかも知れない。なんだかんだで受かる気がしていた。何故なら原作を知っているから。漫画を知っているから。

……そうだよな。今は漫画じゃないよな。今は現じ……パカン！

という小気味良い音と共に、頭に軽い衝撃が走った。

「ほれ、さっさと開けろ。」

……もう少しこう、色々物思いに耽らせてもらいたいものである。

渡された封筒に目をやると、そこには土傑高校と書いていた。

「確かこの土傑高校ってのは雄英に落ちた奴が結構入るんだけどよ、

卒業したやつらって優秀なガキが多いんだ。まあ、今のところは一押しだな。」

・・・ここはもう自分にとっては漫画の世界ではなく現実なのだ。まだ決まってはいいないが、雄英に行けなかつならしようがない。雄英に行けなくてもヒーローになりさえすれば、それでいい。

自分の存在が無くても雄英のやつらなら、ナンだカンだで困難を乗り越るだろう。むしろ自分が居ない方が上手くいく可能性の方が高い気がする。

というわけで、

峰田父上！

「ん？なんだ。」

自分、これから頑張ります！

「おう。頑張れよ。」

なんか久しぶり親子らしい会話をした気がする。それが何か嬉しく思え、やる気が出てきた。

「よっしゃ、どんどん切って中身を見ていくぞ。」

はい！

自分は目の前の封筒を手に取り、封筒の上部を切って中身を出していく。それを繰り返し、次々と開けては並べる。

「うむうむ。少しは元気になったみたいだな。さあ俺も次をやる・・・か・・・」

峰田父上は、何か言ったあとで封筒を手に取り固まった。

ん？峰田父上どうした？

「あつ、いや、なん・・・でも・・・ない・・・かな。うん。・・・あく・・・あつ、今日寿司でも取らねえか？」

え？ああ、いいねえ寿司。寿司食べたい。

「んじや、ちよつと電話をね、してくるわ。」

ああ、了解。自分は封筒開けとくよ。

「オ、オウ。ガンバッテクダサイ。」

??何故敬語??

不信に思いながらも部屋から出ていく峰田父上を見送り、自分は次々と封筒を開けていると、部屋の外からドタバタと音がして、それから……

「ほぎゃー……!!ちよつ、今回はワザとじゃないの!!ワザとじゃないの!!違うの!!あつ、そんなんされたら昇天!昇天しちゃうって!!今回は!今回ばかりはね!ちゃんと親父っぽいこと頑張ろうとしたんですうううう!!あつ、気持ちいいれす!!サイコー……デス!!!!おっふううう」

という悲鳴?が聞こえてきた。

えっ?!なに?何事?!

と戸惑っていると、程なくして部屋にノックをされ、返事をする……ゆつくりとドアが開けられ、峰田母上が入ってきた。

血だらけで。

ただ峰田母上にケガらしいものは一切なく返り血であることが伺える。

あ、あの、いったいなにがあ……

「実ちゃん。」

あ、はい。

「これ届いたわよ。ごめんね。少しトラブルがあって破けちゃった部分はあるけど、中身は無事だからね。」

あつ、ハイ……って、これっ!!

「そう、雄英の受験結果みたい。一緒にみる?」

えっと、あの……一人で見たいです。

「そうよね。わかったわ。じゃあ後でね。」

はい。

ガチャリとドアが締まり、部屋の外ではズルズルと何かを引きずる音が遠くなっていた。

いったい何が起きたん。

・・・あー、まいつか。いつもの事だしね。うん。さて、早く開けて結果を見てみよう。

え？何で親と見ないのかって？

いや！見ないでしょ！特に今の峰田母上とは。封筒をくれた時はいつもの良い笑顔でしたよ。でもね、血が服とか顔に飛び散ってるのよ。怖いよ！ガツタガツタ震えるよ！

と一人で思いながらも元々破けていた封筒を破くと機械がポロリと落ち、カチツという音を出して

3D映像が再生された。

『ええ、もう私の出番は終わりかい！しょうがないなあ。では最後に”PlusULTRA”!!』

おお！オールマイトだ!!って終わりかい！

『はい、じゃあ次、相澤先生お願いします。』

おお・・・え？相澤先生が結果言うの？

少しすると、漫画ではA組の担任である相澤先生が首にマフラーとゴーグルを着けてカメラの前に現れた。いつもの仏頂面で。

『・・・』

『もつと笑顔でお願いします。』

カメラマンの指示に嫌そうな顔を浮かべ、何か思い付いたのか目を少し開くと、マフラーを口元まで上げ、ゴーグルを目にあてた。

『・・・これでもいいだろう。』

『・・・大丈夫です。撮りましょう。』

相澤先生、クールやで。

『はい、カメラ回します。3、2、1、お願いします。』

『あく受験番号3710、峰田実。合格。必要なことは封筒に入ってる要項に書いてある。以上。』

……え？合格？合格っていったよね！

『……あの相澤先生、そっけ無きすぎです。もう少しコメントを』

『……雄英に来たら鍛えてやる。』

『……ツンデレ？……あ、ちよつ何で、にじりよって来るんですか？まだカメラ回ってますよ。ちよつ、や』

ザアーーーーー

映像が途切れた。

えつと、一瞬自分もツンデレ？って思っでごめんなさい。でも、あれだ……

身体が震える。

受かった。合格……

「よっしゃーーーーー!!!」

封筒を確認すると、要項と一緒に合格通知が入っていた。それを持って自分は部屋を出てリビングに向かった。

21話

『試練』とは、信仰や決心の強さ、または実力などを厳しくためすことである。その他の意味では、その時に受ける苦難。と辞書に載っている。

そんな『試練』を今まさに受けてるわけで。

「良いぞー！もつと避けるー！」

男は笑みを浮かべながら炎の弾を手から撃ち出す。

「フハハハハ！なかなか動くではないか！」

そして、その炎を必死に避ける小さい男は峰田実。つまり現在の自分である。

どうも皆さん、マジで逝ってしまいそうです。峰田実になった青年Aです。

先日、雄英高校に受かりました。嬉しかったです。その夜は家族で寿司を食べました。とても美味でした。

そんな家族での食事中に、こんな会話がありました。

「さてまあ、受かったのは良かったが通学ってどうすんだ？雄英まで結構あるぞ。」

え？ああ、考えてなかった。

自分は現在、神奈川県にいる。と言っても神奈川県の間この方なので雄英までは距離があるのだ。近くの駅までも距離があるので自転車を飛ばして・・・最低でも雄英まで2時間はかかる。毎日は辛い。「やっぱ考えてなかったよな。」

申し訳ない。

「まあ、いいよ。じゃあ引越すか。」

え？

「お前だけな。」

え？

「え？」

峰田母上と声が被った。

「え？じやないよ。って、俺の愛しい妻まで初耳みたいに言わんでよ。前に言ってたじゃん。遠い高校だから一人暮らしさせようって。」

「冗談だと思ってたわ。」

「流石にこんなことで冗談は言わんだろ。金も一人暮らし分なら何とかなるし。」

えっと、つまり自分、一人暮らし決定っすか。マジでか。毎日の楽しみである母上の美味しいご飯が食べられないっすか。

そんな心が顔に出ていたのか峰田母上は

「反対です。まだこんな小さい子に一人暮らしなんてさせられません。」

断固反対のようである。

「なんとかしましょう。あなたなら出来るわ。」

「えくどうしたもんかなあ。・・・あくキツイけど一つだけあるかも。」

「あら、キツイの？」

「まあ、アイツんところに行くからなあ。面倒なんだよなあ。」

というわけで来たのが、ほぼ毎日練習場を使わせていただき、大変お世話になっているエンデヴァーさんの事務所である。

「というわけで、物件一つか、部屋をくれ。」

「何がというわけで、だ。馬鹿が。」

「えくいいじゃん別に。どうせ空いてるところあんだろ。」

・・・No. 2ヒーローに向かって、何て口の利き方なんでしょう。もう自分は頭が痛いです。いつもいつも峰田父上は何でこうなのでしょううか。

事務所内のサイドキックやらヒーローらしき人やらはコチラを気にしながら仕事をしている。

あ、気にしないでください。本当にアホな事を言ってる申し訳ありません。

「一人暮らし用がありや良いんだよ。どっか社員寮的な持ってた

じゃん。」

「あるにはある。だが貴様にやる義理はない。」

・・・あれ？一人暮らし？家族と住むんちゃうん？

「え〜お前んとこと契約してんだから社員扱いにしとけよ〜。」

「契約してるのも認める。だがな・・・」

二人が話をしていると

「エンデヴァーさん、お電話です。」

「少し待て。」

「すみません。急ぎの用だとかで・・・」

申し訳なきように言うサイドキックの人にエンデヴァーさんは「しようがない」と言いながら電話をとりに向かった。

なあ、父上。

「あん？」

なんか昨日と少し話が違くない？

「一人暮らしのことか？」

そうそれ。

「俺には俺の計画があんのよ。人生設計的な。だからお前には本当は一人暮らしをして貰いたい。愛する妻にはスマンがな。」

え〜マジか。・・・しかし何か気になる。この峰田父上が母上の言うことを利かないということがあるのだろうか？何か理由がある気が・・・

一人物思いに耽っていると、いつの間にかエンデヴァーさんが電話を終えて峰田父上と話をしていた。

「おい、チェイサー。」

「なんぞ？」

「貴様の息子は雄英に受かったらしいな。」

「え？おう、まあ受かったな。」

「俺の息子も受かった。」

「あ〜、そりやおめでとう。」

峰田父上が何が言いたいんだ？という顔を見せるとエンデヴァー

さんが口角を上げて、にやりと笑い言った。

「少し試させろ。」

はい？

「はい？」

そして冒頭の『試練』に話は戻るのだが・・・自分ヤバイ。逝ってしまう!!

「良いぞーもつと避けろ！」

ここは、いつもの練習場である。最初に言っていた『試練』ですが、一応ご褒美がありまして。ご褒美の内容は物件です。社員寮の一室を貸してくれるそうです。無料で。雄英からは徒歩10分。とても高条件である。しかも自分には好きな物を買ってくれるらしいです。

峰田父上も自分も今から受けるエンデヴァーさんの「試させろ」の内容も聞かずに了承の返事をしてしまいました。

ちなみに内容は

「俺の炎を5分間、避け続けろ」です。

皆さん、内容も聞かずに了承するのはヤメましょう！自分みたいなことになりますよ。・・・ダレカタスケテ・・・

もうヤバいの！何がヤバいってエンデヴァーさんの炎ったら時間が経つに連れて温度が増してるの！

一発目の炎はね、軌道を見て顔に向かって来るのが分かった。だから峰田父上と訓練する時みたいにギリギリで避ける形をとったの。そしたらね！熱がね！顔の横をね！通過したの！顔の産毛がチリチリと焼けました！「アツツツい!!」ってことになりました。

次からは、最低でも20cmは離れたところを避けるようにしたの。そしたらね、どんどん熱が上がってるのよ！今では20cm離れてても何か服が焦げ臭いの！泣きそう！っていうか泣いてます!!

「良いな！本当に良いな！チエイサー！貴様の息子は良い育ち方をしているぞー！」

エンデヴァーさん！テンション高いな！

「避け方だけは俺から見て盗めてたからな。まあ当然だな。」

おい父上！そろそろ止める！自分死にそうですけど！熱ヤバいつて！マジで！

「あははははは！息子の泣き顔とかマジワロタ！」
アイツ終わったらコロス!!!

てゆーか見学に来てるサイドキックとヒーロー共！「あの小さいの凄いな。」「ああ小さいのにな。」とか小さい小さい連呼すんな！地味に心にくる！

そんなことを思っていると、その中の一人が時間を告げた。

「あ、あと1分です！」

あと1分・・・長いツス！

「ちっ、もう時間か。ならばラストスパートだ！おい小僧。貴様の避けっぷりに敬意をもって答えよう。今から10%の力まで引き上げて相手をしてやる。」

・・・あの、ちなみに今までの力って、どれくらいでした？

「3%だ。」

「誰かタスケテくださいーい!!!」

自分の悲鳴に誰も助ける様子はなく、その後エンデヴァーさんから怒濤の炎の球が押し寄せて来ました。

誰か助けるや!!!

自分の記憶はココで途切れました。

気がついたら家のベッドで寝ていた。特に怪我もなく。

夢だったのか？

と思つてリビングに行くと、峰田父上が恍惚の表情を浮かべながら逆さ吊りになっており、胸には『僕は今日、息子を炎の中に投げ込みました。反省中』と貼り紙がしてあった。

夢ではなかったらしい。

とりあえず「ワロタ！」と言つて爆笑していた峰田父上を思い出したので、殴つとききました。

「あ、実ちゃん起きたのね。お疲れ様。ちゃんと大きいお部屋借りられたみたいで良かったわ。これで皆で住めるわね。明日から引っ越

しの準備しましょうね。」

「どうやら『試練』は上手くいったらしい。しかも部屋は大きいらしい。良かった。正直、最期は覚えていないのだが……まいつか。

明日から引越準備、頑張ります！

21. 5話 『試練』終了後 大人たちの会話

「貴様の息子は中々の動きをしていたな。」

「そうか？まだまだじゃね？終わった瞬間倒れたし。」

「ヒーローとしては不合格。だが、ヒーローの卵としては合格だ。」

俺らは今『試練』が終わった練習場で、倒れた息子を見ながら話をしている。

ちなみに息子は、多少の火傷はあるが酷いモノは無く、無事に『試練』は終わった。今は控えていたヒーロー達が治療にあたっている。「まさか本当に全て避けるとはな。しかも最後の動きはなんだ。見たことがないぞ。」

「あくあれな。まさか自分の頭の玉の弾力を生かして動くと思わなかったよ。」

息子は最後の炎のラッシュを避けている最中に転んだ。転んだと思ったら、床に頭を打ち付け、頭の玉の弾力を利用し、いつの間にか移動していた方向とは反対の方に移動していた。

分かりやすくいうと、右に走る、転んだ、床に頭突き、跳ねた、左に走ってた。

「避け方がギャグだよな。」

「言ってやるな。」

「ところでよ、何で急にこんなことになったんだ？いつもなら俺でやるだろう？この賭けは。」

そう、これはいつものことなのだ。俺は、何かしらをこいつに頼むと代わりに炎を浴びせてくる。それを避け続けられたら条件を呑んでもらう。それが一連のやり取りなのだ。

「賭けでは犯罪だろうが。賭けではない。『試練』だ。賭け事はヒーローとしては絶対にやらん。」

「だー！もういいよそれは！面倒な性格だな。何でこんなことしたんだ。」

「さっきの電話な、お前の妻からだ。」

「・・・え？」

『いつもすいません。うちの夫がまた何かお願いすると思います。たぶん家をくれとか言うと思います。』とな。」

「えくつと。うん。それで。」

「面倒だな。おい、録音を出せ。」

側に控えていた男がパソコンを出して、何やら打ち込むと俺の愛する妻の声が聞こえてきた。

『あ、そうそう。うちの息子が雄英に受かったんですよ。でも大丈夫かしら。ヒーローとしてやれるか心配なんです。どうですか？エンデヴァーさんから見て。『見てないから何と』あつ、冬美ちゃんから聞きましたよ。弟が雄英に受かりましたよくつて。おめでとうございます。『うむ。』』

・・・うん。理由は分かった。

「どう思う。ほぼ一方的に話をされたこの気持ち。俺の娘と多少のやり取りをしていたのは知っていた。だが何なのだ、あのフレンドリー感。俺はN.O. 2ヒーローだぞ。」

「・・・なんかスマン。」

「そういう訳で試したのだ。文句あるか。」

「ないです。本当スマンです。」

俺の妻がやらかしてた。妻サイコーに可愛いね。

俺はエンデヴァーに謝りながら思った。

「まあ、それ以外にも理由はあるがな。」

「そうなん？」

「ああ試して決めた。お前の息子を俺の息子の踏み台にさせてもらう。」

「おつと、穏やかじゃねえな。」

「安心しろ。あれほどの技術を持っているのだ。怪我などはしないだろう。」

「あつそ。なら良いや。」

「ほう。余裕そうだな。」

「うん？だって実際に10%のお前相手にあの程度で済んだんだぜ。なら暫くは大丈夫だろ。いろんな意味で。お前なんて今でも俺に当

てるの難しいそうだしな。」

「そうか。ならば遠慮なく使わせてもらおうぞ。」

エンデヴアーは顔の炎を揺らめかせながら笑った。

笑顔が怖いね。・・・うーん、あまりの言いように、ちよつとイラつときて煽つてしまった。まあ頑張れ息子。お前ならきつと大丈夫だ。確信は無いけどな！

「さて、では『試練』も終わったことだ。褒美だ。ここを貸してやる。」エンデヴアーは後ろに控えてた男からファイルを受け取り、俺に渡した。内容は、さつき話をした物件のことなのだが・・・

「これ・・・広くない？」

「4LDKだからな。」

「いや、一人暮らし用で良いんだよ！お前の一人暮らしは、こんな広くないと駄目なのかよ！」

何この部屋！こわっ！120㎡？何それ。一人暮らしでそんなに要らんだろ！

「それもお前の妻に言われたからだ。」

「はっ。」

控えてる男がパソコンを動かした。

『夫が良からぬことを考えてる可能性がありますので出来れば広い部屋とありません？』

「俺に対して遠慮なく言ったぞ。なかなかイイ性格をしているな。」

や・・・やられた。まさか俺の計画を読んでは・・・くっそー！

「俺のラブラブ生活がー！！」

「おい貴様、まさかと思うが・・・」

「そうですー！俺と妻の二人つきりで過ごして新婚生活みたいにしたかったんですー！お前にはわかるまい！俺の妻サイコーなんだぜ！結婚した時から若さも変わらないんだぜ！可愛いんだぜ！そりや俺も色々モチ余しちゃうデシヨウがー！！！！」

「・・・いつものことながら。これさえ無ければ有能な男なんだが。」エンデヴアーが「最低だなコイツ」って顔で見えてきやがります。い

いでもん。これが俺ですから!!

「まあいい。家の話は、これでお仕舞いだ。」

「あつそ。じゃ、俺はコイツ担いで帰るわ。」

「まだ帰るな。仕事の話がある。」

俺が息子を担ぐこうとすると、控えてる男が写真を見せてきた。そこにはマッチョな大男が写っていた。

「この男・・・誰だっけ?」

「以前俺とお前で捕縛した男だ。『ショック吸収』の個性を持っている。」

「あく、はいはい。あつたねくそんなこと。お前が焼いたやつか。で、どしたん?」

「出所してから行方が分からなくなった。」

「はい?早くない?」

こいつは、それなりの犯罪をしていたので10年は出て来れなかったはずだが・・・

「俺も不審に思ってた。調べたが出所した経緯も行方も分からん。せめて行方を知ろうと思ってた。貴様ならマーカを着けていただろう。」

「あくはい。そゆことね。ちよい待ち。」

俺の個性は『追跡』。俺の頭の玉に入っている液体を極少量でも浴びていれば居場所は分かるのだ。俺自身が関わって捕まえた奴等には、全員に付けているのだが・・・

「あり?」

「どうした?」

「反応がない。」

「なんだと。」

「俺の個性で反応が無いってなると、電波を完全に遮断している建物か、もしくは俺が液体をかけた部分を切り取るか、なんだけどなあ。

あとは・・・死んでる?」

「そうか。で、そいつにかけてあつた部分は?」

「えつと、確か・・・頭。つうか頭皮。」

「何故そんなところに。」

「お前が体の大半を焼いちゃったからだよ！火傷にしみたら可哀想か
なって思っつて、唯一火傷をしてないところにかけてんだよ。」

「そうか。だとすると・・・」

俺とエンデヴァーは黙って考えたが

「被害者になったんじゃね？」

「そうかも知れんが、今だけ電波遮断の建物に居るのかも知れん。引
き続き、探索をしておけ。」

「了解。んじゃ、俺は帰らせて貰うわ。」

「ああ。」

俺は息子を背中に背負いながら、部屋を出て考えたのだが

うーん、やべーなく。勘だけど、ヤバい気がする。だって、なかな
か無いぜ。電波を完全遮断する建物なんて。それこそ研究所とかで
もない限りは。

俺は携帯を取り出し、もう一つの取引先に電話をした。

「あくしもしも。オレオレ。あつごめん。切らんといて。」

ツー、ツー、ツー、ツー

電話を切られた時の悲しい電子音が聞こえてくる。

もう一度電話をした。

「おい眼鏡！お前ふざげけんなし！あ、すいません。いや、マジで切らん
でくれ。仕事絡みだから！情報渡そうと思っただけだから！ちよい
と強力な個性をしたやつが行方不明なんだよ・・・」

とりあえずコイツに話をしとけば何とかするだろう。

ただなあ、不安が一つ。アイツと仲違いしたらしいからなあ。動い
てくれるか心配だ。

22話

春。それは新生活が始まる季節。

どうも皆さん、おはようございます。峰田実になった青年Aです。季節は四月になり新生活が始まります。今日から雄英高校に通います。新しい制服って輝いて見えますよね！

・・・長かった。ここまで来るのにどれだけ苦労したことか・・・感慨深いです。今日から高校生として頑張って原作を生き延びます。まあ、初っぱなの心配は・・・アレですね。爆豪あたりにイジメられないか心配です。何しても勝てる気しないし。何かあったら飯田に言つて助けてもらおう。彼は融通は利かないが正義感強いからな。うん、そうしよう。

・・・さて、着替えますかな。

真新しい制服に身を包み、部屋から出ると峰田父上と母上が待っていました。

あり？父上がこんな時間から起きてる。珍しい

「うるせえよ。息子の登校初日だろ。今日くらい起きるわ。」

あれま、何やら親っぽいことを言ってますよ。

「実ちゃん、忘れ物ない？」

ないです。たぶん。昨日と今日、ダブルチェックで確認したから大丈夫のはず。

「ふふ、でもココなら直ぐに帰つて来れるから大丈夫よね。」
ですね。

今、住んでいるところはNo. 2ヒーロー『エンデヴァー』さんから借りているマンションの一室である。雄英から徒歩10分。うん、近い。

一応、本当に良いのかと聞いたら有事の際に使うためのいくつかある部屋の1つらしく、普段は使っていないそうです。「管理人をタダで雇つてるもんだ」とか言っていました。流石No. 2ヒーローです。

さてさて、今日から二度目の高校生活が始まります。

靴を履いて、玄関のドアノブに手をかけると峰田父上に呼び止められた。

なんで？

「・・・まあなんだ。あゝ、あれだ。今日からヒーローの卵だ。頑張れや。」

「ふふ、確かにヒーローの卵になったのよね。実ちゃん、制服も似合ってますてカッコいいよ。」

二人にそんな事を言われると、照れくさくて顔が熱くなった。まとも二人の顔が見られない。でも、これだけは言わなければ

「いつもありがとう。行ってきます！」

マンションを出て、歩こうとすると自分を待っていた友人がいた。

「あ、峰田くん待ってたよ。一緒に行こう。」

爽やかな笑顔が眩しい！そう、待っていたのは自分の友人『矢吹スギル』である。

・・・うくん、何でいるの？

「え？同じマンションに住んでるからじゃない？」

逆に疑問符で答えられてしまった。そうなのだ。住んでるのだ。しかも真下の部屋に。自分達が引越して、隣とか上下の部屋に挨拶しに行ったら「うちも今日引越して来たんですよ。・・・あれ？実ちゃん？」と矢吹の姉であるララさんが出て来たんでビックリしたよ。

それは知ってた。じゃなくて、何故同じタイミング？

「いや／＼に住んでる峰田君の足音から、そろそろかなあって思ってたね。一緒に行きたいから勝手に待ち合わせさせてもらったんだ。」

・・・うんそれもストーリー・・・考えるのはよそう。そんなわけないからね。自分の友達がそんなことしてるわけが無いですからね。

じゃあ行きますか。

「うん！」

笑顔が本当に眩しい。くっ！イケメン羨ましいです。

徒歩10分とは雑談をして歩いていると本当に早く、もう雄英の校門に着きました。

「ところで峰田君。」

ん？

「なんでこんなに早く来たんだい？」

矢吹が自分の腕をあげて時計を見て話す。現在の時間は午前7時。普通ならばかなり早いだろう。

そうだね。答えよう。

誰も来てないうちに色々見て回りたくない？てゆうーか回りたいたから来た。

「あー、なるほど。確かに。雄英は大きいもんね。先に色々見て回らないと迷子になるかも。」

だろ。そういうことだよ。さっさと回るぞー。

そう言って走って校舎に向かいました。だってワクワクする。漫画の舞台に来たのだ。はやる気持ちが押さえられないのだ。

「あつ、ちよつと待ってよー。……子供っぽいところも……。」

あれ？今ゾワつとしたよ？気のせいかな？

とりあえず寒い気がしたので走り続けてみました。

さて、皆さん雄英を回ってみました。え？結果ですか？うん。一言で言うんですけどね。

広すぎです！

最初に向かったのは、昼食で必ずお世話になる場所。そう、つまり食堂です。食堂には名前があり、『LUNCH RUSHのメシ処』と書いてました。

「入口は閉まってるのに美味しそうな香りがするね。」

全くもって、その通り。おかげでお腹がすいて大変でした。
次に保険室。漫画では緑谷が大変お世話になってる部屋である。
中には入れていないのだがドアのガラス越しに中を拝見。・・・普通の保健室だった。

次にTDL。・・・？何それ？東京ディ

「えっと、トレーニングの台所ランドって書いてるね。外からは体育館にしか見えないけど。」

おっと、そうなのか。

中が見たいと思ってドアに手をかけるとアツサリと開いて、中から声が聞こえてきた。

「チャージ10%！いくよーミリオ。環。」

「OKさ！ねじれ！」

「・・・帰りたい」

中には男子が二人、女子が一人居て、どうやら女子が何かをするようだ。女子が男子二人に手を向けると

「ねじれた波動！」

螺旋状にねじれた形のビームのようなモノが飛び出した。

それを男子二人が向かい受ける。黒髪は防御の姿勢をとり、金髪の男は、ただ立ったままだった。

そして、ビームは二人に当たる。衝撃で黒髪の男は少し吹っ飛び、金髪の男は立ったままだった。

金髪の人は耐えたのか？スゲーな！

「え？・・・うん。そうみたいだけどさ、何でだろうね？」

うん？何がだ？

「いや、だってあれ。服が・・・」

服ね。うん。完全に脱げている。金髪の男の真っ裸である。

そういう個性じゃないのか？例えば、どんな衝撃にも耐えるけど服は脱げちゃう的な。女子の方も慣れているようで爆笑してるし。

「そ、そうなのかな？それだと、社会的なりスクが高いね。」

それもそうだ。戦闘中に完全に真っ裸になってしまっただけは社会的

にアウトだ。色々な罪に問われかけない。でもまあ、自分には関係ないですし。

いやー、スゲーのも見れたし他んどこにも行こうぜ。

「そうだね。他を見に行こうか。」

この後、自分達は他の施設も見に行った。いやー、少し疲れしました。

さて、そろそろ教室に行くか。

「少し早いけど、そうだね。初日だから早く行つて備えなきゃ。」

ん？備える？何で？

「僕の個性が『不運』だからね。なるべく教室で人が来る前に色々を用意をね。」

あ、うん。納得。

「じゃあまた。始業式で会おうね。」

おう。またなく。

という会話をした後、教室に入ると、まさかの誰もいない状態。八百万くらいは来てると思つたのだが。自分の座る机を探して座ると眠気が襲つてきた。

朝早かつたからなあ。少し寝るかな。

最後のコレがいけなかったと、今は思っております。寝ぼけてるって怖いね。いやはや、焦つた焦つた。アハハはははは。

原作よ。ごめんなさい。

22. 5話 緑谷出久 ダイジエスト版 その①

「知ってるか！でくの坊って言葉があるのを？役に立たないって意味だぜ！無個性のお前にはピッタリだな！」

「デク！てめーには無理なんだよ!!」

「デク！まだ諦めてねえのか？本当にバカだな！」

他にもいっぱい、本当にいっぱい言われた。けど、僕は……ヒーローを目指すんだ。

あの個性が無いと言われた日から体を鍛えた。最初は、がむしやりにやり過ぎて体を壊してしまった。後で調べてみたら小さい頃に体を鍛えすぎても意味は無いらしく、筋肉をしっかりとつけるには高校生の前後の時期が良いと書いていた。トレーニングメニューを考え直さなくてはいけない。

考え直したメニューを始めて数年、いつもの日課であるヒーローの映像を某動画サイトで見ていた。オススメ動画を自動再生していると『俺の娘、天才のうえ可愛いのだが』という動画が流れた。

「何でだろう？」

とりあえずそのまま見ていた。出てきたのはピンクの髪の毛の女の子。自分と同じくらいの歳に見える。彼女は一生懸命に絵を描いていた。だがよく見てみると

「これって設計図？」

動画の中では女の子が紙にどんどん描いていく。

描き終わると今度は工具を取り出し、ガンガンと音を鳴らしながら作っていく。動画が暗転し、三日後というテロップが出る。そして女の子が笑顔で

『こんにちは皆さん！今日ご紹介するのはコレ！パンチをしても自分の拳を痛めないガントレット！これを装着し壁を殴ります。』

女の子がそう言って、ガントレットを着けて壁を殴った。そうすると殴った箇所穴が開いた。

『どうでした？ スゴいですよね！ ですが少し失敗しました。拳を痛めませんでした』

彼女は言いながら上半身の服を脱いでタンクトップになり肩を見せると青く腫れていた。

『殴った衝撃で肩を痛めました。失敗です。ですが諦めません。良い改良をしてこそモノは出来上がるのです！ 可愛いベイビーちゃん達をこれからもいっぱい作りますよ！』

そう言っただけの彼女の映像は終わった。

この動画は僕にとつて衝撃的だった。以前から考えていた構想の一つ。サポートアイテムを持つこと。これはお金がかかるために中学生になったら新聞配達などのバイトで買おうと思っていたのだが・・・自分で作るなら・・・

それから数年。今は中学生。あれからお小遣いもお年玉も注ぎ込んで、やっと一つのサポートアイテムを作れた。その名も『スパイダー』。手首に巻き付けたブレスレットから粘着力の高い糸を、つまり某アメコミヒーローのクモ男と同じことが出来るようにしてみた。

何故作るものをコレにしたかって？ それは、図書館で見つけた資料を参考にしたんだ。

国が運営する国立個性図書館。あらゆる個性についての本が置いてある。内容は個性の発展から個性の記録。個性に関する本がいっぱいあるのだ。

そこで読んだ一冊の本。そこには色々な個性犯罪者の個性が明確に書かれていた。それを読んでいると一人の女怪盗ヴィランが目に入った。名前は『女郎蜘蛛』。個性は『蜘蛛の糸』が出せること。出せる蜘蛛の糸の強度と太さは、この世に生きている最大の大きさの蜘蛛と同様である。言ってしまうえば、ただの蜘蛛の糸が出せるだけ。つまり個性の意味はほぼ無かった。しかし、その女性は数々の盗みをやり遂げた。その一因になったのが個性と薬品を混合するサポートアイテムにより糸に強度を持たせたとか。

スゴい！ これを作れば！

思い立ったが吉日。僕は色々な情報を集めて研究をした。結果

は・・・トレーニングの時間を削り、年単位の時間を使ったけど何とか出来上がった。ただ完全に

「昔の某アメモコミヒーローがやってた感じになっちゃった。」

機能は強力な粘着力のある糸を出すこと。僕には蜘蛛の糸を出す個性なんてないから、糸のように出すことが出来る機能から作り、さらにそれを強化する薬品を混合した。

きつと「攻撃力のあるやつを作れよ。」「くだらない」と言う人もいるだろう。

でも、このサポートアイテムは新たな道具を作るのに丈夫な紐の役割を果たしたり、粘着力があるからヴィランを拘束したり、怪我をしている人の包帯の代わりにだってなる。立派な人助けが出来るんだ。

だがしかし、

「む、難しい」

アイテムは出来上がったものの、使いこなすことが難しかった。思った場所に『スパイダー』から出す糸を飛ばせない。使いこなすことが出来るようになるまで、さらに数カ月を要した。

そうこうしている間に中学生三年生。雄英の模試判定は合格圏内。本当に良かった。でもある日の教室で

「すごいや緑谷も雄英志望していたな。」

「「「はあ~~~~!!?」」」

「緑谷が!」

「冗談だろ!!」

・・・嘲笑には慣れている。僕は・・・

「こらデク!」

いきなり机の上が爆発した。

「うわっ!か、かつちゃん。」

イスから転げ落ちた僕にかつちゃんは続けて言った。

「『没個性』どころか『無個性』のお前が何で俺と同じ土俵に立とうってんだ!」

「そ、それは・・・」

僕はヒーローになりたいから!オールマイトみたいにカツコよく

人を助けるヒーローになりたいから！

と言いたかった。でも、僕の口から出た言葉は

「別に張り合おうとか・・・」

情けない。

「小さい時からの憧れで・・・」

情けない。

「やってみないとわからないし・・・」

情けない。

「何がやってみないとわからないだ!! てめエに何がやれるんだ!？」
情けなかった。

帰り道、色々な記憶：：というよりクラスの人達の顔が浮かぶ。どの人も個性を持っている。特に爆豪：：かつちゃんの個性は凄い。今の時代、個性をもて余している人達が多い。そのため犯罪者がとても多い。そんな人達と戦うにはどうしても戦闘向けの個性が必須だ。かつちゃんは本当にこの時代のヒーローに合っている。

それに比べて僕は・・・鍛えてもそれなりの筋肉しかつかないことが分かった。サポートアイテムも、ちゃんとしたモノは作れない。

何よりも個性が・・・無い。

・・・見ないようにしてたのかも知れない。

このどうしようもない現実から目を反らしていたのかも知れない。色々と不安な記憶が頭の中で濁流のように流れて押し寄せる。

そして、その記憶の中でも小さい時の記憶。病院から帰って来た時の記憶が再生された。

お母さんが泣いて後ろから抱き締めている。違うんだよ。お母さん。僕の言っただけで後ろから抱き締めていた言葉は・・・

『なれるだろ。』

ハツとして顔をあげる。当然のように誰もいない。でも思い出した。忘れちゃいけないのに！彼の言葉を・・・誰もが・・・無個性は

ヒーローになれないという世の中で・・・紫色の頭の少年の言葉と出会いを。

そうだ・・・あの時に決めたじゃないか！周りのことなんて気にしちゃだめだ！上を向いて、つき進まなきゃ！！

「え、Mサイズの・・・隠れミノ・・・」

声に驚いて後ろを振り向くと、ヘドロのようなドロドロとした人が立っていた。そしてそのヘドロの人は僕に覆い被さり、口を塞いできた。

「わっぷ!?」(ヴ、ヴィラン!?)

「いやゝ助かったぜ。まさかあんな奴がこの町にいるなんてなあ。おっと抵抗するなつて。」

僕は必死に抵抗を試みた。だが泥を掻き回すような感触しかしない。

「へへっ無駄だよ。俺の体は流動的なんだ。ほら、大人しくしろつて。あと30秒もすれば楽になるからよ。」

いぎが出来なつ！苦しいつ！死ぬ。僕は死ぬのか・・・嫌だよ・・・誰か・・・

意識が遠くなった時のドカンっ！とマンホールの蓋が空中に浮いた。そして

「もう大丈夫だ少年！私が来た!!」

え？

「TEXAS！」

オ・・・ル・・・

「SMASH!!!」

・・・マイ・・・ト・・・

意識を失う前に僕は感じた。彼の拳の風圧によって僕の体からヘドロの人が離れる感覚を。

これが僕のオールマイトとの出会いだった。

22. 5話 緑谷出久。ダイジエスト版 その②

気絶した僕をオールマイトが起こしてくれた。その後、サインもそこそこに立ち去ろうとするオールマイトにどうしても聞きたいことがあって

「それでは今後とも応援よろしくね！」

足を曲げ、今にもその強力な脚力で跳んで行こうとしている背中に『スパイダー』を使ってしまった。

スパイダーから出た糸は、オールマイトの背中に当たり、オールマイトが跳ぶと僕の体も浮き上がった。

「うわああああ!!」

「っ!?な、何をしているんだ少年!!」

「すみません!どうしても聞きたいことがあって!」

オールマイトは、少し咳き込みながら近くのビルに着地した。凄いや。さっきのジャンプでこんな遠くまで来れるなんて。

なんて感動しているとオールマイトが

「私はマジで時間が無いので、さらばだ!!」

早くも跳んで行こうとしていた。

「待って!」

「NO!!待たない」

オールマイトが手すりに手をかけた。

オールマイトが行ってしまふ。時間がないと言っている。でも僕は・・・聞きたい・・・

「個性”が!・・・”個性”が無くてもヒーローになれますか・・・あなたみたいなヒーローになれますか?」

「個性”が・・・ごっつ!?!」

答えを聞くのが怖く下を向いてしまった。でも僕は喋り続けた。周りの評価。自分がしてきたこと。今までのことを・・・そして自分のなりたいものを再度確認するように聞きたくなかった。意を決して、顔を上げ彼に言おうとしたのだが目の前には・・・

「そんなあなたみたいなヒーローに僕もおおおおお???!!!」

骸骨のように痩せ細った人が立っていた。

「私はオールマイトさ。」

オールマイトだという彼は血を吐きながら言った。

「う、ウソだー！！！」

自分がオールマイトだと言った彼は、ため息を吐きながら座り込み、シャツをまくり上げた。そこには大きな傷があった。とても凄惨な傷が。

「5年前に少し”事件”があつてね。その時の傷さ。呼吸器官半壊、胃袋全摘。度重なる手術と後遺症でね。私がヒーローとして一日に動けるのは三時間くらいさ。まあ、さつきまでの自分は、プールで腹筋を力み続けてる人みたいに思ってくれたまえ。」

「そんなのどこにも・・・」

「ああ、そうだよ。世間には公表しないでくれと私が頼んだのさ。」

「な、なんでそんな事を。」

「ヒーローは悪に屈してはいけないからだよ。もし私が怪我をして暫く行動出来ないと分かったら？どうなるかな。”平和の象徴”がいなくなったら。」

「・・・あ」

用意に想像が出来た。今だって個性をもて余している人達がいっぱいいるのに。抑止力になっている”平和の象徴”がいらないなら・・・大混乱になってしまうかも知れない。

「聡い子のように良かったよ。いいかい？『プロは、いつだって命懸け』だよ。とてもじゃないが”個性”が無くても成り立つ』なんて言えないな。」

「・・・は・・・あ」

言えない・・・つまりは・・・

「個性がないと言っているから、さっきの糸はサポートアイテムの類いだろ？見たことがないやつだから自作かな。人を助けたいと思うのは立派だ。だけど、君にはヒーロー以外をオススメしたいね。サポートアイテムの職人だって、立派な人助けになる。直接助けたいな

ら警察官って道もある。」

ああ、やめて……言わないで……

オールマイトは、ゆつくりと立ち上がり屋上の扉に手をかけて最後に言った。

「……夢を見るのは悪いことじゃない。だが現実も見るようにしてはな。少年。」

僕の意識はここで途切れた。

僕は意識が途切れながらも歩いていたらしく、気がついたら道にいた。

……あ、そうか。言われてしまったんだ。トップであるNo. 1ヒーローに……現実を見るようにって。

手にあるノート。『将来の為のヒーロー分析No. 13』。焼け焦げている。そして思い出される言葉。

『現実』、現実、現実現実現実……

ああ、本当は分かっていた。分かっていたから僕は足掻いていたんだ。だから見ないように……みないように……

ドゴオオオオオン!!

突然の爆発音に横を向くと、そこには商店街があり、人だかりが出来ていた。

ああ、クセって凄いな。

微妙に見覚えのない道を歩いていたと思ったら、体が勝手に動いていたらしい。きつとずっと爆発音はしていたのだろう。今も勝手に商店街に足が動いていた。

やめておけばいいのに。

思いとは裏腹に人だかりを縫って爆発音の元に目を向けると、さっきのヘドロの人が誰かに寄生しながら暴れていた。

そ、そんな！だつてさつきオールマイトがっ!!逃げられた!?だとしたら

「ぼ、僕のせいだ……」

周りの人の声から、寄生された誰かは中学生で暫くあの状態で捕まっている状態らしい。

そんな！あんな苦しいのに耐えているって言うの!?僕のせいでごめんなさい！でも僕は何も・・・出来ないっ！誰かつつ彼を救って!!

早くあのヘドロに有利な個性のヒーローが来てくれと願っている
と寄生されている中学生と目が合った。

目が合った瞬間・・・

僕の足が・・・

体が・・・

飛び出していた。

「馬鹿ヤローー!!止まれー!止まれ!!!」

後ろから声がする。だけど、足が止まらない。

同時に考えた。

何で?どうして出た?何の役にも立てないのに。

ヘドロが大きな目を此方に向けて何かしようとしていた。

どうする!でも、こういう時は!

背中に背負っているカバンを走りながら外して、全力でヘドロの目に投げた。

「ぐうー!」

ヘドロが怯んだ隙に懐に入り込み、なんとか中学生の顔からヘドロを引っ張り、口を外に出させた。そして僕は言う

「かつちゃん!!」

「何で、てめえが・・・」

捕まっていたのは幼馴染のかつちゃんだ。

「何でって！分かんないよ!!でもっっ!!」

本当にわからない。色々な理屈があった気もする。でも、でもっっ!!その時はっつ

「君が助けを求める顔してた。」

ヘドロのドロドロとしたモノが僕の腕に絡み付いた。

「邪魔をするなあ!」

言葉と同時に上からヘドロの手が押し潰そうとしているのがスローモーシヨンのように見えた。

死ぬ

そう思った。

でも、そうはならなかった。

僕の後ろから大きく太い腕が出て来て、僕とかつちゃんの腕を同時に掴み、野太く逞しい声が僕の耳の近くで聞こえた。

「君に諭しておいて己が実践しないなんて・・・『プロは、いつだって命懸け』!!」

ああ、やつぱり・・・

「DETROIT!!SMASH!!!」

カッコいいなあ・・・オールマイト・・・

この後、散ったヘドロの人はヒーロー達に回収され、僕は無謀な行動を怒られ、かつちゃんは称賛された。

・・・家に帰ろう。

「おい！デク!!」

帰り道を歩いていると突然後ろから呼び止められた。振り返ると、

そこにいたのは幼馴染だった。

「かつちゃん。」

「てめえに助けなんて求めてねえ！一人でも出来たんだよ！無個性のくせに恩売ろうってか！見下すなよ！俺を!!クソナードが!!!」

かつちゃんは、言うだけ行って行ってしまった。

・・・ははは、凄いやつネス。こういう人がプロの世界に行けるんだな。・・・何も変わったわけじゃないけど、これで良かったんだと思う。これで僕も現実の・・・

「私が来た!!」

「わ!?オールマイト!!何でココに!?取材陣に囲まれてたんじゃ」

「そんなの抜けるくらいワケないさ!ゴフっ!」

血を吐きながらオールマイトが骸骨のような人になった。

「む、無理を為さらないでください。」

「いや失敬。さて、少年。ここには、礼と訂正そして提案をしに来たんだ。」

「礼と訂正と提案?」

「君がいなければ私は口先だけのニセ筋になっていたよ!ありがとう。」

「そんな、僕は結局・・・皆さんの仕事の邪魔をしてしまって・・・」
無個性のくせに前に出て、ヒーロー達の仕事をしくくしてしまっただけだ。

「そうさ!あの場の誰でもない!!無個性”の君だったから私は動かされた!!!」

・・・え?

「歴代のトップヒーローは学生時から逸話が多い。だが皆の話がこう結ぶ。『考えるより先に体が動いていた』と!!!」

何故だろうか。ドクドクと心臓が大きな音を出し始め、体が震えて涙が出てきた。そして昔の母との記憶が甦った。

「君もそうだったんだろう?」

「・・・はい」

そして母に言って欲しかった言葉、紫色の頭の少年が言ってくれた

言葉を

「君はヒーローになれる。」

オールマイトがくれた。

僕はその場で膝が崩れて泣いて・・・泣いて・・・

「ありがとう・・・ごさい・・・ばず」

お礼の言葉が言葉にならなかった。

22. 5話 緑谷出久。ダイジエスト版 その③

「……やっと、ここまで……」

オールマイトと出会った日。その日、この言葉から僕の運命は変わった。

「君に私の”力”を受け継いでほしい。」
「え？」

最初は何を言っているか分からなかった。オールマイトは話を続けた。そして僕はオールマイトの大変な秘密を知ってしまった。力を引き継ぐ”譲渡”の個性というものを。

……譲渡……譲渡……

「で、でもそれじゃあオールマイトが……ヒーローを辞めてしまうことに……」

「ははっ、大丈夫。”譲渡”しても暫くは私にも個性が残るんだ。それに引退を考えてもいたからね。」

「え？引退？」

「うん。元々私のヒーローとしての時間は短くなっていたからね。完全にヒーローを辞めてしまう前に君のような子を見つけられてラッキーさ！」

「ら、ラッキーって……」

「ああ！無個性”””なのにあの場で一番ヒーローをしていた君に出会うことが出来た。そしてそれを見て私自身を振り返ることが出来たんだ。いつの間にか見せかけだけの筋肉ヤローになっていた私をね。」

「そんな僕は何にも……」

「いや、君はあの場で私の心も救ってくれたんだよ。本当にありがとう。……だからこそ、そんな君に受け継いで欲しいんだ。この個性を。『ワン・フォー・オール』を。」

あの尊敬して……憧れてやまないオールマイトに……ここまで言われて……あるのか……ないだろ……

「まあ、しかし君次第だけどき。どうする?」

断る理由なんてっ!!!

僕は目から溢れ出ていた涙を袖で拭き、オールマイトを正面でしっかりと見つめ言った。

「お願いします!」

あれから数ヶ月。鍛えに鍛え、僕は今『雄英高校』の正門に来ています。雄英高校の制服を着て。

無事・・・ではないが入学試験、受かることが出来て良かった。

実技試験の時は大変だった。なんと言ってもオールマイトに

「君は『スパイダー』を使わないでくれ。」

と言われていたからだ。何故って?それはね、沿岸のゴミ掃除で鍛えている時だったんだけど・・・使い過ぎたからです。『スパイダー』は便利だったんです。ゴミ掃除に。ゴミを縛りあげたり、遠くにあるものを引き寄せたりと。

そんなことをしていたらオールマイトに「何故、現場にある紐や縄を使わないのかね。『スパイダー』の原料?材料?がもつたいない気がするよ。」と言われてしまった。目から鱗でした。全くもつてその通り。既にあるゴミに混ざっている紐や縄を使えばいいのに頭が働いていなかった。凝り固まっていたと言っている。反省しました。それ以降、『スパイダー』を使わずにゴミ掃除をした。たんたと・・・たんたと・・・

じーーーーー

「緑谷少年、緑谷少年。」

「はっ、はい!」

「目線が『スパイダー』にいつてるよ。」

「あ、すいません。」

「・・・ふむ、緑谷少年。申し訳ないが『スパイダー』を作った経緯を教えてくださいませんか?」

「はいー」

僕は話した。何故作ったか。何故この『女郎蜘蛛』さんの”個性”を参考にしたか。作ったのち、どのように使っていたかも。

「うーん、なるほどなるほど。彼女を参考にしたのか。はっはっはっ！どこかで見たことがあるわけだ。」

一人納得しながらオールマイトは言うが・・・何処かで『女郎蜘蛛』と会ったのだろうか？『女郎蜘蛛』の事件などにはオールマイトと会ったことのありそうな記事とかは無かったんだけど。

オールマイトは笑っていたが僕が不思議そうに見ていると分かる。と咳払いをして真面目な表情で言った。

「ゴホン。あゝ、緑谷少年の話から察するに君にとって『スパイダー』は君の擬似的な”個性”の獲得になっているね。心の中で。」
「え？」

思いあたる節は・・・あった。正直、自分で作って使いこなせるようになってきた時、この”力”があれば人を助けられる。”サポートアイテム”ではなく”力”と思っているところがである。

「緑谷少年は”無個性”だ。だからこそ”個性”に近いサポートアイテムを持ったのなら、”個性”と同等の”力”を持ったのだと思っても仕方がないことだ。むしろ思うのが人間の心だよ。何も悪いことではないから安心して欲しい。」

「あ、ありがとうございます。」

「うん。では、私から一つ提案だが・・・雄英の実技試験、君は『スパイダー』を使わないでくれ。」

「はい・・・ええええ!!?!」

その後、オールマイトは理由を言ってくれた。何でも擬似的な”個性”と思ってしまうている僕の心を矯正し、『ワン・フォー・オール』を心に刻み込むためらしい。このままでは、いざ戦闘を行うときに『ワン・フォー・オール』を使えば良いのにサポートアイテムである『スパイダー』を優先的に使うという思考が出来上がってしまうからとのこと。

「アイテムが便利過ぎてね。そればかり頼ってしまい、アイテムが無ければ力を発揮できない。そんなヒーローを何人も見てきたからね。」

オールマイトの実体験から来る言葉を僕はしっかりと受けとめた。

受けとめたはずだったのだが・・・実技試験は本当にボロボロだった。開始の合図があった後、僕は腕を前に出し、『スパイダー』から糸を発射させる行動をとった。腕に『スパイダー』を着けている訳でもないのに・・・。

しかもその後が酷かった。

糸が出ないことに混乱し、服のポケット触って『スパイダー』を見つげようとする始末。一応、足だけは仮想ヴィランを倒そうと街中に走っていてくれたが、本当に恥ずかしい限りである。

その後は・・・まあ、悲鳴を聞いてO p 仮想ヴィランが目の前に迫ってきていることに気がついて、逃げ遅れてる女の子を発見し、O p 仮想ヴィランを殴って・・・試験は終わりました。帰り道で

・・・確実に落ちた・・・

そんなことを思いながら帰り、受験結果が来るまでの記憶は覚えてないほどです。

ですが今は大丈夫です。二度目ですが、言います。僕は今『雄英高校』の正門に來ています。雄英高校の制服を着て。あ、試験は終わったので『スパイダー』は着けてます。暫くは使わないようにするつもりですけどね。

校舎に入り、僕は教室に向かった。ちなみに僕の教室はA組です。ヒーロー科は一般入試で定員36名。クラスは2クラスしかない。

「着いた。」

そんな狭き門を抜け、選ばれた人たちがこのドアの向こうにいるわけ・・・

ドキドキします。一先ず、受験の日に出会った怖いメガネの人とか、かっちゃんみたいな怖い人とは違うクラスであって欲しい

なあ……

そう思いドアを開けると

「机に足をかけるな！今まで使っていた先輩や机の生産者の方々に申し訳ないと思わないか!？」

「思わねーよ！てめーど中だよ端役が!」

会いたくない!と思っていた2トップがおり、何やら言いあいをしていった。

どうしようかと思っただけ、とりあえず絡まれたくないので気配を絶ちながら、そつと教室に入り自分の席を探した。

「緑谷……緑谷、あつたここだ。……え?」

黒板に貼つてある席順の表を確認し、自分の席を見つけて向かうと僕の後ろの席である子が机に突つ伏して寝ていた。

「そ、そんな何でここに……」

寝ていた子は……いや、体は小さいけど、ここにいるからには、子ではなく高校生なので子と呼ぶには失礼のだが、僕の記憶の中の彼とあまり変わってないように感じて……いや別人の可能性の方が高いけど……あまりに特徴的で頭に玉をつけている人がいた。

僕は力が抜け、膝について膝立ちの状態になった。そしてその膝から落ちた時の音で、その人は起きたらしく、ゆつくりと顔を上げて此方を見た。

僕は震える声で

「あ、あの僕の事、覚えてま……」

「緑谷じゃん。久しぶりだなあ。」

別人の可能性の方が高かったのだが、僕が子供の時に会った少年に間違いなかった。

しかも彼は僕のことを一目で分かった。

「いや、あのあと色々心配だったけどよく。やっぱりココに来るよな。緑谷だし。」

「あの……僕は……」

「あれ?そんなアクセサリー着けてたっけ?」

「これは・・・」

「まあ、いいや。とりあえずお前があんま変わってなくて良かったよ。」

「か、変わってないかな」

「おう！ここに来たってことは、あの時と変わらずに、夢はNo. 1ヒーローで、オールマイティみたいなヒーロー目指してるんだろ？」

僕は、その一言で感情が色々と溢れて・・・

「つつ・・・うん・・・」

「じゃあ変わってないな。あつ、でも」
溢れて・・・

「服着ても何となくわかるぜ。いい感じに筋肉ついてそうだな。」

あふれて・・・

「頑張ったんだな・・・緑谷。」

この一言で僕はもう・・・

「違、うん、です。僕、は・・・」

・・・涙が止まらない

彼から貰った言葉が甦る。

『なれるだろ。』

このまま個性が出ないかもしれないと言った僕に、アツサリと僕に言ってくれた言葉

「君のお、かげで、僕は、」

・・・伝えたい

「ゴゴに、い、ばす！」

彼は顔を横に振り、それは違うと言った後に

「オイラが居なくてもお前は来てたつて。それに仮にオイラがきつかけだったとしてもお前自身が頑張ったことにかわりはないんだぜ。」

本当に涙がボロボロと出てくる。

もう僕はダメだった。僕は彼の手を取り

「ありが、どうござい、ばすっつ!!」

感謝の言葉を叫ぶ。だが上手く言えず、泣きながら『ありがとうございませす』と何度も言った。

どうしても言いたかったから。

どうしても伝えたかったから。

彼は、そんな状態の僕を優しい笑顔で見つめてくれた。

そして少し僕が落ち着いたのを見計らって

「あ、そういえばオイラの名前言ってなかったよな？ 峰田実だ。今日からよろしくな。」

僕は彼の名前を聞いて、また泣いてしまった。

僕が英雄の生徒となった記念すべき日。

僕にとって生涯の友となる人と出会った日になった。

僕は今日という日を絶対に忘れない。

23話

アハハくあははははく……知らねー!!こんな知らねえつすよー!!原作に絶対無かったよー!!

どうも皆さん、おはようございます。峰田実になった青年Aです。さて、この『高校生が自分の手を握りながらガン泣きしてる』という状況をいつたいたいどうすれば良いのか分かりません。

何で起き抜けに少し喋ってたら緑谷泣いてるん!?あれか!?自分何かしてしまっただんか!?

……あく自分がナニかしたようです。周りを見ると皆さんがこちらを見てますね。真後ろからは「友情ですわ。」ってぼそりと聞こえてきた。この口調は八百万さんだね。八百万さんは会話を聞いて何かを察したようですが、この状況です。振り返って確認も出来ません。

早速ですが自分が原作を壊したらいいですね。

原作よ。ごめんなさい。

そんなことを思っていると、いつの間にか教壇に一人の男が立っていた。ボサボサの髪に眠そうにしてる瞳、そして首には何重に巻いてる布。足元には寝袋が置いてあった。言わずとも分かりますよね!あの先生です。ちなみにクラスの皆さんは自分たちを見ているので誰も気がついておりません。ですが、

か、神タイミングー!!!相澤先生!何とかしてください!

という視線を送ると、鋭い視線で返された。

お前が何とかしろ。

と。……酷い。

だがまあ、先生がいるならば、この言葉で全てが何とかかなります。あくえつと、先生来たみたいだから、とりあえず座ろうぜ。

自分の言葉に全員が教壇に注目後、ガタガタと音を立て慌てながら

席に座った。

緑谷も何とか泣き止んだ。・・・あつ、ダメだ。涙が止まってないらしい。机に落ちる水音が聞こえています。

相澤先生が出席簿らしき物を確認して、ため息をついて言った。

「あく緑谷。事情は分からんが、さっさと涙を拭け。」

「は、はい！すいません！」

相澤先生は、まだガン泣きする緑谷を見るに見かねたようです。

あらやだ、優しい。もう昔過ぎて細かい場面は思い出せないけど『お友達ごっこなら他所へ行け』みたいなことを言ってた人のはずです。でも流石にこれだけ真面目に泣いてたら言わないんですね。良い人だ。

「さて、まず俺に気がつくのに8秒。席に着くまで5秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね。」

ヒヤッホー！いいね！カッコいいツス！

「担任の相澤消太だ。よろしくね。」

「二「よろしくお願ひします!!」二」

「早速だが全員コレを着てグラウンドに出ろ。」

相澤先生は寝袋から体操服を出して言った。

「更衣室の場所は黒板に貼っておく。15分後に集合だ。遅れるなよ。」

「二「はい！」二」

返事を聞いて相澤先生は教室を出て行った。

うむ。たぶん原作通りだ！問題ない！さて、行きますかな。

少し急いで黒板を確認しようとする緑谷が声をかけてきた。

「あの、僕も一緒に行つていいかな。」

ん？いいも何も、行くところは一緒だろ？早く行こうぜ。時間少ないし。

「ありがとう！」

場所を確認したので教室を出ようとする

「あつ、俺も一緒に行つていいか？ちよつと場所とか探すの苦手で

よ。」

と声をかけられた。声の主は、赤色の髪の毛でトゲトゲしい髪型をした男だった。

いいぜ。早く行こう。

「ありがとな！俺の名前は切島鋭児郎だ。よろしくな！」

峰田実だ。よろしくな。

「み、緑谷出久です。よろしくお願いします！」

切島は元気な子やで。とうかスゲーな。コミュ力が高い。だつてそう思いませんか？普通さつきまで泣いてた奴と泣かせた奴を相手に話しかけないでしょ？そして

「なあ、さつきは何で泣いてたんだ？」

と聞いてくるんですよ？スゲーなおい。

「えつ、えつとね。実は・・・」

緑谷がその後、自分語りをしました。その結果

.....

「くうー!!峰田！お前いい奴だな！」

「ああ、君は素晴らしい！是非とも友人になつてくれないか！」

「ふむ。闇の中の一筋の光か。悪くない。」

賛辞が来ました。メガネの人とか、鳥っぽい人とか他の人も話を聴いていたらしい。現在更衣室での着替えを終えてグラウンドに向かっています。

緑谷の語りを横で聞いていて・・・まあ、何でしょうね。美化されてるね。自分の存在が。お恥ずかしい。そして、確実に原作に無かったでしょこんなん。ああ、嫌な予感しかない。

ちなみに爆豪と轟は既にない。話に興味はなく、素早く着替えて出て行った。そこが救いだ。なるべく主要人物には聞いて欲しくない話とかもありましたので。

え？何故かって？ただの勘。とうかコレ以上、覚えてる原作から

外れて欲しくないからです。

さて、これから行われるはずの『個性把握テスト』は原作通りだろうか心配です。

「時間内に全員集まったな。さて、お前達には、これから『個性把握テスト』を受けてもらう」

「『個性把握…テストオ!!』」

良かったー!!原作通りだー!!

皆が驚く中、自分だけ喜んでしまつて申し訳ない。

だが先生の説明が終わり、爆豪が「死ぬ!!」という掛け声で機械仕掛けのソフトボールを投げて結果が出ると、

「何だこれ!すげー面白そう!!」

「705mつてマジかよ…」

”個性” 思いつきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!

と、喜んでいる。

うんうん。皆も喜んでくれて良かった。俺も本当に原作通りに進んで嬉しい限りだー!

と思つてたのが良くなかつたのかな…

「面白そう…か。」

「?」

「ヒーローになるための三年間、そんな腹積もりで過ごす気であるのかい?」

「?!」

皆が息を飲んだ。

「よし、決めた。トータル成績の最下位者。見込みなしと判断し、除籍処分しよう。」

「『えええええ!!』」

「生徒の如何は先生の”自由”。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ。」

「り、理不尽すぎます!」

「理不尽だど？・・・自然災害、大事故、身勝手な敵たち。世界は理不尽にまみれている。そういう理不尽を覆していくのがヒーロー。放課後マツクで談笑したかったなら今すぐ辞めろ。これから三年間雄英は全力で君達に苦難を与え続ける。」Plus Ultra”さ。全力で乗り越えて来い。」

さつきまで笑顔だった全員が、引き締まった表情になった。

「じゃ、さつきと始めるぞ。50m走から。飯田！峰田！来い。」

「はいー！」

はい！

あ、自分達が最初なんだ。まだ、どう個性を使おうか悩んでたのに。

と軽く思っていました。

「ああ、峰田。」

50m走のスタートラインに立つ前に、相澤先生に呼び止められました。

はい。何でしょうか。

「お前、15位以内に入れよ。じゃないと除籍処分な。」

・・・ハハハ笑える。

まさかの自分だけハードモードだったんですけど。

確かにね合格発表の映像に『・・・雄英に来たら鍛えてやる』って言うてましたけどね。

アハハくあはははははく・・・知らねー!!こんな知らねえつすよー!!原作に絶対無かったよー!!

とまあ、これが冒頭の心の叫びなわけで・・・

その後、「理不尽過ぎるー!!!」と叫びながら全力中の全力を出した。

24話

というわけで今日は散々だったよ。

「そうだったんだ。始業式に来ないから何でだろう？つて思ってたけど、いきなり除籍処分になりそうだったなんて。やっぱり雄英って凄いところだね。」

だよなー。そっちの方は何かなかったのか？

「特にないよ。始業式が終わって教室に帰ってきたら学校の説明とクラスでの自己紹介。あとは明日からの授業こととか・・・あとは校内を先生が案内してくれたりとかだね。」

くう！普通に羨ましい！

今は学校からの帰り道。高校生活の初日から一緒に帰ってるのは当然ながら『矢吹スギル』です。

あれ？何故に当然？ここは話の流れ的に緑谷になりそうなのだが。と思った人もいるだろう。

まあ、タイミングの問題ですよ。

体力測定で原作通りに緑谷が指の一本のみに個性を使い、力を込めて球を投げ「まだ動けます。」つて言った時にはシビれたねえ。

測定が終わると緑谷は保健室行きになりました。自分らは着替えて教室へ。教室に入ると黒板には『机の上に資料を各自持ち帰って読んでおくように。以上、帰ってよし。』とあった。

皆さんリアクション的には、ぽかーんとしてた。

そんなところ来たのが矢吹だった。

「失礼します。峰田君いますか？あつ、峰田君。こっちのクラスも終わってるみたいだね。一緒に帰ろうよ。」

これで皆さん帰る空気になりました。で、今は帰ってる途中なわけ。

あ、今日矢吹の家に行つていいか？

「えっ、来てくれるの!?!あつ、でも待って！部屋を片付けないと！」

・・・何故にそんな赤い顔になる？いや、理由は知りたくないから聞かないけどね。

「ちよつ、ちよつと待っててね！先に帰って部屋を片付けるから！」

おい待て！ちよつとララさんに作って欲しいモノがあるだけだから！矢吹の部屋には行かないから！

「え、そうなの？・・・そっか。少し残念だなあ。」

おいやめろ。その子犬のように寂しいアピールの顔になるなよ。ぶつちやけ矢吹の部屋には行きたいけど行きたくないのだ。何故なら昔遊びに行った時に部屋はフローラルな香りに包まれ、行ったことないけど女子の部屋ってこんな感じかな？とか思ってしまったのだ。男子の部屋で。・・・悲しかった。

ちなみにララさんの部屋にも入ったことあるよ。でもね、何か機械類がいっぱいあってね・・・全く女子じゃなかったんだ。ちよつと切なかった。

「まいつか。峰田君が来るだけでも嬉しいし。」

いや、もう本当に何で自分への信頼度高えんだよ。自分何したんや？謎である。

なんやかんやと話している家にもう着いてしまった。流石徒歩10分である。

さて、この後自分は後悔した。何故一言電話をして自分が行っても構わないかと聞いて貰わなかったのだろうか。何故なら・・・

「ただいまー。姉さんいるー？」

「はいはいー！おかえりースギルー！あ、実ちゃんだー！どうしたのー？」

元気に弟である矢吹を迎えに出てきたのが矢吹ララさんであるのだが

「ちよつ、姉さん何て格好してるの！」

ララさんが裸々さんしてて、とっても素敵でした。だがまあ、その後自分は

「ゴフツ！」

「ああ、峰田君しつかり！」

吐血と鼻血と耳血を出してぶっ倒れました。

・・・ナイスバディです。ララさん。

嘘ついた。やっぱ後悔してないです。

「いや〜ごめんね。実ちゃん。」

いえ、こちらこそ申し訳ありません。責任取って結婚します。

「あはははは。じゃあ、貰い手がなかったらお願いするね〜。」

くう〜ララさん最高やで！ちなみに本気で結婚したいほど美しい人なので割りと本心である。

「ところでスギルから聞いたけど、何か作ってほしかったんだって？」

あ、うつつ。結構長めに効く煙玉と自分そっくりのバルーンつす。出来れば一瞬で空気が入るやつ。

「そっかー。うん、それなら出来るよ。30分くらいかな。」

言ったそばからララさんはパソコンを打ちだし作業を始めた。ちなみに現在ララさんの部屋です。機械類がいっぱい置いてます。昔はアイテム類を作っては特許を取得し売ってたようだが、色々あつて止めたらしい。今はスギルのために思い付いたサポートアイテムを試験的に作っては、「うーん、スギルは使わないかなあ」などが理由でオークションで売ってしまつてるようです。

しかしまあ、色々あるなあ。

「ん？あ、その辺はオークション出して買い手がついたから触らないようにねー。」

うつつ。でも、この見た目タンク二つとガスマスクのセットは何ですか？組み合わせをしただけに見えるんすけど？

「あくそれね。『大量ガス作成ちゃん』だよ。タンクにガスの元を入れるとタンク内の仕掛けが勝手に計算して外の空気を原料に元のガスの100倍の量を出すの。」

え？なにそれスゲー。

「まあ、少し失敗して5倍にしか出来なかったんだー。飽きちゃったから設計図だけ改善して、それは売っちゃったの。明日発送するんだー。」

いや、5倍でもスゲーんですけど。こっちの針が付いてるやつは？こっちのタンク？は透明っすね。

「それは通常の3倍早く輸血できる『輸っ血くん』の予定だったものだよ。いやー、モーターを逆回転に設置しちゃって『献血ちゃん』になっちゃった。」

え、それはつまり通常の3倍早く血を吸うモノになっちゃったんすか？

「そうなんだよねー。いやー、てへぺろって感じだね。それも明日発送なんだー。」

買い手がいたんすね。

「だよー。医療関係なのかな？緊急の時には血って早く調達しないとだからねー。」

あくなるほどなのか？てゆうか通常の3倍早く血を抜くってヤバい気がするのですが。

「うん？うーん、多分大丈夫だよ。」

なんだろうこの姉弟。根拠のない信頼やら自信やらがあるところが似ている。流石、姉弟である。

「さてと、あとは『何でも作れール君』に任せて、最後は実ちゃんの身体データだねー。じゃ、脱いでねー。」

はいはい・・・はい？

「え？だって実ちゃんそっくりのバルーン作るんでしょ？身体データが無いと作れないよ。」

え？あれ？確かにその通りですが・・・

「じゃあ、そっちの台に乗ってねー。パンツ履いてていいよ。」

お立ち台でパンツのみ!?ちよっ、それは何かに目覚めそうなんですけど・・・

困惑していると突然部屋のドアが開いて

「それはダメだよ！」

救世主スギルが入ってきた。お茶菓子とジュースを乗せたおぼんを持ちながら。

おお、矢吹！

「そろそろ持つていこうかなと思ってお茶菓子とジュースを用意してる間になんてことをしようとしてるの。」

だよな。流石に女子部屋・・・と言えないような部屋でも女性の前でパンツのみの格好になるなんて・・・

「まったく恥ずかしいよ。ちゃんと作るなら全裸でデータを取らないと意味がないでしょ!!」

.....

.....

.....

悪化した!!!

「そつかそつかー。そうだよな。ちゃんとしたの作るなら全裸だったね。失敗失敗。」

何も失敗してないっす！おいコラ矢吹！何作るか知らんやろ！何て事をいいやがる！

「え？知ってるよ？峰田君そつくりのバルーンでしょ？姉さんが台所で色々用意してる間に会話が聴けるようにワイヤレスヘッドホンくれているから。」

無駄にハイテク!!

「それよりほら、時間もないし早く脱がないと。」

おい、にじりよって来るな。

「実ちゃん。大丈夫だよー。データ流出だけはしないようにデータロックはしておくから。」

いや、そこが心配なのではなく！ちよっ、ララさんまで来ないでください！ あっ、ちよっ、マジで・・・

「そこまでクオリティ求めてないからー!!」

魂の叫びが矢吹家にこだました。

え？その後？うん、まあ死守はしたよ。ただまあ

「あ、姉さん。データはこっちでも見れるようにしておいてね。」

「うん、いいよー。」

なんて会話が聞こえた気がするが自分は気にしないようにしました。・・・色々あるからね。

25話

モニターでは激しい戦いが繰り広げられている。

「君が凄い人だから勝ちたいんじゃないか！勝つて!!越えたいんじゃないか!!バカヤロー!!」

「その面!やめろやクソナード!!!」

と、きつと今叫んでいるだろうなあ。音声は残念ながら聞こえないけどね。

この訓練を止めようか止めまいか悩んでいるオールマイトが隣で身体を震わせながらジツとモニターを見ている。

悩むよな教育者として。それにしても・・・

「カツけえなあ、羨ましいよ。」

どうも皆さん、おはようございます。峰田実になった青年Aです。

昨日は大変な目に合いました。しかしながら新たにサポートアイテムを獲得しました。嬉しい。

さて、今日から本格的な授業が始まります。

午前は普通の授業です。

楽しい。特に英語がな。流石はボイスヒーロー!

そして午後の授業。

「わーたーしーがー!!普通にドアから来た!!!」

No.1ヒーロー『オールマイト』

普通に教室に入って来ました。皆がざわついております。自分は落ち着いてますよ。見た目はね。心の方はかなり大変です。もう『ふわああ!マジでカツコいいなあ!画風ちげえし!サイン欲しい!』となっております。

「さて、私が教えるのは、ヒーロー基礎学。ヒーローの素地をつくる為の様々な訓練を行う科目だ!早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

うむ、原作通り進んで大変嬉しいです。

「そしてこっちが入学前に送ってもらった”個性届け”と”要望”に沿ってあつらえた・・・」

オールマイトが喋りながら壁のスイッチを押すと壁から棚がせりだしてきた。

「戦闘服（コスチューム）!!!」

「こーおーコスチューム!!!」

「ハッハッハ！元気が良くて大変よろしい！では、着替えたら順次、グラウンド・βに集まるんだ！そして自覚するのだ！今日から自分は『ヒーロー』なんだと!!」

皆、嬉しそうにコスチュームを受けとり、早く着替えたいのか早足で更衣室に向かった。自分も急ぎましたよ・・・廊下でコスを確認しながらね。

感想？コスのか？・・・うん、まあ、原作通りだったよ、デザイン。なんでかなあー。『カッコいい感じ』について要望したんだけどなあ。原作通りのデザインだったなあ。

いや、別にいいんだけどね。原作通りだからね。着替えてる間に緑谷が「えつと、昔のヒーローなんだけど、『ザ・チェイサー』みたいでカッコいいね」と言っていました。

自分、そやつの息子です。とは言いたくないので、とりあえず「サンキュー。緑谷のマスクは『オールマイト』のレスペクトだな。」と返しておきました。・・・おい、男が身体をぐねらせながら照れるなよ。気持ち悪いわ！

二人で皆より少し遅れてグラウンドに着いたところで

「最後の二人が来たな！では、始めようか。有精卵共!!!戦闘訓練のお時間だ!!!」

オールマイトの声がよく響きます。

ちなみに回りを見ると・・・女子の皆さんもいるわけで。・・・自分って目線が低いんですよ。だからね、女子の方を見ると色々とアレな部分が近くてですね・・・

ヒーローって・・・いいよな。

「そうだね、カッコいいよね！」

おっと、いかん。思考が声に出てしまった。だが流石は緑谷、真面目で助かった。

さて、オールマイトが戦闘訓練について説明をしてくれました。内容は原作通り、核兵器を所持しているヴィラン役と、ヒーロー役で戦うとのこと。2対2のチーム戦でね。

チーム分けは、くじ引きです。結果はCチーム。なんと八百万とです。

コレが原作通りだとは覚えてないですが、まあ正直どうでもよいです。この辺は緑谷と爆豪の戦い。そこが一緒なら問題ないはず！そんなことを思っていると

「よろしくお願いしますわ、峰田さん。」

同じチームになった八百万さんが声をかけてきた。

オッス。よろしく八よろ……

「?どうかなさいました?」

……はっ!いい、いえ、なんでもないです。

「そうですか?体調がよろしくなければ言ってくださいね。」

は、はい!

八百万は挨拶が終わると、オールマイトの説明を聴くためにオールマイトの近くに向かった。

焦りました。だってね……自分は見たのです。

………圧倒的!発育の暴力!!!

自分、マジで背が低いんですよ。そうするとね真面目な八百万はね、少し屈みながら握手して挨拶してくれたんですよ。するとね、コスチュームがアレなだけに……もにゅって……モチって……

「どうしたの峰田君?」

緑谷よ。アレがヤオヨロツパイだぜ。

「え?誰それ?」

……知らなくていいぞ。

「ええ!?!」

さてはて、そんなことをしてる間に最初の戦闘訓練の組み合わせが発表されました。

組み合わせは、緑谷&麗日のヒーローチームVS爆豪&飯田のヴィランチームです。

大変よろしい。これで原作通りになった。

4人は戦闘訓練のビルへ向かい、自分達は控え室のあるビルへ行き、観戦します。

そして、ほどなく訓練が始まり、皆さんは本気の緑谷と爆豪が戦ってるモニターに夢中です。まあ、自分もそうですが・・・ああ、もう本当に

「カツけえなあ、羨ましいよ。」

結果、勝ったのはヒーローチーム。緑谷は気絶したようです。動かない緑谷に焦ったのかオールマイトが急ぎ現場へ。そして緑谷を担いで飛んでいった。三分程で帰って来ました。保健室のリカバリーガールに怒られたそうです。説教の途中で帰ってきたから、また後で怒られる予定だそうです。

「つ、次からは危険と思ったら止めるからね！」

そして皆で講評タイム。八百万さんの言葉の弾丸が炸裂。飯田は嬉しそうに上を向き、麗日と爆豪は落ち込み下を向いてしまった。そして、オールマイトは

「全部、言われた。」

手で顔を覆って小さく言った。

・・・ドンマイ。

さて、とりあえず次の出番ないなあ。だって少し覚えてるが次は確か、轟&障子のヒーローチームVS尾白&葉隠のヴィランチームだっ

たはずだ。

尾白と葉隠がビルごと氷に包まれて大変なことになってた。特に葉隠ちゃんが。本気出すとか言って服を脱いでいた。

あれはEr・・・ごほん。女子力的にどうなの？というのと轟が強すぎたことで印象が強かったからね。うん、ちゃんと覚えてる。しかし、モニター越しとはいえ、生で葉隠ちゃんの着替えを見れるとはラッ

「さて、次の組み合わせは・・・」

オールマイイトが組み合わせBOXに手を入れて掻き回しながらボールを出す。

「ヒーローチームは、Bチーム！ヴィランチームは、Cチーム！」

キー・・・え？今なんて？

「出番ですわね。行きますわよ、峰田さん。」

あつ、はい。

「Bチームは轟少年！障子少年！Cチームは峰田少年！八百万少女！」

ですよね。Bチームって、この二人ですよ？・・・あれ？葉隠さんのお着替えは？え？ビルごと氷に包まれるのは自分なんすか？

そんなこんなで混乱してる中、部屋を出て指定されたビルへ行く途中で声をかけられました。

「おい」

振り向くと声の主は、半分白髪、半分は氷の仮面をしている人物、轟です。

な、なにか？

「お前には勝つぞ。」

と一言。自分、呆然です。

そして言うだけ言って、轟と障子は先に歩いて行きました。

・・・それは、体育祭の時に緑谷に言うセリフやろがい!!とか思いました。

「あの、峰田さん。私達もそろそろ。」

あ、すみません。ちよっと混乱しててね。申し訳ない。先に行つて

て。

「そうですか。わかりました。では、作戦などの話をしたいので早めに来てくださいね。」

オッス。了解です。

八百万と少し離れると即座にある所に電話した。

『ああん？どしたー？授業中じゃないのかー？』

峰田父上のところにある。

ちよつと聞きたい。エンデヴァーさん、なんか言ってた？

『あ？・・・あー、アイツの息子にあつたか？』

ほう、よく分かりましたね。察しが良くて助かります。で？

『あーお前が『試練』受けて気絶してた時にな、お前のこと『俺の息子の踏み台にさせてもらう。』とか言ってたな。なんかアイツの炎を全部避けたから決めたらしいぞ。』

・・・把握した。切ります。

『あつそ、んじやなあー。』

電話を切つて、歩きながら思考する。

結果・・・俺がやつちまつてた件。嘘だろおい。じゃあ、あの時に一発でも炎に当たってたら？うん、駄目だ。死んでる可能性がある。詰んでたわあ。・・・ハハハ・・・アハハハハ・・・

自分は笑いながら走り出した。そして

「気がついたら!!ベリーハードモードだった件!!!」

と叫び、ビルへと向かった。

26話

こんにちは。峰田実になった青年Aです。

・・・どうしたものか。まあ、結論から言えば負けることがベストだと思えますが。だってね、原作では速攻で尾白&葉隠のヴィランチームがやられておりましたので。

ですが、どうするべきか悩みます。正直、エンデヴァーさんが自分を『踏み台』扱いをしていることにビックリです。踏み台なんてなれもしませんよ。完全に自分の方が劣ってますからね。うーん、勝つべきか、負けるべきか。負けるにしてもスゲー健闘しないと踏み台になれんしなあ。

うーん、健闘ねえ。やれなくもないけど無理だな。諦めよう。

だってアレですよ。体育祭でテープの彼を一瞬で武舞台の半分と一緒に氷漬けにする子だからね。負けは確定ですよ。しょうがないが尾白&葉隠さんと同じ道、あっさり負けるコースを行くかね。

そんなことを思っていると

「峰田さん！絶対に勝ちましょうね！」

と笑顔で八百万が言ってきた。

・・・どうしたもんか。その笑顔。

「そんな不安な表情しなくても気持ちちは分かりますわ。昨日の『個性把握テスト』ですわよね。」

いや、全然違う。全然察してくれてない。

「皆さんが測定をしている間に道具を作れましたから1位を取れましたが轟さんのアレは・・・その・・・」

・・・反則的だったよな。

自分の言葉に八百万は黙って頷いた。なんかもうアイツは凄かった。色々よね。

「ですが、戦う前から諦めませんわ！それに講評では色々と言いましたが緑谷さんと爆豪さんの戦いを見て思いましたの。羨ましいって。」

っ!?

「悪かったな。レベ・・・」

家にある訓練場で訓練を終え、廊下に出る。すると自分の父親が立っていた。

いつも通り何も言わずに横を素通りしようとする

「焦凍、お前のために雄英に壁を用意してやった。コイツを越えろ。」
目の前に写真を突きつけられた。写真の中の男は特徴的な頭をしており、次に何処かで会えば直ぐに分かるだろうと思えるほどだ。

「金でも積んで入学させたのか？」

父親がニヤリと笑って去っていった。

本当に金で雇ったのか？だが、あの雄英が不正を働くとは思えない。つまり、それなりの実力を持っている奴を入試で見つけ出し、金を渡して雇ったのか・・・

「だとしても、俺が金で動くような奴に負けるとは思えないけどな。」
入学後、写真の男は同じクラスにいた。初日から教室で堂々と寝ていた。

・・・コイツが壁？

第一印象は、この程度だ。その後の『個性把握テスト』で少し見ていたが個性であろう頭の玉は、くつつくこと、弾力がある、という感じに見えた。だがアイツが『壁を用意してやった』と言うからには他に何かあるのだろうと思ったが・・・

今回の戦闘訓練で組んだ男をビルの外へ行かせ、ビルごと氷漬けにした。結果、

「さささ、さみみいよはや、はやくあたたためてくくくれ」

あっさりと俺の氷に捕まっていた。

組んだ男が言っていた部屋を確認すると、ドアが開いており、中は

少し煙っていた。だが見え難いという程度で中の人物の様子は確認できた。

特徴的な頭をした男は足が氷に覆われていた。

「少し待っていてください。もう少しでヒーターを作れますので。」

女の方は無事だったようだ。

女の方は、どうやって無事だった？・・・だが問題はない・・・

こちらも『個性把握テスト』で見えていたが、女の方は何か創っている間は、時間がかかっていた。つまりヒーターなんて創っている間は、俺が部屋に入っても直ぐには対処が出来ない。

俺は堂々と部屋に入った。

「・・・はっー轟さん!」

案の定、俺に気がついて振り向いたが遅い。俺はヴィラン役の二人を囲うように厚い氷の壁を作り閉じ込めた。

「くっ!?!このっ!!」

女が壁を壊そうと胸からマシンガンを作りだし、壁を撃ち出したが弾は跳ね返された。

・・・ゴム弾か・・・

いきなりマシンガンを創って撃ち出した時は、危ない女と思ったが手加減は分かっているようだ。

俺は疑似核兵器へと歩き出す。

女は諦めたようで項垂れ座り込み、男は同じ言葉を繰り返している。

「こんな・・・こんなことって・・・」

「さささ、さみみいよはやはやくあたためてくくくれ」

アイツが用意した壁つてのは・・・こんなもんか・・・

俺は疑似核兵器へと手を伸ばす。

・・・つまらない壁だったな。いや、違う。

「悪かったな。レベルが・・・」

ポスツ

言いきる前に・・・疑似核兵器に触る前に・・・俺の頭から軽い音が聞こえた。

なんだ？

確認すると、ナイフの柄のような形だと分かり、それが頭から取れなかった。

・・・なんだコレは・・・

『ヴィランチーム！WIIーN!!』

突然、オールマイトの声がした。その声に呆然としていると上から人影が降り、こう言った。

「レベルが違いすぎたか？」

その人影は特徴的な頭をしている男だった。理解が追い付かなかった。

自分は、メモ帳にさらさらと作戦を書いて伝える。

『基本的には真っ正面から戦わない。油断を誘って一気にやる。』

『油断しますかしら？』

『する。确实とは言えないけど。轟なら。』

『轟さんがですか。障子さんは？』

『障子は考えなくていい。あいつなら多分来ない。轟のせいでビルから出ていく。轟はビルごと氷漬けにするからな。』

『なんで分かりますの？』

原作知ってるから・・・なんて言える筈もない。えっーと、・・・あつ、

『オイラ、轟の親と何回か会ってんだ。それで聞いたことあんだよ。アイツは大雑把なところがあるって。個性の練習でも部屋ごと氷漬けにすることがあるって。』

『まあ、そうでしたの。部屋がどれ程の大きさか分かりかねますが、驚異的ですね。』

『そだな。でだ、戦闘とはいえ訓練だからな。まあ、足元が凍るくらいにはしてくるはずだ。だから八百万には、凍らないような何かを足場として用意して欲しい。八百万の分だけ。』

『私のだけですか？』

『おう。オイラはビルが氷漬けになる前に外に出て、障子をやってく

る。』

『お一人でやれますの?』

『任しとけ。オイラのコレなら出来る。』

自分は頭の玉をもちで、足に着けて歩いた。

『驚きですわ。全く音がしませんわね。』

『おう。しかも『くつつく』特性もあるからな。使い方によっては壁を
這うように動けるぜ。だから八百万、もう1つ創って欲しいものがある。
ナイフの柄だ。』

『柄ですか?』

『流石に本物のナイフで襲ったらアウトだろ? 柄にオイラの『もぎもぎ』
をくつつけて、怪我しないようにして疑似ナイフってことにする。オール
マイルト先生もコレで急所を刺されてる映像を見ればアウトだ
って思ってくれるだろ。』

『なるほど。では創りますわね。』

八百万は胸からナイフの柄だけを創り、こちらに渡した。

・・・あらやだ、どうしましょう。人肌程度に温い。え? あれ?
なんかヤバイ。これエロイのか? エロイ感じがする。胸から創って
るのを見ていただけに何かとつても・・・柄ロイ!!

『どうしました?』

おっと、集中しないと・・・

『でだ、障子をやったら直ぐに戻ってくる。で、オイラは天井に潜むよ。』

『それでは峰田さんが居ないことに、轟さんが注意しませんか?』

『大丈夫。そこでオイラのアイテムが役に立つ。』

自分はベルトに手を伸ばし、バックルのボタンを押すとボスつと音
を出して、バックルの一部が開き、中から一瞬で何かが飛び出し、膨ら
むと峰田実そっくりの『峰田人形』が出来上がった。

さらに頭の玉を1つ取り、手渡す。

『コイツを代わりに置いとく。で、氷漬けにしておいて、あたかもオイ
ラは動けないって事にするんだ。あと、こっちは煙玉だ。これで少し
でも見えにくくする。』

『この人形、かなり精巧な出来ですわね。』

『凄いだろ。スマンが声は出せないからボイスレコーダーを創って着けてくれ。それで八百万には偽物だと分からないように、コレを守るように戦って欲しい。それで最後は負けて欲しい。』

『負けますの？』

『出来れば人形ごと捕まるのがベストだ。で、油断して疑似核兵器に近づいて来たところをオイラが天井から轟をやる。轟対策は八百万の演技にかかっている。頑張ってくれ。』

『演技なんて、あまり自信がありませんわ。それに騙し打ちというのがヒーローらしくないですわ。』

『いや、オイラ達は今ヴィランだから。』

八百万が恥ずかしそうにハツとした顔をする。

『そうでしたわね。』

だが、直ぐに真剣な目をして

『ですが峰田さん、轟さんとの戦い、勝ってしまったても宜しいですわよね？』

……アカン。それは負けフラグやで。

「な……にが……」

この男がいたはずの場所を見る。すると、まだ特徴的な男が震えて同じ言葉を繰り返していた。

……繰り返し返す？

「ん？あれか？ありや囿の人形だ。あ、わりいわりい。頭のそれ、取ってやるからしやがんでくれ。」

言われるままに膝をつくと男は近づいてきて俺の頭のナニかを取った。

「あ、コレか？八百万に柄の部分を作ってもらってよ、刃は流石にダメだと思つてな、オイラの『もぎもぎ』で代用したんだ。疑似ナイフだな。つまりはナイフで頭を刺されたから轟の負けってこつたな。」

俺が刺されて負けた。じゃあ、

「俺と組んだ男は……」

「障子なら轟がビルを氷漬けにしてる間にやったよ。お前さあ作戦つてのは、ちゃんと伝えておかないとダメだぜ。ビルが氷漬けになるのをビツクリして呆然として見てたから、忍び寄ってサクツとやったよ。あ、とりあえず早めに氷なんとかしてくれ。オイラの相棒が寒そうだからな。」

男が指を指す方向を見ると女が腕を組んで震えていた。

俺は立ち上がり、女を囲っている氷を溶かした。

「それ、訓練中に使わなかったな。」

「使う必要を感じなかったからな。それに戦闘に於いて熱(ひだり)は絶対使わねえ。」

左はアイツの力だ。だから絶対に……

「ふうん。まあいいけど。……勝ってるうちなら未だしも、今回さ、お前負けてるからね。その考えは少しは直さないとな。次も負けるぞ?。」

男はそう言って女を連れて出て行った。

負け……負けた……俺がアイツの用意した男に……

「っ!!」

俺は声にならない声を上げた。

戦闘訓練が終わって、講評タイムです。

「どっちも凄かったねー!」

「何か力と技の戦いって感じだったな!」

「轟のビルごと氷漬けとか、ありえねーって」

「……アサシン峰田。」

誉められた。だが、何故か『アサシン峰田』という中二病の名前を貰いました。なんだそれ?

「うんうん、どちらも素晴らしかったが峰田少年!戦い方が私の知り

合いに似てただけど、ちなみに姿形も似てるんだけど、もしや……
……一応、父上が元プロです。

「なるほど！そうか！そうか！では、今度遊びに行くね!!」
断れるはずもなく、とりあえず頷いた。

嬉しいよ。オールマイトが来るのは。でもね。知り合いだったんだあ。そっかあ。知り合いかあ。なんかこうね、気持ちが消化しきれない感じです。

「マジかよ！いいなあ！オールマイトが家にくるとか羨ましいぜ！」
「ズルいズルい！私も来て欲しい！」

ワイワイガヤガヤとなっておりす。そんな中、声をかけられた。
「あの、峰田さん。」

声の主は八百万である。

「すいませんでした。」

いきなり、謝られた。

「あんなにもあっさりと負けるなんて。」

どうやら轟との戦いが悔しかったらしい。

え？いや、全然謝る必要ないぜ。作戦通りに事は進んだし。勝ったじゃん。

「ですが……」

あくもしね、自分が弱いなんて思ってるなら違うぞ。轟が異常に強いだだけだ。それに相性とか戦う場所とかで結果は違ってくるしよ。

「峰田さん……ありがとうございます。」

まだ浮かない顔をしてるので更に付け足した。

追い付けないと思うなら、追い付くように訓練すりやいいよ。雄英には訓練場所が幾つかあるし、戦友だからな付き合うぜ！

「戦友……つまりお友達ですの!？」

えっ、あ、はい。

戦友と聞いた八百万の目が輝き出したんだけど。えっ？なにこれ？

「是非とも、今度一緒に訓練致しましょう！」

よ、よろしく。

ちよ、そんなキラキラして近づいて手を取って降らないで。八百万のヤオヨロツパイが揺れ、ち、近い！ちよ、目が離せないから！

……素晴らしいです。

そんな天国を味わってる中で

「おい」

声を掛けられたので振り向いた。轟が立っていた。

「俺と勝負しろ。」

その答えに、自分はしっかりと答えた。

「嫌です。」

自分の即答に轟の表情が凍ったのが印象的でした。

27話

未来とは些細なことで少しずつ変わるもの。

そんな事は色々なアニメや本などを読んで学んでいた。学んでいたはずなのだがねえ。

実際に変わってるなんて、誰も分からないのですよ。だって未来で何が起るなんて誰も知らないわけですし。

・・・自分以外は。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。一言・・・言わせて頂きたい。

「峰田さん！」

「峰田！」

・・・なんでや。

雄英での初めての戦闘訓練を終えた日から轟に毎日

「勝負しろ」

と言われております。

で、自分は断り続けていたのですが根負けしまして。勝負しました・・・トランプで。

轟は不満な顔をしましたが「勝負しろ」と言っていただけで「戦闘訓練で勝負しろ」とは言われてませんでした。・・・ええ、もう本当に不満が顔に出てました。ですが少し挑発したら乗ってきました。結構単純です。結果ですか？

はい、あがり。

「・・・なんで勝てねえ」

轟の負けです。因みに連日トランプで勝負して勝ってます。かれこれ一週間程ですかね。いや、そりゃ勝てますよ。この轟という男は、普段無表情で表情が読みにくいのですが、何故か勝負事になると表情が読みやすい。特に負けそうになると力んでしまうのか唇の端が少し下がる。

さて、そんな表情が出てしまうのにトランプを使うゲームなんてしてたらねえ。普段からアツサリと勝ってしまうのですが、今回の勝負内容であるババ抜きでは楽勝でしたよ。

んじや、終了ってことで片付けをよろしくな。

轟への挨拶もそこそこに自分は教室を出た。そこには矢吹スギルが待っていた。

「あ、終わった？じゃあ行こっか。峰田君。」
おう。

今日の自分達には用事があります。以前から行おうとしていた訓練です。メンバーは自分、矢吹、それから

「もう遅いですわよ、お二人とも。」

ヤオヨロツパイこと八百万です。TDLの前でプリプリと怒りながら待っていたようです。かわいい。

以前一緒に訓練しようと言っていたため、訓練用の施設を調べたところ、TDLが使えることが分かった。さらに調べると予約制になっていたため申請しに行きました。

最初は八百万と二人で行ったんですよ。ところがだ、途中の降りる階段で八百万が転倒し、落ちて行くのを助けようと下にダイブしたら矢吹が現れた。そこからはまあ、察してください。三人で転がったのに矢吹だけが・・・何が『不運（アンラッキー）』だろうか・・・チクシヨーが!!

唯一の救いだったのは、八百万が下敷きになっている矢吹を本気で心配しただけで、イケメンの矢吹の姿を見ても一切顔を赤らめていなかったことかな。

まあ、矢吹もそれを見て感じたのだろうね。後で自分に言った。『は、初めて女の子の友達が出来たかも。』とね。

・・・お前、女の友達いたやろ。えっ？知り合い程度？あつそう。イケメンの思考は、よく分からんな。

そんなこんなで色々あったものの、三人でTDLの使用の許可を申請しに行きました。驚くことに使用は1ヶ月待ちとのこと。マジかよー、とか言ったら近々使用する予定の先輩方から連絡があつて

キャンセルが出たとのこと。直ぐにそこに入れて貰いました。
遅れてスマンです。

「ごめんね、八百万さん。」

というわけで、TDLの前に到着。中に入ると岩場のようなものが出来上がっていた。八百万の話では、セメントス先生って人が『適当に作るね』と言って作ってくれたらしい。ありがたい。

その後は三人で仲良く訓練です。久々に楽しかった。というか、今までエンデヴァーさんの所を借りて訓練していると、一人か峰田父上としかやってなかったからね。濃密だけどバリエーションが無かった。基本は近接戦闘だし、部屋だから飛び道具も少ししか出来なかった。今回は、八百万と矢吹は飛び道具系がメイン。岩場だからサバゲーのようにして訓練が出来た。相手がどのように動くか予想して『もぎもぎ』を置いて罫を張ったり、こちらへ来る道を制限したりとかね。やべー充実してる。

って思った。そのくらい楽しかったのだ。そんな時間も直ぐに過ぎて

「皆さん、そろそろ時間ですよ。」

四角い頭の灰色の肌をした人が立っていた。

「セメントス先生。もうそんな時間ですね。」

あれがセメントス先生か。ビジュアルが覚えやすい。

三人でセメントス先生の前に来ると、セメントス先生は床に手をつける。すると岩場が音をあげながら沈み、岩場だった場所が只のコンクリートの床になっていった。

今日は使わせて頂き、ありがとうございます。

「ありがとうございます。」

「いやいや、学生が頑張ってるのを見ると私も嬉しいですよ。ところで皆さん明日から放課後は空いていますか?」

たぶん空いています。

「そうですね。」「そうだったと思います。」

「でしたら明日から1週間程使いますか?何やら予約していた生徒さん達が、インターンシップに行くことになって使えるようになりまし

たよ。」

マジでか！

自分は他の二人を見ると、二人も嬉しそうな顔をしていた。

よろしくお願いします！

「お願い致しますわー！」「お願いしますー！」

「わかりました。そのように手配しておきますね。では、皆さん明日からも頑張ってください。」

そんな事があって、この日から毎日疲れながらも今まで感じたことのない充実した日々をおくれた。

そんなことを繰り返していたある日の昼、日々の疲れがドッと来たのか眠い。いや、朝から眠かった。正直授業とか何をしたか覚えていない。

「峰田君、眠そうだけどお昼ご飯に行かないの？」

目の前の席の緑谷が声をかけてきた。

ううう無理だなく。寝るわ。悪いけど緑谷が帰って来ても寝てたら起こしてくれ。

「うん、わかった。」

という訳で昼休みは寝た。寝てる最中に何か大きい音が聞こえたので意識を起こそうとするも眠気には勝てなかった。

・・・まあ、問題があったら誰かしら起こしてくれるだろ。

その後、緑谷に起こしてもらい普通に授業を受けた。寝ていたお陰でスッキリとした気分が授業が受けられたし、皆も変わりなく授業を受けていたので、やはり問題は無かったようだ。

それから数日後、

「今日のヒーロー基礎学だが・・・俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見る事になった。内容は災害や水難。他になんでもござれの『人命救助訓練』だ。」

・・・え？

「今回コスチュームの着用は、各自の判断に任せて自由とする。中には活動を制限するようなコスチュームもあるからな。訓練場は少し

離れた所になるのでバスに乗っていく。以上、準備開始。」

いや、え？ちよつと待つて欲しい。あれ？

全員がコスチュームを持って移動した。そして着替えながら考える。私も戸惑いながらもコスチュームを持って移動した。そして着替えながら考える。

おかしくない？委員長を決めるとかやったっけ？飯田の非常口のマーク事件とかやってなくないか？ん〜でも、うっすらと記憶があるような・・・もしかしてあの異常に眠たかった日に全部やった？・・・やべー！だとしたらやべーよ！ヴィランがたっぷり来る『USJ事件』じゃん。自分今回の為に何か用意とかしてないですよ！

一応、USJ事件のためにララさんに元〇玉・・・じゃなかった電氣玉を作つて貰おうとか思つたのに！水にどっぷり浸かつてる奴等なんて、コレで一網打尽ですわ〜とか思つてたのに。

・・・いや、まあいつか。今回は原作通りに動けば大丈夫だな。あくでも、相澤先生が大怪我するんだよなあ。それは避けたかったなあ。でもなあ、ここは大きい事件だから下手に手を出せば、取り返しがつかない位に原作ブレイクしそうだからなあ。

・・・覚悟を決めました。

自分は何もしない！何も考えない！成り行きに任せる！もとい原作の流れに任せる！まあ、元々自分の役目は特に無いからな。初めて緑谷と蛙吹と峰田で組んで船からの脱出くらいなもんで。とりあえず頭皮に激痛を起こしたくないのでバスの中でヒーロー御用達の『携帯食料』を食つておくかね。

自分は更衣室から出て、バスに乗り、

「この付き合いの浅さでクソを下水で煮込んだような性格つて認識されてるのがすげえよ。」

「てめえのボキャブラリーは何だコラ！殺すぞ!!」

という今でも覚えているセリフを聞きながら携帯食料を食べました。食べ終わるとバスが着いたようでした。

「よし、全員降りたら俺に着いてこい。」

相澤先生の言葉でバスから降り、そのまま相澤先生に着いていき、近くのドーム状の施設に入った。

そこにはあらゆるアトラクション・・・ではなく、あらゆる災害や事故が想定された演習場があり、宇宙服のようなコスチュームを着たヒーローが立っていた。

「皆さん、ようこそ！『あらゆる事故や災害』を想定して僕がつくった演習場です。その名も『ウソの災害や事故ルーム』略して『USJ』です!!本日の訓練を指導します『13号』です。どうぞよろしく!」

その後、13号先生が自分の個性と救助訓練に関して説明をしてくれた。

正直、目から鱗です。だって個性が『ブラックホール』ですよ!こんなか救助に向かない個性を救助に使うなんて・・・素晴らしいです。きつと大変な努力をしたんですよ。

「では、皆さん!さっそく演習場に行きましょう。」

13号先生に促されるままに全員がゲートをくぐり、階段を下り始める。

「スツゲー!!」

「うわーリアルな感じがいいなあ!」

「あつ!ねえねえ、あそこの人達が救助役の人達かな?」

などと会話が始まった。

・・・えっ?

階段の下にある中央広場の物陰から数人の人相の悪い奴等が出てきた。相澤先生が直ぐに動いて全員の前に出て確認すると、すかさず首にあるゴーグルを付け叫んだ。

「引き返せ!ヴィランだ!」

全員があまりの事に動くのが遅れた。ちなみに自分もです。ヴィランが来るのが分かっていたのに流れが違うことに体が一瞬動かなかった。

だがそれも一瞬のこと。後ろを向いて走ると

「おっと、反応が早い方が一人いらっしやいますね。ですが逃がしませんよ。」

入り口から声が聞こえ、黒い霧が発生し、自分の足に絡み付いた。「ダメですよ、13号さん。動かないで下さい。この生徒さんは既に

私の個性により半分を移動済みです。この状態で私が意識を失う、もしくは死ねば途中で個性が解除され、彼は下半身を失いますよ。」

ちよっ！なんか原作と違いますけど！人質とか無かったでしょうよ！

「ふむ。オールマイトが居ないようですね。」

「彼なら暫く来ませんよ。」

「おやそうですか。少々お待ちを。死柄木弔、問題発生です。」

黒い霧の人が耳らしき所を手をおいて、死柄木弔に連絡をしている。

「・・・分かりました。では、このまま進めます。皆さん、お待ちせしました。まずは名乗らせて頂きましょう。我々は敵(ヴィラン)連合。僭越ながら、この度ヒーローの巣窟、『雄英高校』に入らせて頂いたのは、平和の象徴である『オールマイト』に息絶えて頂きたいと思つたこととして。」

「なっ！」「はあ!？」

「しかし残念ながら暫く来ないとのこと。では待つ間にあなた方には・・・」

突如、黒い霧の人から黒い霧が勢いよく溢れだし、それがA組の生徒の半数以上を取り囲むように広がった。

「施設内で散り散りとなつて、死んで頂きましょう。」

自分は黒い霧に完全に覆われて浮遊感に教われた。

うわあ、何か気持ち悪い感覚です。まあ、焦ったけどほぼ原作通りに進みそうです。さて、着水準備をします。

直ぐに光が溢れ、目の前には地面が広がっていた。

・・・は？

驚いたがヤバいと思い、咄嗟に『もぎもぎ』を使って着地点に投げ、何とか無事に地面に落ちた。

・・・え？いやいや、地面って！

回りを見ると、人相の悪い方々が囲うように歩いてきた。そして何故かここは岩場であった。

え？ちよつと、コレって？

更に見回すと近くに八百万と耳郎がいました。

・・・なんでや。何故か自分、上鳴のポジションやん。

「峰田さん！」

「峰田！」

少しボーつととしてしまっていたら、目の前には岩が迫っていた。

あつコレ避けれねえ。

思った瞬間、ボゴンっ!!という音とともに岩が壊れた。

「バカ峰田！ボサツとしない！」

「大丈夫でしたか峰田さん！」

ワリい。助かった。

二人が近くに来て自分と背中合わせになる。

「どうする、この状況？」

何とかするよ。

「出来んの？」

とりあえずアレを使うから、その後は二人とも、ちよいと伏せててくれ。

「いつものですわね。分かりましたわ。」

「え？えつと、分かんないけど分かった。」

流石は八百万。一緒に訓練してるだけありますな。耳朗だけは何か分かんずに混乱するも了承してくれた。

いくぜ！君に決めたー!!

自分は『もぎもぎ』に紛れさせている煙玉を数個手にとり、四方に投げる。すると即座に煙が一带に充満した。

「うおお!!・・・なんだ只の煙かよ。」

「おいおい悪あがきは止めろよ。」

「はっ！毒性も無い煙かよ。役に立たねえ個性だな。」

「やっぱガキだな。こんなもの屋外で10秒も持たないぜ!!」

「くはははは！早く女共を好きにしてえ！」

どうやら自分の個性だと思っている奴やら、ゲスい奴がいるようです。

わ。うむ、全く遠慮しなくていいですね。さて、じゃあ本命を投げます
「グレープラッシュ!!!」

28話

どうもこんにちわ。現在戦闘中の峰田実になった青年Aです。戦闘と言っても

「う、動けない」

「むぐぐ」

「取れないぞー！見えないー!!」

「ぬわあくソガキがく!!」

ほぼ終わりました。基本的に煙玉を投げる前にある程度であるがヴィランがいた場所を覚えておいて、そこにグレイプラッシュをしたのですが、何人かが可哀想なことに。

いや、全然可哀想ではないのだけどね。

両目に当たった人が『もぎもぎ』を取ろうとして触ると、手までくっついて慌ててる間にバランスを崩して転がり、地面にあった『もぎもぎ』にくっついて動けなくなったりとかね。

うーん、様子を見てると勝手に拘束されていく。…そうだよねー。人間って気色の悪いものが体に着いたら取ろうとするよね。

『もぎもぎ』の当たったヴィラン達は、それを取ろうとして片腕を拘束されていく。人によっては武器を手放して両手で取ろうとする人までいた。そして取ろうとして取れない。暴れるうちに足元にあった『もぎもぎ』を踏んで動けなくなったりと……。

さて、じゃあ仕上げと逝きましようか！八百万先生、お願いします！

「先生ではありませんが、やらせて頂きますわ。」

八百万は胸から銃を創りだし…あれ？いつもの訓練でのテーザー銃じゃなくショットガンが出てきたんですけど……

「どうかなさいましたか、峰田さん？ああ、コレですか？すいません。ヴィランの方々に固そうな人が多いので。決して女性を軽んじる発言が聞こえたからではございませんわ。」

ああ、そう。ならいいけど。

そんな会話に耳朗が引いていた。

ダメだぜ引いちゃ。だってな、ヴィランは自分達をヤリに来たんだからね。この『ヤ』は、いくつかの漢字に直せちゃう『ヤ』だからね。八百万はショットガンを構え、ヴィランを一人ずつ確実に撃つていく。もちろん放たれる弾はゴム弾ですので、当たり所さえ悪くなければ激痛か気絶で済みます。

「ちよつまゴブっ!!」

「ひ、ヒーローがツフ!!」

「見えないのが恐つがあっ!!」

・・・動けない、もしくは動きが鈍いヴィランを一人一人撃つてくのが狂気を感じるが、八百万の顔は申し訳なきそうにしてるので問題ないだろう。

さて、耳朗さんや。

「えっ、あ、ごめん。な、何?」

いや、そんな慌てなくてもいいよ。耳朗の個性って地面の中って効く?」

「え? ああ、効くと思うよ。地面に潜む系の個性だと耳が良いことが多いし、ウチの音なら結構響くと思うし。」

あ、そう。じゃあちよつと全力で地面に流してみて。岩場とかだと地面の中にもヴィランが居るかも知れないから。索敵とかしなくていいよ。ヴィラン戦は先手必勝だからな。

「なるほど。了解。」

耳朗は耳たぶを伸ばす。

・・・ちなみに技名とかは?」

「今のところウチには無いよ。」

耳たぶのプラグを地面に挿すと、途端に地面から振動が伝わった。暫くすると、ボコツと腕が地面から生えた。

生えた腕に身を固め戦闘態勢をとったが、腕は力なく・・・生えただけだった。

「あ、あれ?」

うわあ、こっわ。引くわー。あれ死・・・

「ちよつと! 峰田がやれつて言ったじゃん!」

うん。そこは認める。だけど、あれは予想外。

「お二人とも、お早く！ヴィランとはいえ人命ですわ！助けなくては！」

何人ものヴィランを撃って気絶させ終わった八百万が、直ぐに動いて今度は胸からスコップを創り出した。

ヴィラン倒すより重労働だなあ。

その後、何とか地面を掘ってヴィランを救出し、更に『もぎもぎ』でヴィラン達を拘束しました。

さて、時間はかかったけど、みんな怪我がなくて良かった。にして上鳴の役に自分になるとは・・・上・・・なり・・・

ぬわー！！！

「ど、どうしましたの峰田さん!?!」

「え、何?!」

いや！何でもない！最初にいた場所に戻ろうか。たぶん皆もそこに来るからさ！

「そ、そうですね。行きましょう！」

「ビックリさせないでよね。」

三人で走り出す。

・・・自分は思い出した。この場面で重要なことを。上鳴が居ないせいで起きなかったことを。

この岩場、確か名前は『山岳ゾーン』。ここでは本来、八百万、耳朗、上鳴が一緒になって戦い、そして最後には

『つか、服が超パンクに・・・は、発育の暴力。』

『また創りますわ。』

つてのがあったのだ。八百万の服が大変になるシーンが!!それが上鳴の・・・あの『うえくくく』が居ないせいで起きなかった。確かに自分には関係ない事だよ。でもね、あったという事実が無くなったのだ。なんたることか!!

しかも!しかもだ!!峰田実が水場に落ち、蛙吹に助けてもらった時は!峰田の頬に蛙吹の柔らかいアレがくっついていたはず!

それが・・・それが全て無くなったのだ!!

おのれ！上鳴！！許すまじ！！

僕は壊れかけた船から飛び出した。

「死ねえええええ！！」

柳が爆発しないイメージ・・・

「DELAWARE！SMASH！！」

轟音と共に水が弾け、湖に穴が開く。

「うおおおお！！」

「つそつ！！梅雨ちゃん！上鳴くん！！」

そこに僕が落ちないように、船に待機していた蛙吹さんの舌が僕の腰に巻き付き回収する。そして血だらけになった手を見ながら上鳴くんが言った。

「カツコいいぜ！緑谷！」

一度弾けた水は元に戻ろうと収束する。そこには水の中のヴィランが含まれている。そして集まって水柱が出来た所に上鳴くんは、身を投げた。

「でもこれなら！俺だってクソ強え！！」

水に飛び込んだ上鳴くんから光が出た途端に

「「ぎゃー！！！！」」

上鳴くんから発生した強力な電気により、水の中のヴィランはまさに一網打尽。全員が感電し、湖の表面でプカプカと浮いている。ただ一人

「うエ~~~~い」

アホになってる人がいる。上鳴くんである。

「あれが上鳴くんが言ってたやつなんだ。」

「そうね。とりあえずもう良いかしら？」

「あ、うん。もう電気は散ったと思うよ。」

蛙吹さんは舌を伸ばし、上鳴くんを回収した。

「それにしても、全員を感電させられて良かった。すごいバクチをしておしまっていた。普通なら念のため何人かは少し離れて配置してお

くもの。冷静に努めようとしていたけど、冷静じゃなかった。危ないぞ、もつと慎重に……」

「緑谷ちゃん、やめて怖い。」

「ご、ごめんね蛙吹さん。」

「梅雨ちゃんつて、呼んで。何にしても、とりあえず第一関門突破って感じね。すごいわ二人とも。」

「あ、ありがとう。あす……梅雨ちゃん。」

「うエ〜い。」

「次は、どうしようかしら。」

「そうだね。とりあえずこの船はもう沈むから、他にヴィランが居ないか警戒しながら泳いで向こうの岸に行こう。それから水辺に沿って広場を避けて出口に向かう。」

「つまりヴィランとの戦闘は避けて、助けを呼ぼうってことね。」

「うん。」

「それでいきましょ。上鳴ちゃんもこんなんだし。」

「うエ〜い。」

その後は、三人で船から飛び出し、作戦通りに動いた。岸にたどり着いて広場の様子を確認すると、相澤先生が敵を大勢引き付けて戦っていた。

「相澤先生が……」

「先生は、僕らを守る為にムリを通して飛び込んだと思う。」

「緑谷ちゃん、まさかと思うけど……」

「だ、大丈夫だよ。邪魔になるようなことは考えてないよ！ただ、隙を見て少しでも先生の負担を減らせれば……」

初戦闘にして、初勝利。これが勘違いだった。僕らの力が敵に通用したんだと錯覚したんだ。ヴィラン。プロの世界。僕らはまだ、何も見えちゃいなかった。

相澤先生がヴィランを圧倒していた。しかし、結果は……

先生は、人の手と思われるものを顔と体に付けている男と交戦する。先生が肘打ちをすると、男が自らの手で受け止めた。

すると、不思議なことが起きた。先生の肘が崩れ始めたのだ。先生は直ぐに離れ、距離を取ると後ろから脳が剥き出しの大男に捕まり、振り回され、圧倒的力に組伏せられ、頭を地面に打ち付けられた。

「……………っ!!」

「ケロ……………」

「うエ〜い。」

肘が崩れる……なんて怖い個性なんだ。それに脳が剥き出しのヴィラン……………力がまるでオールマイイトみたい……………強すぎる……………

手の男が何かに気がつき後ろを向くと、空間から黒い霧が溢れだし、黒い霧の男が現れた。二人は何か話をしていると手の男が

「帰ろっか」

と言った。

「帰……………る?」

「そう聞こえたわ。気味が悪いわ、緑谷ちゃん。」

「うん。これだけの事をしておいて、あっさりと引き下がるなんて……………」

なんだ……………何を考えてるんだ、こいつら!!

この思考が悪かったんだと思う。僕の動きが遅れたのは……………

「まあ、その前に平和の象徴としての矜持を少しでも……………」

手の男は、いつの間にか隣にいる梅雨ちゃんの目の前には来ていた。そして梅雨ちゃんの顔に手を伸ばす。

「へし折って帰ろう。」

僕の脳裏に先生の肘が崩された映像がよぎった。

そして、梅雨ちゃんの顔に手を置かれた。

だが何も起きない。

「本当にかっこいいぜ。イレイっぐっ!!?」

全てを言い切る前に手の男が横に飛んでいった。何かの衝撃によりブツ飛ばされたのだ。

僕は何が起こったのか把握しきれずにいると

「女の顔に!何しようとしてんだ!」

僕の尊敬する人であり、特徴的な頭をしている人が目の前に……………

「女の顔はなあ！女の命なんだぞ！このクソガキが！！説教してやる！！
かかってこいやあ！！」

あれ？いつもより背が高いよ!?ダレ!?

29話

「という訳で、『ショック吸収』の男を探したいから適当に未来を見てくれ。」

「いつも通り馬鹿なのだな。お前は。」

「どうもこんにちは。峰田実の父です。ヒーロー名は『ザ・チェイサー』です。よろしく！」

今は未来が見えちゃうヒーロー『サー・ナイトアイ』のナイトアイ事務所に来てます。いやー久々に会うわあ。このオールマイルト大好き馬鹿に。

「以前も言っただろうが。お前のはバグが多くて見たくないとな。それと私は確定している未来を見ているだけだ。」

そうなんです。よくわからないがこのオールマイルト大好き馬鹿は、未来を映画のフィルムのようにした映像で正確に見れるのだが、俺の未来は映像が歯抜けになったり、過去を見てしまったりするようですよ。・・・過去って予知じゃないからね。だからこそバグなのだろうが。

「いいから見ろよ。ちょっと捜し物が多くてよお。色々めんどくさいんだよう。確定してても捜せたか捜せてないかでモチベーションちやうやんか。」

「足にすぎり付くな。お前のような奴を見るだけで24時間使えなくなるなど、時間をドブに捨てるようなものだ。」

「何とも酷い言われよう。・・・しょうがない奥の手だ。」

「昨日、八ぎ・じゃなかった。オールマイルトから連絡があつてな。家に来たいんだとよ。」

「だからなんだ。」

「プライベートなオールマイルトを撮影してもいいぞ。」

「お前は、本当に馬鹿なのだな。」

「おりよ？話に乗ってこないとは。本当にオールマイルトとの仲は決裂したのか。」

などと思っていたらサー・ナイトアイが手を出してきた。

「さっさと手をだせ。映像プラスそれなりの代金で手をうってやる。」
「あっはい。」

うーん、オールマイト大好き馬鹿は健在だった。

俺が手を出すとサー・ナイトアイが手を繋ぐ。途端に苦しみ出した。

「あつ、やっぱヤバいんだ。」

「ぐう、なんだこの細切れの映像は。む、これは!!」

「どした!?!」

いつも人の前では冷静なサー・ナイトアイが大声を上げるのは珍しい。

「今すぐ雄英高校に行け!」

「なんで!?!」

「オールマイトがカッコいい。」

「おい、ふざけんなよ。オールマイト大好き馬鹿。」

結構真面目に心配したのが無駄だったよ。

「ちなみにオールマイトは戦っていたが、相手はショック吸収の個性を持つている男だったぞ。姿は違ったがな。」

おっと、真面目な話だった件。・・・っえ?

「は?何を・・・いやいや、まさかだよな?」

「ヴィランの襲撃のようだったな。『ショック吸収』など、珍しいからな。例の男が関わっているか、それとも意思を継いだものがいたのか。」

「マジかよ・・・最悪だな。行ってくる。」

「待て、チェイサー!」

「なんだよ!急いだ方が良いんだろ!?!」

部屋を出ようとする俺にサー・ナイトアイは声をかけ、高そうなカメラを投げ渡した。

「オールマイトをよろしく。さっき言った代金はそれでいい。」

つまり戦っているのを撮れっつてか。馬鹿の極みだ。だがまあ、この余裕。見た予知の結果は勝ったつて事だな。

「いい映像だった場合は、プラス査定でよろしく!」

部屋を出た俺は、とりあえず雄英高校に連絡をする。だが繋がらない。

「電波干渉かよ。警察は・・・繋がらない？俺のウチは・・・繋がらない。クソっ！ここに来て雄英の近場つてのが仇になったか。随分と本格的だぜ。」

あの辺一帯での連絡を不可にしたか。こうなると近場のヒーロー事務所にも連絡が繋がらないようにしてるだろうな。車でブツ飛ばせは30分・・・やったるよ。間に合わせたるわい!!

「と????????????????????
という経緯があつて今の俺はここにいる。」

いや、何を言っているのか分からない。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。『山岳ゾーン』を抜け出し、警戒しながらも走って広場に來たのですが、着いたら既にオールマイトが脳無と激しく戦っていた。

それを見る死柄木が・・・えっ？何で顔の手とか取れてんの？顔が微妙に腫れて頭から血が出てますやん。こんなシーンあったっけ？

疑問があつたものの、死柄木の様子はさておきオールマイトと脳無の殴りあいが激しさを増していく。殴りあう度に凄まじい風圧が発生して誰も近づけない。そしてそれを何故か峰田父上が高そうなかメラで撮影していた。

うおおお!?拳の風圧!?拳圧つてやつが凄いですけど!?

「おいおい、この程度で体をふらつかせるなよ。情けない。」
はあ!?

見ると峰田父上は、この風圧の中でも一切ふらつくことなくカメラを回している。

くうっ!マジかよ。悔しいんですけど!!

「あ、ちよつと黙ってて。いい感じだから。あと、お前もちゃんと見とけよ。」

あんた何なの!マジで!!おごごう!?

更に両者が真つ正面から殴りあう。ぶつかり合う拳で、どんどん風圧が増していく。目が開け難い状況になるが何とか見ようとすると、オールマイトの声が聞こえてきた。

「個性が『ショック無効』ではなく『ショック吸収』ならば限度があるんじゃないか!?!」

オールマイトが殴られながらも殴り返し、

「私対策・・・私の100%を耐えるなら・・・」

ついに脳無を押し始め、

「更にも上から振り伏せよう!!」

血を吐きながら、今では完全に押し込んでいる。

「いいか息子よ。ちゃんと見とけ。ありやデタラメに拳を出してるわけじゃねえ。一発一発に魂を乗せてる。あれが最高のヒーローの拳だ。」

峰田父上が言っていることがよくわかる。自分はそれを見ながら震えが止まらない。これがヒーロー!!

オールマイトが声をあげる。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの!!」

拳が脳無の腹に突き刺さり、『ショック吸収』では耐えきれなくなり空中へ舞う。それをオールマイトが飛び越え、脳無を抱え、地面に叩き落とした。

「ヴィランよ!こんな言葉を知っているか!!」

脳無が為す術もなく地面に叩きつけられ、体が跳ね上がる。そこにオールマイトは

「更にも上からへ!Plus!!Ultra!!」

最後の拳を叩き込む。その拳は輝くが如く。まさに渾身の一撃。受けた脳無は凄まじい速度でドームの天井を突き抜け、飛んでいった。

これが・・・これこそがNo.1ヒーロー『オールマイト』
脳無との激戦。終わってみればオールマイトの圧勝だった。

肩で息をしているオールマイトに峰田父上が近づいていった。

「ふむ、ちつとばかり衰えたな。」

「やあ、チエイサーくん。久しぶりだね。ハッハッハ！確かに衰えたかな。全盛期だったら5発で充分だったのにね！300発も打ってしまったよ！」

「そうか。まあ、ご苦労さん。さて、続きはやるのか？しm・・・死柄木つてのと、黒霧つての。たった二人で。」

残ってる二人に対して峰田父上は言った。その言葉に死柄木はヤル気を見せたが、黒霧は死柄木を制した。

「死柄木弔、さすがに無理そうですよ。」

「ああ!?なんでだよ!!」

「応援が来たようです。」

黒霧がUSJの入りを指差す。そこには

「応援を連れて、ただいま戻りました!!」

A組の委員長である飯田と雄英の先生達が並んでいた。それを見た死柄木はヤル気を削がれたようで、落ちている手を拾いながら

「あーあ、もう来ちゃったか・・・ゲームオーバーだ。帰って出直すか。

黒霧。」

などと言い、黒霧が空間に黒い霧を発生させ、二人がそこに入っていく。

「今度は殺すぞ。平和の象徴『オールマイト』。それとそこの『チエイサー』もだ。」

そんな捨てゼリフを死柄木は残していった。

「うむ。ザが抜けてるな。」

結構怖い人達に凄いこと言われたはずなんですが、峰田父上は軽くしか受け取っていなかった。豪胆である。

「さて、終わったし帰るか。」

え?もう?!

「おう。もう用は終わったからな。一応前に頼まれてた仕事のヒント

も見つかつたし。何より、これから警察も来るからな。事後処理がめんどくさい！」

そうすか。あ、峰田父上。

「なんぞ？」

あとで撮影データのコピーをお願いします！

「なんだそんなことか。既にコピー済みだ。ほれ。」

峰田父上は、マイクロなチップを三つ投げてよこした。

??何故三つ??

「二つ目はお前用、てゆうか俺ら家族用な。二つ目はお前のクラス全員で見とけ用。三つ目はオールマイトの弟子に渡しとけ」

・・・え？

えっと、どういう事?もしかして知って・・・

「つて、俺の父上様が言っていました、と言つてオールマイトに渡してこい。」

うおうい!焦ったー!!めっちゃ焦ったよ!

『ワン・フォー・オール』の秘密とか知ってるのかと思つたよー!!

「なんだよ、どうした?」

いや、何でもないっす!お仕事お疲れ様でした!

「変なやつだな。まあいいや。じゃあなく。」

手をヒラヒラさせて帰つていった。

さてと、じゃあ自分は・・・よし、皆に声を掛けよう。

「おおーい!みんなー!!さつきオールマイトが闘つてた映像が手に入ったからよ!明日の朝!ホームルーム開始の30分前から教室で上映会したいんだけど!どうよ!!」

この声に皆が賛同した。

だが残念ながら『USJ事件』の次の日は、臨時休校となつてしまつたため、さらに次の日になつたが全員が来て教室で楽しみました。いやー、轟と爆豪まで居たことに驚きでした。

そして助けを呼びに行つていたため、オールマイトの闘いを一切感じることも出来なかつた飯田に泣きながら感謝された。

ちなみにこのデータが入っているマイクロなチップは、何故か他へのコピーが出来なかった。

どうしようかとなったら、これは『A組の宝物』扱いにしようとなつたのだが、誰が保管するかで争いになったのは言うまでもない。

30話

よし、今度の体育祭頑張るぜ！

「は？お前、体育祭頑張るつもりなの？」

スカウトが見てるんだから頑張るよ。駄目なん？

「いや、別に良いんだけどさ。仮免試験の時に苦労すんぜ」

・・・仮免って何？

本当に何それ？原作に出てくんの？期末試験までしか知らないからなあ。あの後で何かあるんか？

「ん？緊急時においてのみヒーロー活動していい免許。本格的にヒーローとして動くには免許が必要だろ。その前段階だな。高2での取得を目指して勉強やら演習とかするけど、雄英も2年のときにやるはずだぜ。」

はあ、なるほど。で、なんで頑張っちゃ駄目なん？

「頑張りすぎると対策されるぞ。1年かけて研究される。仮免試験では必ず戦闘でのテストがあるからよ。」

なんですと？

「まあ、俺が受けた時は雄英生だけ狙い撃ちされてなあ。フルボッコだ。」

はあー!?マジですか!?えっじゃあ、雄英の先輩達ってどうやって切り抜けてんの？

「更に向こうへ！Plus！Ultra！」

つまりは実力かあ・・・怖い・・・あれ？雄英が狙われるとか何でそんなこと知ってるの？・・・あつ、狙った側か。

「おいおい、失礼だな。狙われた側だよ。俺は。」

・・・峰田父上がまさかの雄英卒業者だった件。もう何を信じていか分らない。こんな女好きが雄英卒とか。

「お前が言うのか？」

・・・え？

峰田父上は携帯を操作すると、いつかのピンク髪の女の子を助けた日の写真を見せてきた。

・・・申し訳御座いませんでした。
土下座したのは久々です。

とまあ、これが先日の家での会話でした。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。現在は放課後。朝は相澤先生から『雄英体育祭』の話を告げられ、クラスで「クソ学校っぽい来たああ!!」とか、はしゃいでました。

自分もね、何だかんだで2週間ちよつとですからね。楽しみにしてたのですが先日、峰田父上から聞かされた話でヤル気が削がれました。

それを轟とトランプしながら話したんですが

「蹴散らせばいいだろ。」

とのこと。・・・そりゃねえパワーある人はね、それで良いですよ。自分の場合、対策されたらアウトですよ。

とにかく、そういうわけだから体育祭では上位に行く気はねえからな。自分は技巧派なの。仮免で戦闘があるからには手の内を見せたくないんだよ。轟みたいな圧倒的にパワーあるやつは見られても対策しようが無いから良いけど、自分みたいな技巧派はバレたら対策がとられやすいんだよ。

「バレてもお前なら仮免試験くらい通るだろ。」

えええ、何その信頼やだー。・・・あつ、そうだ。ここは、誰かさんに任せよう。

自分は、ヴィランを退けたAクラスを見に来たヤジ馬と爆豪とのやり取りを心配そうに見ている緑谷を指差し言った。

自分なんかより緑谷と戦った方が苦戦すると思うぞ。

・・・スマン緑谷。だがこれで色々修正出来るはず。

原作なら轟とトランプとか峰田はしてないはずだからね。もうね、毎日トランプでの勝負がめんどかったのよ。これで轟の興味が自分から緑谷に変わってくれたら・・・

「そうか。それより早く見せる。俺はスリーカードだ。」

そう願って緑谷の名前を出したのだが無駄だったよ。もう自分に

勝つことしか見えてないのだろうか？

はい、自分の勝ち。フルハウス。

「・・・なんで勝てねえ。」

今日も勝った。・・・あ、これが駄目なのか。でもなあ、わざと負けるのも嫌なんだよね。轟よ、俺に勝ってくれ。

そう思った放課後だった。

あれから約2週間。明日は『雄英体育祭』。

この2週間で色々あった。印象的だったのは再度行つた『救助訓練』でしょうか。

「今日は、この前行えなかった『救助訓練』ですわね。頑張りましょう、峰田さん。」

おう。八百万もな。

この『救助訓練』は『USJ事件』で行えなかったことをするらしい。自分のようなパワー無しの個性が役に立つ訓練である。

だが訓練途中で、マスクを着けた筋骨粒々でトゲトゲしい肩パットをしたヴィランの襲撃に会いました。

そいつは、Aクラスで最強である轟を荷物のように持ちながら現れたのです。

「クラスで1番のが！マジかよ!?!」

「そんな・・・」

「早く先生に連絡を！そして避難するんだ!」

ゆっくりと歩いてくるヴィランの姿は、強者であることが窺えた。

「逃がしやしないさ。全員まとめて死にな!!」

ヴィランは足を振り上げ地面を蹴りつけると、その場に円を描くように数十メートル分のコンクリートが剥がれ飛んだ。

ただ自分は気がつきませんでした。・・・声で。そして自分は

あれってオールうううわあああああ!?!

「峰田くーん!?!?」

オールマイトじゃない?と言おうとしたのですが、オールマイトと思われるヴィランと目が合った瞬間、ヴィランが自分に向け、拳を

放った。その拳は、えげつない風圧を生み出し、自分は・・・ぶっ飛びました。

・・・酷くない？

ぶっ飛んだ先から何とか帰ってきたら、爆豪がヴィランを爆殺しようとしてました。ならばと思い、ヴィランが飛ばされる先を予想し、自分は『もぎもぎ』を大量に投げた。

「死ねええええ!!」

爆豪の攻撃は見事にヴィランを捉え、ヴィランは飛んだ。そして先にある『もぎもぎ』付きの壁に激突。ヴィランは動けなくなつた。

「これは峰田くんの一あつ、峰田くん！無事だったんだね!!」

指の怪我をしている緑谷が嬉しそうに此方へ来た。

おつす。皆無事でなによりだ。

決着はついた。

その後、動けないヴィランにとどめを刺そうと爆豪が近づくとヴィランは首だけ動かし、なんとかマスクを取って

「わた、わた・・・私が出来たー!!」

と、言つてオールマイトが・・・。何やら今日のコレはサプライズとか言つております。だが、それを不満そうに聞き、無言のプレッシャーを放つ生徒達に耐えきれなかつたようで

「なんか・・・すいませんでした。」

「二やり過ぎなんだよ!!オールマイト!!!」

最後は、ぐだぐだだったが無事に『救助訓練』が終わつて良かったです。

え？訓練中の八百万ですか？ええ、もう本当に

「立派。」

でしたよ。うん。彼女は素晴らしいモノを持っていますね。心も・・・カラダもね。将来が楽しみです。

・・・おっと、何故かヨダレが。

31話

花火がなっております。今日は『雄英体育祭』。

いやー嬉しいものですね。何よりも本番直前にA組の控え室で

「お前には勝つぞ。」

「僕も本気で獲りに行く!」

という轟と緑谷のやりとりが聞けたことです。もうね、本当に良かった。ただ一つ懸念が。轟に

「峰田。お前は本気を出せ。」

と言われたことです。あーこの子、本当に人の話を聞かない子だと思ひ、返答として苦笑いしとききました。

どうも、おはようございます。峰田実になった青年Aです。うーん、仮免試験の事を考えると、自分やる気がありません。それなのに祭りに参加しないといけない状況とか・・・既に眠い帰りたい。

そんな思ひとは関係なく『雄英体育祭』は進行していきます。

第一種目は障害物競争。

眠いと思ひながら、ふらふらとスタート位置に歩いて行きます。

「あ、峰田く・・・」

うん? 誰かに呼ばれた?

誰かに呼ばれた気がするも、ふらふらと歩いていたらせいでバランスを崩し、人にぶつかり仰け反りながら自分は後ろにいた人の背中に頭をくつつけてしまった。と、同時に

『スターーーーーート!!』

わお、始まったし。って、こいつ足はええ!

自分は、くつついた頭を剥がす暇もなく足は空中に投げ出され、後方に人の固まりが見える。何故か女子の固まりが・・・。

不思議に思ひも、急に異常な冷え込みが起こり、眠かった意識が晴れたため、誰の背中に張り付いているか確認した。

マジかよ。

「まさか、こんな手を使うとはな。」

自分、まさかのスタートと同時に轟への寄生プレイです。

「俺がスタートして直ぐに道を凍らせると予測しての行動か。流石だな。」

「・・・違う。全然違う。知ってはいたけど、こんなことをする予定ではなかった。」

そんな事を思っていると後ろの集団から

「甘いわ、轟さん！」

「そう上手くいかせねえよ半分野郎!!」

「つぶな」

「二度目はないぞ」

A組の面々が集団から抜け出し、姿を現した。

結構読まれてたみたいだな。

「そうみたいだな。」

さて、これからどうしようか。ぶっちゃけ走りたくない。・・・あつ、

自分このままで良いじゃん。ならば・・・

じゃあ後よろしく。

「なに?」

自分は仮免のために手の内を見せないって言ったろ。だから後は任せた。運んでくれ。

「ふぎけるな。」

じゃあここで下ろしてっていいよ。どうぞ熱(ひだり)を使って『もぎもぎ』を焼いてくれ。

「戦闘に於いて熱(ひだり)は絶対使わねえ。」

別に今は戦闘じゃないじゃん。

「うるさい。・・・いや、わかった。運んでやる。」

あらやだ。怖い。

突然の変わり身に自分は警戒する。轟は言葉を続けた。

「無事にこの予選を通れるかは・・・峰田、お前にもかかっただ。はい?」

と言ってる間に、後ろから声がする。正確に自分が轟の背中にくっついているため、自分の真つ正面であり少し上からなのだが、やたら

とドスイ声が聞こえ爆豪が降ってきた。

「死ねえええ!!」

いや、襲ってきた。このまま来れば、自分達への体当たり直撃コースです。

ちよっ!?

自分は慌てて轟とくつついている『もぎもぎ』以外の『もぎもぎ』を手に取り爆豪に投げる。

「邪魔だあ!!」

爆豪は手をかざし『もぎもぎ』を爆破で払った。そのため、爆風が発生し横へと逸れ、不格好な着地をした。

うわあ、痛そう。

「そうだな。だがまあ、こーこういうわけだ。」

なるほどね。自分は轟にとつての盾か。今すぐ離れよう。

「今から離れたところで・・・」

「待てコラ!!」

「アレが来るぞ。」

わあ、進むも地獄退くも地獄ってやつかあ。・・・うん、やっぱ即逃げだな。で、早々にコースから逸れて失格になってしまおう。

脱出!

「そうはいかない。」

へ?つつめつつたい!

いつの間にか自分のジャージと轟のジャージが水で一体化していた。

「何だかんだで逃げると思った。」

くう!いつから自分の考えが読めるように!

「普段のトラップで。」

何気に観察されてたんだな自分!

「二人ともまとめて死ねえええ!!」

「さあ、俺を守れ。」

ぬあー!!!久々にハードモードだ!チキショー!!

自分は叫びながら向かってくる爆豪に『もぎもぎ』を投げ続けた。

「個性は使わないようにするんじゃないのか？」
おまつ!?!爆豪が怖いんですもの使うわ!!

『さーて、そろそろ第一関門だー!!』

プレゼントマイクの声が聞こえた。

なるほど。緑谷が過去を思い出しながら『どうする』的なことを言ってたところですね。アレは見てて楽しかった。……自分、生で見たかったなあ。

第一関門のoppヴァイランロボが居るのを感じる。うーむ、見えないけど圧を感じる。しかし、

「……」

轟は何も言わずに速攻で入試試験で使われたoppロボットを氷漬けにして突破した。本当に轟が強すぎてヴァイランロボが雑魚に思えます。

『おいおい！第一関門はチョロいってよー！じゃ、第二関門はどうだー!?!』

第二関門のザ・フォール。いくつもの岩場があり、その間を一本のロープで繋げている。所謂、綱渡りをしないと向こう側に行けない状態である。揺れてるからバランスも大事である。

「ふっ。」

息をはき、一拍置くと轟の足元から氷が伸びて張られているロープが凍っていく。

「揺れねえならただの細道だ。」

轟は走り出し、凍ったロープを難なく渡る。

……コイツのバランス感覚がおかしい。どんな身体能力してんだよ。

『さあ、早くも最終関門！その実態は一面地雷原!!』

最終関門、地雷原。一応、ちゃんと地面を見てれば何処に地雷があるか分かる仕様になっている。

「なるほど。先頭にいる奴ほど不利になるのか。」

さすがの轟も走るペースは落ちた。そんなところに

「はっ！俺には関係ねえええ!!」

爆豪が雄叫びをあげながら迫ってきた。

「峰田。」

はいはい。

自分は『もぎもぎ』を爆豪に投げつけた。

しかし、当たらない。いや、一つ当たったが即爆破され、燃えつきてしまった。効果はいまひとつのようだ。

「全部聞こえてるぞ。真面目にやれ。」

おっと、言葉に出していたらしい。失敗失敗。

「なめてんじやねえええ!!」

そんなやり取りを聞いてか爆豪が地雷原を飛びながら近づく。そして轟&自分を抜いた。抜いてそのまま行ってしまうかと思いきや、戻って轟の正面から襲ってきた、

「てめえ！宣戦布告する相手を間違えてんじやねえよ!!」

正面から爆破しようと手をのばす爆豪に、体を反らして回避する轟。

いや、今行けば1位を取れたんじや？

「潰して取らなきゃ意味ねえだろうが!!」

ええええ、好戦的すぎるう。・・・あつ。

自分の視界に、後ろの方で緑谷が地雷を掘り返し終わってるのが姿が見えた。

あーそろそろかあ。お二人さん。

「ああん!？」

「なんだ。」

耳を塞ぎな。

自分がいうと後方で爆発音が鳴り響く。

ただそれは異常にでかく、轟と爆豪が振り向き確認すると大きな砂煙が舞っていた。さらに驚くべきは砂煙から勢いよく緑谷が何かの板に乗って飛び出し

『おつとー!!緑谷、爆風で猛追!!つか、抜いたー!!』

そう、轟と爆豪の頭上を飛んで抜いていった。

轟と爆豪は反応が早く、争いをやめ、

「デク！俺の前を行くんじゃねえ!!」

「後続に道を作っちゃうが後ろを気にしてる場合じゃねえな。」

爆豪は爆破の力で飛び出し、轟は水で地雷原に道を作り走り出す。そして二人は直ぐに緑谷に追い付いた。

二人とも動きが速い。勢いが無くなったとはいえ、飛んでる緑谷に追い付くとか、ドンだけ速いんだ君ら。とツツコミを入れたい。

などと考えていると緑谷と目があつた。だが緑谷が泣きそうな目をして顔を伏せた。

自分は察せた。自分と会った時に泣いた程だ。分からないが峰田実という存在に思うことがあるのだろう。そのため、緑谷は今からやることに迷いが出たようだ。

「緑谷！」

咄嗟に自分は言葉が出た。そこでまた緑谷と目が会う。

「やれ!!」

自分の言葉に緑谷の泣きそうだった目が決意の目になる。緑谷は空中で一回転をし、持っていた板を地面に叩きつけ地雷を爆破させた。

そこからは皆さんの知ってる展開だろう。

『序盤の展開からこの結末を誰が予想できたー!?今、一番にスタジオムに帰ってきたその男お!!緑谷出久の存在をー!!!』

スタジオムから歓声が聞こえる。

どうやら無事に一位をとってくれたらしい。よかった。よかった。

自分は何処にいるのかって?・・・地雷原終わりのところで動けません。何故かって?轟のヤロー許すまじ。アイツ、緑谷の一回転アタックの時に爆風に対して背中を向けやがりました。そうなる必然的に自分もろに爆風を浴びるわけで。しかもその際、ジャージ間にあつた氷が剥げたようで轟と離れまして。そのままアイツだけ走って行きやがった。

爆風は大したことないって言ってたけど、複数同時爆破のうえ、もろ浴びですからね。辛い。もう動きたくない。

「あら？峰田さん？」

「峰田くん、どうしたの？」

あく、八百万に矢吹だー。おっす。事情的には……
自分は簡単に経緯を説明した。

「じゃあ、怪我人じゃないか。僕が背中に乗せていくよ。」

「いえ、矢吹さん。ここは私にお任せください。」

「そんな、女の子にやらせるわけにはいかないよ。」

「いえ、あの、言いにくいのですが……」

八百万が少し言いにくそうにすると何処からともなく

「きゃー!!」

女子が降ってきた。そしてそれを矢吹が綺麗にキャッチする。

「分かって頂けましたか？」

「……うん。」

ここでは『不運（アンラッキー）』の率が高いようです。

その後、八百万の背中を借りて、三人でゴール致しました。ゴールでは緑谷が待っていました。どうやら自分にお礼を言いたかつたらしい。そんなお礼も謝りの言葉もいらんし。とりあえず、特にトラブルもなく終わってよかった。

……はて？トラブル……体育祭……あれ？何かあった気がしたけど……なんだっけ？

……で、今ごろ息子はどうしてるかねえ。
……少し遠くを見つめながら思う。

今日も朝から捜していた。相手に付けといたマーカの反応が、一瞬で別の場所へと転々と動いくので面倒なのだ。移動前に反応のあった場所へ行ってみるも、ショッピングモールやらレストランやらと問題のない施設ばかり。

うーん、やっぱヤツが関係してるなあ。俺のことも分かってるみたいだし。完全に拠点には何かしらの妨害要素がありやがる。……面

倒だ。

だがヤツが相手なら諦める訳にもいかず捜し続ける。

「待てー！」

どこかで声がした。声の方に向かうと忍者っぽさを感じる怪しい男とすれ違う。そしてそれを追うヒーローが走ってきた。鎧のようなコスチュームを着ていて見たことのあるヒーローであった。

「あく陰ゲじゃん。」

「その呼び方やめて頂けますかチェイサーさん!!ちゃんと『インゲニウム』でお願いします!!」

俺の言葉によって、ヒーローは追いかける足を止め抗議をしてきた。彼はターボヒーロー『インゲニウム』。確か個性は『エンジン』だったな。

「まあ良いじゃねえか。ちよつと発音がおかしいだけだろ。」

「チェイサーさんが言うのと発音だけじゃなく、何か違うように感じるのですよー!!って、急がないと!!」

インゲニウムは先ほどの男を思いだし、再び走り出した。俺はその背中に言葉を投げる。

「さっきの男ーありや誰だ?」

『『ヒーロー殺し』です!』

おっと、それなりの名前が出たねえ。

俺はインゲニウムの背中を見送りながら携帯を開いて『『ヒーロー殺し』の記録を検索した。すると、ヒーロー殺しというだけあって10人以上のヒーローが殺されていた。

最悪な話、ヤツが関わっていてもおかしくはない。俺も追うか。一応、通報してつと。．．．よし、行きますか。

．．．
．．．
．．．

インゲニウムに付けたマーカールを追跡し、路地裏まで来ましたが

「ハア〜．．．『ザ・チェイサー』か。」

呻き声を出し倒れているインゲニウムを『『ヒーロー殺し』が踏んで

いた件。

なんか『ヒーロー殺し』が俺の名前を知ってたんだけど。こつわあ
い。それと・・・コラー！陰ゲ！はええよ！追い付いたと思っただら倒さ
れてるって、どういうことじゃい!!

「んん、とりあえずその踏んでる陰ゲから離れて貰おうかね。」

「お前がヒーローなら・・・救ってみせろ。」

「俺ヒーローじゃねえし。」

「・・・」

「あれ？知らんの？俺つてば随分前に引退してっぞ。」

「・・・」

いや、黙らないで欲しい。名前知ってるくせにプロヒーロー引退し
てることは知らなかったん？それにしてもなあ倒せそうだけど、めん
どいなあ・・・他のヒーローと警察が来るまで時間稼ぎしよつと。

「何でヒーローを目の敵にしてるか分からんからさく。お前の話、聞
かせてくれや。」

32話

まったく、これはイカンですなあ。

「予選通過は上位42名。残念ながら落ちちやった人も安心しなさい！まだ見せ場は用意されてるわ！」

18禁ヒーローは目に毒です。・・・素敵です。

どうも、こんにちは。峰田実になった青年Aです。流石に詳細なメンバーは覚えてませんので何とも言えませんが多分原作に近いメンバーなのでしょう。上位42名の名前がモニターに映し出されております。

「さくて、第二種目よ!!」

名前を出していたモニターは切り替わり、次の種目が判明する。

『騎馬戦』よ!」

ミッドナイトは騎馬戦の説明を始めた。

2〜4人でチームを組み、第一種目の成績によって各自に振り分けられたポイントを奪い合うとのこと。崩し目的の攻撃不可。

振り分けられるポイントは42位が5P。そこから順位が上がるに連れて5Pずつ増えていく中、

「上位の奴ほど狙われちゃう下克上サバイバルツ!これぞ『Plus

Ultra』!予選通過1位の緑谷出久君!!持ちポイント1000万!!」

「1000万?!?!」

全員の視線が緑谷に集中し、緑谷は冷や汗を流す。

1位はバラエティー番組でお馴染みの一発逆転方式が可能となっている1000万。・・・御愁傷様です。だからお礼も謝りの言葉もいらなかったんやで。

ミッドナイトの説明が終わると、全員がチームを組むために動き出す。当然自分もです。とりあえず

よう、矢吹。自分と組まないか?

「峰田君!・・・ありがとう。でも、ごめんね。僕の個性で迷惑をかけ

ちやうから、僕は他の人と組むよ。ちよつと色々な意味で組みたい人もいるし。」

えく、断られた。断られると思わなかったです。理由としては自分に迷惑だからってのは分かった。だが、いつもの矢吹にしては黒い表情をしている気がする。

残念だな。ちなみに組みたい人って？

「物間って人だよ。」

・・・把握した。原作では人を煽ることを得意としてたキャラだ。あの温厚な矢吹が、ちよつとオコだよ。何があったのやら。

なるほど、了解。んじやまたな。

「うん、またね。あ、そうだ。峰田君。B組のみんなに気をつけてね。」

おう、分かった。

自分の返事に、矢吹は満足して物間のいる場所へ歩いて行った。

矢吹と別れた自分は考える。さて、どうしたものかと。そんな自分に声をかける人物がいた。

「峰田・・・俺達と組んでくれ。」

「ケロ。」

障子と蛙吹である。

声かけてくれてありがとな、よろしく頼むよ。ところで何で自分なんだ？

「峰田には敵の動きを封じて欲しい。その間に蛙吹がハチマキを取る。俺は二人の騎馬だ。」

マジか。二人も乗つけて走れるんか？

「任せておけ。」

正直、ここ最近の出来事から『原作の流れとか無理かなあ』って思っていました。・・・何もしてないのに原作の波が来てくれた。ありがたい。乗つかるぜ！このビックウエーブに！！

「本格的な作戦を決めよう。峰田は何かあるか。」

んく自分のには、残り時間が少なくなるまで目立つ行動は避けたい。これには最初が肝心だ。騎馬戦が始まったら、わざと点を取られ

て0点にならなきやダメなんだ。

「何故だ。」

みんなの視界から消えて、隠密行動をするためだ。

「どういうことかしら？こんな開けた場所じゃ、どうしたって見えちゃうわよ。」

そうだな。だけど、0点になっちまえば目立たなくなれる。みんな次のハチマキを取りに行くからな。更に、この場で条件が揃ってるから出来ることだけだな。

「条件？」

上位の奴等の個性のお陰だ。

「・・・そうか。高得点持ちには、目立つ個性が多い。参加者の目は必然的に上位に目がいくのか。」

実質、1000万点の争奪戦だ。爆豪、轟が緑谷を狙うのは当たり前。更にその三人を狙う全員の参加者。普通の騎馬戦ならハチマキ取られりや終わりだけど、変則の騎馬戦だから崩れない限り戦えるし、崩し目的の攻撃はダメって言ったたからな。最初に0点になれば、後は絶対に狙われない。

「じゃあ、最後の方で点数が重なったところから奪うのね。」

そう、それ。奪うにしても目立たないように動こう。真っ正面から上位陣と戦うとか無理だから。まあ、実際そんなトントントン拍子にはいかないと思うけど。

「作戦としては不安なところがあるな。」

「でも、私達には良い案がしてきたわ。」

別に自分の案なんて気にしないで良いぜ。

「いや、それでやってみよう。上手くいかなかったら臨機応変でいこう。」

うつつ。よろしくな。

「ケロっ。頑張りましょ。」

障子と蛙吹には悪いが・・・自分の華麗なる負けるための戦いが今

！始まる！！

なんで負けるのかって？・・・いや、原作でも負けてたしき、負け
ないとトーナメントでバトルしないとだから。そんなのイヤですか
らね！！

困????????????????

困った。色々困った。俺こと『ザ・チェイサー』は路地裏で『ヒー
ロー殺し』と対面中だ。

さて、どうしたもんか。警察もヒーローも来ないぜ。

それにしても「お前の話、聞かせてくれや」と言つた身として困惑
するよ。本当に話をしだすんですもの。「素直か！」つてツツコミを
入れそうになった。しかも言うことが微妙に分からんでもない。

「本当のヒーローはオールマイトの様に、強く気高い精神を持つもの
だと。つまり自分より弱い、顔売りたい、ヒーローらしくないよう
なヒーローは失格。そんなヒーローの数を減らしたいってことか。」
「そうだ。」

んく本当にねえ、言いたい気持ちは分かる。正直コイツがメディア
に出て、この考えを主張したら個性をもて余している不良もどきが
ヴィランとして活動するかもしれん。

「つまり、俺に負けたコイツもヒーロー失格だ。」

ヒーロー殺しは、足元にいる陰ゲ（インゲニウム）にナイフを向け
る。

「待った。お前の言いたいことは分かった。だが俺の話も聞いて貰お
うか。」

「時間稼ぎには乗らない。」

「なんだ、バレてるんか。だけど、ちよつとは俺の話も聞けよ。どうせ
逃げきる自信はあるんだろ。」

「.....」

「不満な顔すんなって。で、俺が言いたいのは、お前の考えが少し甘

いって言いたいんだよね。」

「・・・」

「個性がない時代の映像作品って見たことあるか？特撮とか。いや、古今東西、ヒーロー物ってさあ、一度はライバルキャラか強敵に負けんだよ。そこからの主人公の復活劇とか面白いなだよね。」

「だからなんだ。チャンスをやれというなら断る。現実とは違うものだ。」

うっわあ、ド正論。さて、どうする。流石にこの距離だとナイフが刺さる方が早いよね。・・・しようがない、この手の輩に効く・・・はずの奥の手を使うか。

「終わりだ・・・インゲニウム。」

「待った！最後の質問だ！」

「・・・なんだ。」

「お前、オールマイト好きだよな。」

「尊敬している。彼こそが最高のヒーローだ。」

「そうか。ならもう知ってるよな？この前ヴィランに雄英高校が襲撃された事件のこと。そこでオールマイトが活躍してヴィランを追っ払ったって話は。」

「当たり前だ。」

うむ。これなら効きそうだな。

俺は何枚か用意している『とある映像』が入っているマイクロなチップを取り出した。

「さて、信じるか信じないかは勝手だが、これには例の事件の一部始終。オールマイトの活躍が入っている。」

「っ・・・」

「因みに俺には息子がいてな。コレのせいで朝から誰が保管するかで争いが起こったらしい。更に言うなら俺が持つてるコレ、コピー出来ないように細工してある。だから一定の人数にしか出回らないのよね。」

ムフ。確実に動揺していらっしやる。プルプル震えてるねえ。

「・・・本当に」

「入ってるよ。お前が見逃してくれるならあげるよ。どうせ陰ゲのことはヒーローとして再起不能にするまでも、殺しまではしない感じだったろ。これ以上危害を加えずに見逃しても変わりはないんじゃないやねえかな？」

「……」

「いらぬなら別に……」

「わかった。今は手を出さない。」

「よっしゃ。ほれ。」

投げたマイクロなチップを『ヒーロー殺し』は受けとる。だが直ぐに動こうとはしなかった

「どした？」

「何故投げてよこした。俺が受け取ったらインゲニウムに危害を加えるとは思わなかったのか？」

「思わんし。お前って言ったことは守るタイプだろ。さっきの話を聞いて分かったし。」

「……」

それを聞いて『ヒーロー殺し』は「そうか」と呟き、路地の更に奥の方へ消えていった。

「とりあえず病院行きますか。電話、電話つと。……もしもし、今から送るGPS座標に救急車よろしくー。」

さてと、陰ゲを病院に運んだら色んなところに連絡かあ。コレが一番めんどくせえなあ。

「さてと、現状確認つと。陰ゲの怪我は……腕がやられてる……『エンジン』も治るだけなら2ヶ月つとこか。まあ、コイツは主人公タイプだからな。絶対に個性の強化とか言い出すよなあ。個性の復活&強化で6ヶ月くらいかな。ま、とりあえずヒーローの手助けして脅威は退けたつとことで、ミッションコンプリートですわあ。」

救急車が来るまで『雄英体育祭』でも見るか。

……うつほー！流石雄英！女子の発育が最高だな！！

ちよっ！カメラ！もつとローアングルで撮れや！！

ん？騎手がない？いや、ジャージの下半身らしきものが…えつと、確か息子が『透明化』の個性の子がいるって言ってたよな…えつまさか上の方は裸なのか!!??

フォー…!!!マジかよ！騎馬の奴等ラッキーじゃねえかよ!!!なりてー！騎馬になりてーなあー!!!

後に、何かを感じ取った峰田母上に『おしおき』されたの言うまでもない。

言われた緑谷はハツとした顔をして慌てだす。

「つ、突っ込んで皆！取り返すんだ！」

他にも何か言っているが、もう用はない。次は峰田だ。

「よし、回避しつつ移動するぞ。」

「そうだな行こっ!?あ、足が!?!」

どうやら飯田の足が動かないらしい。何が原因かと思いい視線を落とすと見覚えのある紫色の玉を飯田は踏んでいた。

「轟さん、右です！氷の上ですわ！」

八百万の声で、そちらの方向を見ると奴はいた。

「あと20秒くらいか？行くぞ障子、蛙吹！フルアタックモード！」

「了解！」

やつと本気かよ、峰田。

氷の壁から飛んで此方に向かってきた峰田達。それに対して右手を振るい氷柱を作りだし、空中で障子の足を捕まえた。これで奴等は動けない。騎馬から降りるわけにはいかないからな。

「上からきます！避けてください！」

「っ!!」

八百万の言葉に反応し体を反らせると、今まで俺の頭があった場所に蛙吹の舌が伸びていた。

危なかった。

「左から緑谷さん達が！」

「くっ!!」

俺は咄嗟に左腕を上げ、ハチマキを奪われまいと防御したが、その腕に炎を生み出していた。

「あっっ！」

緑谷が熱によって怯んだ。だが俺はその光景を見て、動きが止まった。そして思考が始まる。

何故使った。絶対使いたくない『個性』。父親から受け継いでしまった『炎』の個性。あんなにも憎い個性を!!

そんな動きが止まった俺を緑谷達が逃すはずもなく

「っ！奪れた!!点数確認！1000万だよ、常闇君!!」

「こちら一本奪った！離脱するぞ！」

「くっ緑谷！待っ!？」

急に視界が黒くなり、体にも何かがかくつついていく。それを取ろうとすると、それに手がくっつき動かせなくなった。直ぐに思い出せた。確実に峰田の玉だ。

左を使うしかない状況だが、さっきの思考かそれを拒絶した。

そして

『3、2、1、終了ー！ー！！』

ボイスヒーローの声が響いた。

・・・俺は一体何を考えていた。何をしていた。思考がまとまらない。だが一つの言葉が出た。

「皆・・・すまない。」

八百万も上鳴も飯田もよくやってくれた。自分だ。自分だけが・・・

そんな後悔をしていると八百万から

「轟さん・・・謝る必要なんてありませんわ。だって第三種目に出れますわよ。」

八百万からの思わぬ言葉に

「バカな」

と言葉が出たが、誰かと被った。聞き覚えのある声だったが・・・

一体・・・

『残り5分！おっとこれは！轟の個性で氷の壁が出現!!緑谷と轟の一騎打ちだー!!』

「よし、行くぞ。」

・・・

「そうね。・・・どうしたの峰田ちゃん？」

あつ、いや、何でもない。行こうか。

どうもこんにちは。峰田実になった青年Aです。早速ですが・・・
やらかした。

やっちまったー!! やっちまったよ自分!!

何がって? いや、さつきね轟チームがさ、取り囲まれるように襲われたのよ。んで、障子が「襲う側に近づいてハチマキを取ろう」って言ったのよ。

ラッキーこれで感電&氷結くらって終われるじゃん原作サイコー。
とか思ったのよ。そしたらさ自分、峰田になる前の記憶でさ、ゲーム機のアダプターを悪戯して口に咥えて感電した辛かった思い出が甦ってね・・・障子のこと止めちやった。

結果、原作での感電&氷結状態になりませんでした。

「ナイス判断だったわ、峰田ちゃん。」

「流石だな、峰田。」

お、おう。ありがとう。

・・・褒めないで〜ここでめっちゃリタイヤしようとしてたんです。
二人を巻き込んで原作通り終わらせようとしてたんです。褒められる度に罪悪感が半端ないです。

「それにしても・・・ちよつと可哀想ね。」

「うむ。」

ちなみに可哀想とは目の前に広がっている状況です。轟チームに感電&氷結をされた人々のことである。しかも轟チームは、こんな惨状を作ったものの、近くにいたチームからハチマキを取っただけで、他のチームには触れずに1000万を狙うために早々と緑谷チームに向かつていったのだ。

とりあえずハチマキ回収する?

「・・・」

「そうね。」

蛙吹がケロつと言いながら舌を伸ばして回収していると

「おい！卑怯なことしてんじやねえよ。」

と怒っている声が。声がした方を見ると、そこには灰色の髪の毛に睫毛が固そうな男のチームがいた。

・・・誰？

「B組の鉄哲徹鐵だ！」

はあ、で、何ですかね？

「動けない奴等からハチマキを取ってんじやねえよ！卑怯だろうが！！」

ああ、なるほど。この方々は真つ正面から戦いたいタイプの人か。ふむふむ、ヒーローとして硬派で素晴らしいタイプですな。一理あるし。・・・でも言い方にイラツと来たので反論させていただこう。

笑止!!!

「なに!?!」

ならば貴様はヴィランが「動けないから助けて」と言ったら捕まえないのか！

「うぐつ!?!だ、だがこれは違うだろ！」

甘いなコイツ。言葉の弾丸で論破させて頂こうか。あく、あのゲームやりたくなってきた。

違わないね！これは将来プロとなった時の心構えの練習のようなもの！全ては、プロになった時に必要だから雄英が用意した競技だ！貴様は『雄英体育祭』がテレビで楽しませるだけのモノだと思っただのか？だとしたら心構えがなっていないな！雄英高校の理念を確認して出直してこい!!だいたい卑怯っつーなら、そっちの女の子の個性でこっそりハチマキ取るのもどうなのかね！

「[[ガフツ!!]]」

鉄哲チームは、全員真面目だったのかショックで膝をついてしまった。だが騎馬は崩れていない。器用である。

「峰田ちゃん、私達からハチマキを奪った人のこと知ってたの?」

いや、知らなかったけど、自分達のハチマキしてたし、奪られた時

に気がつかなかつたから『ツル』を使える個性の女の子をダチに聞いてんで、その子なら可能かなって・・・その騎馬の子ね。

いや〜いつの間にか取られてた時は、本当に原作の波が来ていて嬉しかった。ちなみに原作ではハチマキを取ったのは、鉄哲チームにいる個性『ツル』の塩崎茨さんって人です。

「そうなの。それなら取られた時に言っただけで済んだわ。自分の中の推理でも相談して欲しいわ。今度からお願いね。」

「すまんです。気をつけます。
なんか普通に注意されたというか、叱られたのが嬉しい・・・あれなんで？」

「・・・二人とも、ちよつといいか。」

「おっと、意識が何か別に逝ってた。いかんいかん。」

「何かしら？」

「この男が言っただけのことにも一理あると思っただけ。俺は少々思うところがある。このハチマキは俺達が持つべきものではないとな。」

「つまり動けなくした轟チームが持つべきハチマキじゃないかってことか？」

「ああ。」

なるほど。でも、こういう手柄の横取りも騎馬戦ではアリだとおもっただけであらう。そっかー。たぶんヒーロー目指してるだけに気になるんだろうなあ。・・・ああ、良いこと思い付いた。

「じゃあ、この点数を轟に届けよう。」

「なに？」「ケロ？」

「ヒーローにはサイドキックがいるからな。サイドキックは武器なり、移動手段なり色々サポートするもんだ。だから今からサイドキックとして働く練習と考えて動こう。」

「なるほど。だが・・・」

「私はいいわよ。本来なら轟ちゃんが持つべき点数ですもの。」

「すまない。」

「じゃあ、作戦変更。時間内に轟にハチマキを届けるってことで。
「ケロツ」「おう。」

・・・やったぜ。やってやったぜ。これでハチマキが全て轟に渡る。
つまり原作通り第二種目で敗退である。しかも電気で痺れるとか痛い
目をみることなく敗退である。原作よりスマートに敗退。スゲー
理想的やん。笑いが止まらんですよ。

「じゃあ時間も少ないし、さっさとレッツゴーだぜ。」

「ケロン」

ん？蛙吹さん、今なんかした？

「？別になんか変わったことはしてないわよ？」

あつそう。ならいいや。

.....

「なんとか登れたわね。障子ちゃん、お疲れ様。」

「氷の作り方が少し雑だったからな。引っ掛かりがあつて良かった。」

「なんとか氷の壁を登りきり、上から様子を確認すると何と飯田が凄
いスピードで此方に来た。そして緑谷に何か言っている。」

「凄いわ、飯田ちゃん。でもこれで逃げられちゃったらハチマキ渡せ
ないわね。」

「じゃあ、コレで。ストップさせよう。」

「自分は飯田が一步踏み出すと予想する所に『もぎもぎ』を投げた。
「それは緑谷達に大きなチャンスにならないか？」

.....あ。

飯田が『もぎもぎ』を踏み慌てっていると、八百万が此方を見て轟に
報告している。そして轟は此方を敵意のある眼で見えてきた。

あつごめん。そうでなくて何でハチマキ持ってるん？

「おかしなこと言うのね。峰田ちゃんが倒してくれたじゃない。口撃で。」

・・・攻撃？もしや口（くち）って漢字で書いちゃう口撃でしょうか。つまり言い負かしたんだから奪っちゃったってことかな？そんな・・・

「バカな」

誰かと被った。言葉が聞こえた方を確認すると『もぎもぎ』をくつつけたままの轟がいた。

とりあえず酷いビジュアルで可哀想なので『もぎもぎ』を取ってやった。

そして自分と目が合うと睨み付けてこう言った。

「何でこんなことをした。」

うわーこれ何言っても怒られるパターンや。しょうがない。逃げよう。

とりあえずニツコリ笑って、敵意を煽らずに障子達の元へと駆け出した。

?????????????
・・・あつ、すげー寒気する。

峰田は何も言わず、ニヤリと笑って俺の目の前から去って行った。
『雄英体育祭』。毎年恒例ならば、最後はトーナメントのバトルと決まっていたはず。つまりは、今まで勝負をしろと言ってもしなかったのは、全てこの大舞台で決めようってことだったらしい。

「上等だ。」

俺は静かに闘志を燃やし、峰田の背中を見続けた。